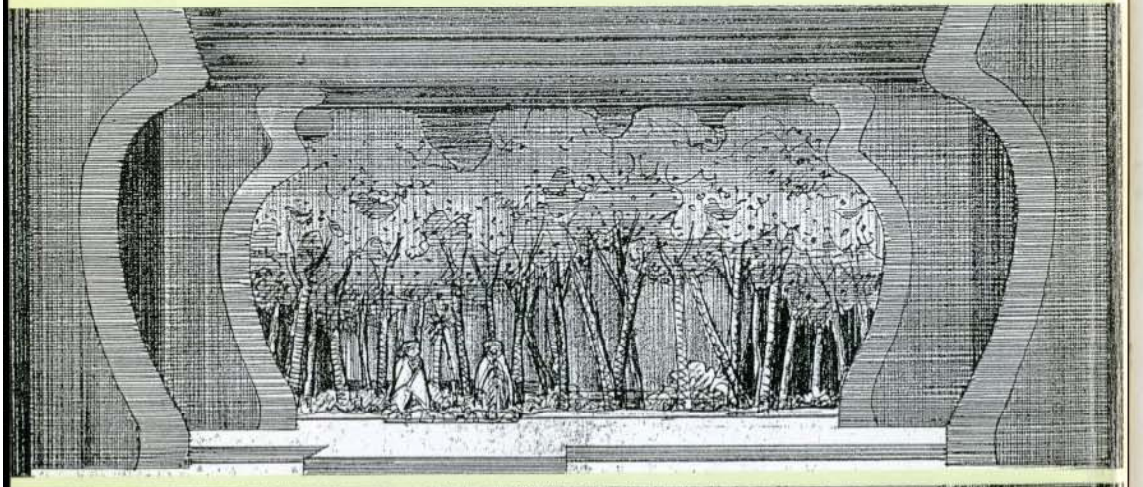
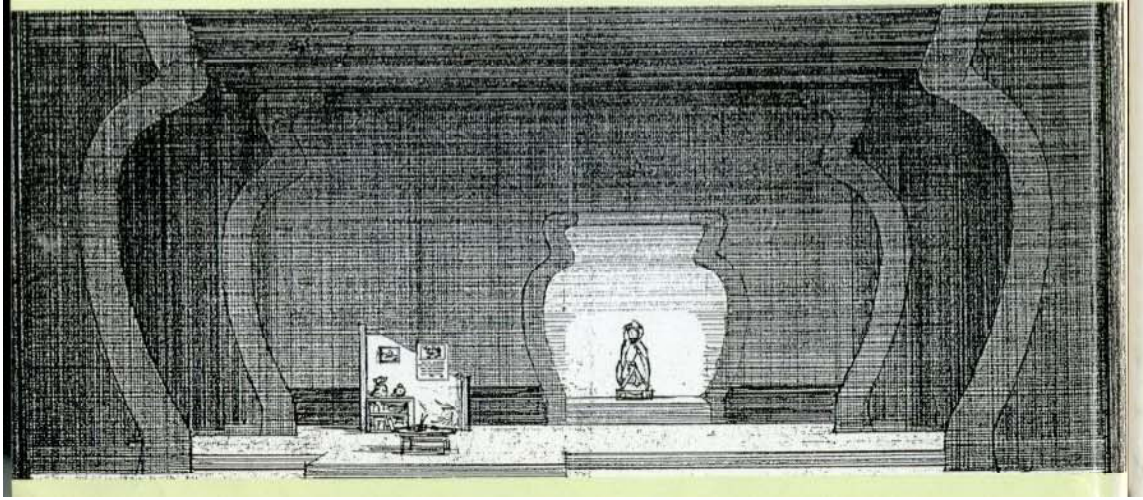
全日本リアリズム演劇会議

演劇会議

VOL.102　2000年4月

リアリズムとテクストの問題　岩淵　達治
'99 八雲国際演劇祭　報告記　貝山　武久
戯曲　五月の陽光（ひざし）　楠本　幸男





第8回全日本演劇フェスティバル

銀河ホール地域演劇祭と共催

□ 日　時　2000年8月25日（金）午後4時受付開始
26日（土）
27日（日）午後1時閉会

□ 場　所　岩手県和賀郡湯田町「ゆだ文化創造館、銀河ホール・Uホール」
〒029-5511岩田県和賀郡湯田町上野々39地割195番地2
TEL.0197(82)3240　FAX.0197(82)2883

□ 主　催　第8回全日本演劇フェスティバル・銀河ホール地域演劇祭実行委員会
（構成団体　全日本リアリズム演劇会議　湯田町）
実行委員長　こばやしひろし全リ演議長／副委員長　菅原信夫湯田町長

□ 後　援　湯田町観光協会　湯田町芸術文化協会

□ 参加費　ひとり 16,000円　温泉旅館2泊5食・観劇料

問い合わせ先　TEL044-511-4951　FAX044-533-6694　京浜協同劇団　城谷　護
TEL0177-77-4677(FAX兼)　青森市中央2-4-6　劇団支木　中野　健

西日本劇作家の会編・編集出版

戯曲集『ドラマの森』第三集

5月末刊行　《定価２２００円》

《掲載作品》

清水　巖　作：『1995こうべ曼陀羅』（2幕3場）
神戸在住の作家清水巖が、どうしても書かなければならなかった震災をめぐる人間ドラマ。ドキュメントタッチで描き、作者のヒューマニズムが胸にせまる。

井上満寿夫　作：『浪華一揆大塩乱始末記』（十段）
幕末体制を足元から揺るがした世に言う「大塩平八郎の乱」。屈折した平八郎の生身の姿を凝視しながら、変革期の人間像をみごとに描ききった異色作。

楠本幸男　作：『月の砂漠』（1幕）
平凡な家庭にとつぜん、次々と襲いかかる現実……。砂漠のような現代の荒地を何処へ歩むのか？　楠本幸男の新境地。

芳地隆介　作：『華・散る』（前口上と7場12景）
この国の女性の自立への姿を、福田英子を軸にこの人ならではの乾いたタッチで重層的に描いた一代記もの。芳地作品の新しい展開。

舞台公演

◇演劇集団あり
『燃えてさうらふ』
9月26日
大和屋かほる／作　田中小百合／演出

◇演劇集団土くれ
『早春スケッチブック』
10月7～9日
山田太一／作　石塚幹雄／演出

◇演劇集団石るつ
『入口と出口』
イエンセン神父の人生観―
10月22・23日
コワコフスキー／作　境野修次／演出

劇団支木『甕・ヤポネシア』
（上）津軽の山裾　（下）基本舞台
舞台美術　孫福　剛久

「表紙のことば」

中野　健

舞台美術家、孫福剛久さん。相当のお歳であるに違いないのだが、感性若々しく行動的かつ洒落な人である。「精一杯良い舞台を目指そうよ。予算のないことはわかってるからさァ、知恵を出しあって」芝居の空間を創る情熱は青年のそれである。『甕（みか）・ヤポネシア』の世界は、新しいスタッフとの出会いで拓けたのである。

（劇団支木・演出家）

舞台

◇劇団湖（うみ）
『冬の提灯』第2話
10月23・24日
渋谷健一／作　飯田信之／演出

◇黒石演劇研究会
『鉄道員（ぽっぽや）』
10月24日
浅田次郎／原作　古川幸仁／演出
山本忠利／脚本

公演

◇劇団名芸
『302号室の春』
11月26～28日
栗木英章／作　片野耕治／演出

舞台

◇八雲アクターズ
『二十二夜待ち』
11月11・12日
木下順二／作　園山士筆／演出

◇劇団かすがい
『カタクチイワシ』
11月18～23日
森田　有／作　樋口伸廣／演出

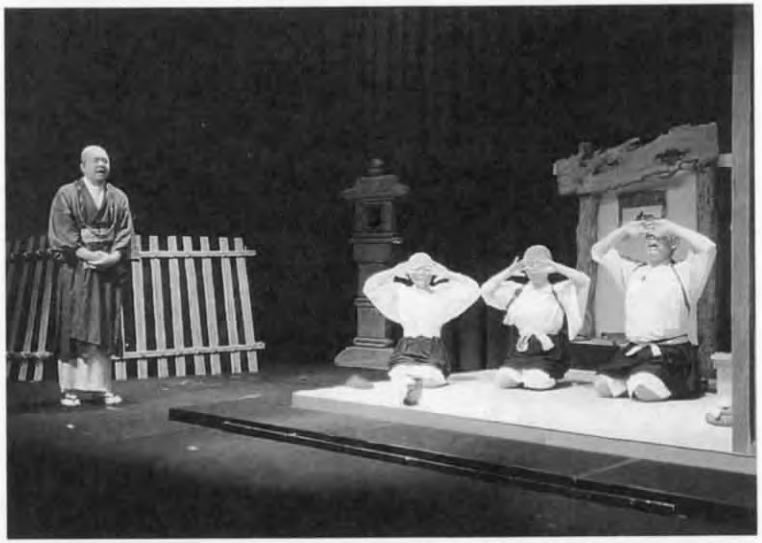
◇劇団やませ
『霧笛哭く街にて』～墓獅子幻想
11月12・13日
桭谷伸夫／作　加藤健太郎／演出

公演

舞台

◇劇団はぐるま
『ジプシー』
11月26日～12月5日
横内謙介／作　三島幸司／演出

◇劇団海鳴り
『ふす』
12月12日
柴崎卓三／作　いがらし陽子／演出



◇劇団埼芸
『初恋』
12月4・5日
村山知義／作　鹿喰きよし／演出

公演

◇人間座
『子狐たち』
12月16～19日、1月13～16日
リリアン・ヘルマン／作　藤沢　薫／演出
小田島雄志／訳

◇劇団潮流
『思い出のブライトン・ビーチ』
1月28～30日
ニール・サイモン／作　藤本栄治／演出

◇東京芸術座
『あの日私は』
1月29日～2月2日
乾　一雄／構成　山口みる／演出

舞台

公演

舞台

◇劇団上野市民劇場
『にんじん』
1月30日
J・ルナール／作　杉森正美／演出

◇劇団四紀会
『ぼくはくまです…?』
2月6日
イエルク・シュタイナー／作
岸本敏朗／演出

◇演劇集団和歌山
『恋歌がきこえる』
10月8、9日　15～17日
小池倫代／作　水口広平／演出

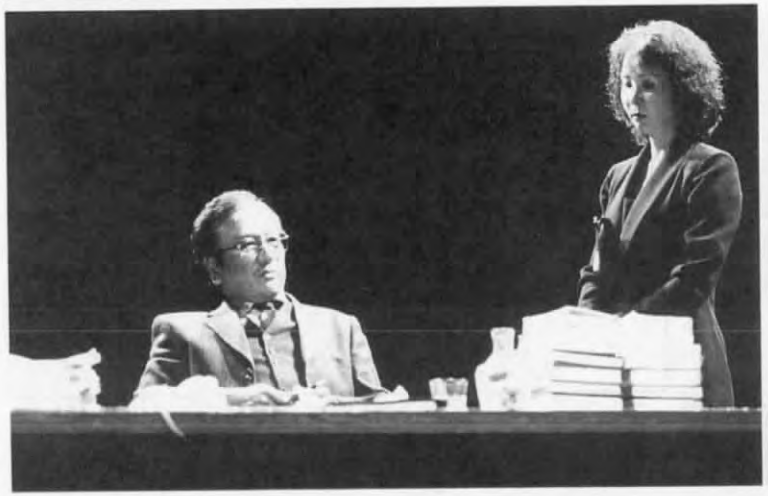
公演

舞台

◇劇団大阪
『華、散る』
10月22～24日
芳地隆介／作　熊本　一／演出

◇神戸職演連
『法王庁の避妊法』
2月12、13日
飯島早苗、鈴木裕美／作
菊地照一／演出

◇青年劇場
『Ｒｅａｄｅｒ』
2月23～27日
アリエル・ドーフマン／作　水谷八也／訳
松波喬介／演出



公演

2000年4月8日発行　第102号

演劇会議

◆もくじ◆

グラビア（舞台）…… 1

2000年4月中旬以降の公演 …… 8

リアリズムシリーズ⑬　リアリズムとテクストの問題 ……岩淵　達治　10

99八雲国際演劇祭　報告記 ……貝山　武久　17

銀河ホールから何を学ぶか ……こばやしひろし　30

『日本演劇学会紀要』38号「演劇のリアリズム」特集について …… 瀬戸　宏　34

ロシア演劇レポート⑰　私の30年物語（1）……桜井　郁子　36

《観劇レポート》　第37回東京働くものの演劇祭 …… 43

演劇集団土くれ『早春スケッチブック』／演劇サークル「麦の会」『黒髪の』
演劇集団石るつ『入口と出口』／劇団遊ＰＡＣ『ハックルベリーにさようなら』
ルクト舎『殴られてもブルース』／劇団埼芸　『初恋』

劇評　黒石演劇研究会『鉄道員（ぽっぽや）』 ……城谷　護　46

教師の劇団創芸の『トラブル　トレイン』 …… 〃　47

ＮＧキッズ（名古屋劇団協議会）の『窮鼠猫をかめ』 ……栗木　英章　49

人間座『子狐たち』 ……草川八重子　52

劇団未来『レンタルファミリー』 ……神沢　和明　54

神戸職演連『法王庁の避妊法』 …… 〃　56

劇団きづがわ『紙屋悦子の青春』 ……阿部　好一　57

劇団大阪『華、散る』 ……今泉おさむ　59

劇団息吹『煙が目にしみる』 …… 〃　60

〈投稿〉劇団だいこん座「父と呼べ」 ……戸村　昌也　51

北から南から（劇団通信） …… 62

戯曲　五月の陽光 ……楠本　幸男　81

情報ＢＯＸ …… 104

東会議総会・基調報告　104
「西日本劇作家の会」・第16回総会　110
山静ブロックゼミナール　111
大阪自演連新春交流会　112
劇団はぐるま45周年　祝賀会が盛大に　113
「演劇集団和歌山」30周年のつどい　114
全リ演ニュース　116

「100号記念戯曲集」を読んで ……118

2000年4月中旬以降の公演

●劇団通信の中から４月中旬以降の公演や行事をまとめましたので、都合のつく方はぜひ観劇し合って下さい。

青年劇場	4/14.15	前進座劇場	菜の花ちぶそでい	高橋正圀／脚本・松波喬介／演出
劇団名芸	4/18～30	紀伊国屋サザンシアター	頭痛肩こり樋口一葉	井上ひさし／作・佐野むつみ／演出
劇団銅鑼	4/16～18	名芸平針小劇場	樹々の息吹	平石耕一／作・演出
劇団大阪	4/25～28	アクトホール	光る時間	渡辺えり子／作・熊本　一／演出
だいこん座	5/18～21	5/25～28　谷町劇場	ワルのポケット	灰谷健次郎／作・大橋喜一／脚色
演劇集団あり	5/20	鶴岡市中央公民館ホール	アリゲーターダンス	和田憲明／作・田中小百合／演出
劇団ＲＩＮ	5/21		新アンドロイドの子守唄	
劇団石るつ	5/28	静岡市民文化会館中ホール	天体症候群	いとうエリコ／台本・演出
大阪府職劇研	6/8.9	蔡下文化センター	金翅雀の群れ	鐘下辰男／作・三輪智津子／演出
劇団あしぶえ	6/8～11	谷町劇場	セロ弾きのゴーシュ	
	6/11.18.7/8.9.23	しいの実シアター	ブラボーファーブル先生	
劇団埼芸	10/22.11/5.9.26	しいの実シアター	風・夏冬	相沢史郎／作・佐藤逸平／上演台本・由布木一平／演出
	7/22.28	浦和市民会館		
	9/30.10/11	三百人劇場		
関西芸術座	7/28～8/6	関芸スタジオ	猫はしる	工藤直子／原作・勇来佳加／脚色・松本昇三／演出
劇団ＲＩＮ	8/18～20	静岡市民文化会館中ホール	生命の樹	
青年劇場	9/1～5	紀伊国屋ホール	夜明けの町	E・D・フィリッポ／原作・藤原新平／翻案・脚色・演出
	9/6	大田区民プラザ		
潮流	9/1.2	厚生年金会館中ホール	乱れて熱き吾が身には	吉永仁郎／作・藤本栄治／演出
劇団四紀会	9/2.3	シーガルホール	見よ、飛行機の高く飛べるを	永井愛／作・森　卓也／演出
演劇集団和歌山	9/15	県民文化会館	馬	阪中正夫／作・楠本幸男／演出
劇団大阪	10/20～22	近鉄小劇場	海の沸点	坂手洋二／作・堀江ひろゆき／演出

リアリズムシリーズ ⑬

リアリズムとテクストの問題

演出家　岩淵　達治

反現実の演劇

全リ演のリアリズムの研究シリーズで、以前ブレヒトのリアリズムについて書かせていただいたことがあるが、それは誤解を解きたい気持ちもあって執筆したものだ。あまり著書のない私は、一九七二年に出した「反現実の演劇の論理」という本がいまだに主著のようなものだが、この「反現実」という言い方がリアリズムを否定する立場と思われると困るのだ。本誌に野村喬氏が寄稿された時、私のこの著書を引用されたが、それを私がリアリズム反対の立場と取られた方もおいでだったようなのですこし補足させていただきたい。

私が反現実という言葉を使ったのは、当時、日本の新劇では、いまだに偏狭な社会主義リアリズムだけを信奉し、それ以外のものはすべて反リアリズムだとする偏狭な姿勢をとる人々もいたので、いわゆる糞リアリズムばかりがリアリズムではないことを強調したかっただけだ。ブレヒトには亡命者たちの間で行なわれた表現主義論争で、ルカーチのいう偏狭なリアリズムを批判するために書いた「リアリズムの広さと多様性」という論文がある（ブレヒトは亡命者間での論争は反ファシズム運動全般には有害だと判断したために、この論文は戦後まで発表しなかった）。ルカーチは学識ある人物で、左翼文学の指導的理論家であったが、リアリズムについては驚くべき偏見を持ち、間接にはその理論が実験的な文学芸術活動の圧殺に力を貸すことになった。ロマン主義はすべて反動と規定してしまうのもずいぶん乱暴な考え方だ。ブレヒトがイギリスのロマン派の作家シェリーの「時代錯誤の行列」という作品を例にあげてこの作品の政治的な有効性を指摘しているのは、ルカーチに弾劾された表現主義を援護する戦術もこめられていたのだろう。ブレヒトは表現主義を好んでいたわけではないが、こういう教条的な路線の押しつけに危険なものを感じとったのだろう。

私が「反現実」という言葉を使ったのは、イリュージョニズムの演劇に反対するという意味だった。蛇足のようだが、イリュージョニズムを説明しておくと、これは幻想主義とはまったく関係のない概念で、舞台で演じられている出来事を、現実にそこで起こっている事件だと思い込んでしまう錯覚を狙った演劇のことなのだ。舞台装置や照明で舞台の光景を本物そっくりであるように見せかけたり、メークや衣装をつけたりするのも、この本物らしく見せるという要請のためであり、観客はそれによって舞台に感情移入や同化がしやすくなるのである。役者は役になるのではなく、役を示すのだと主張し、観客に芝居をしていることを隠す必要は全くないと言ったブレヒトの演劇は、まさに反イリュージョニズムの演劇といってよいが、そのブレヒトはリアリズムに反対していた訳ではない。むしろ忠実なリアリズムと呼ぶにはあまりにも嘘が多いのは、社会主義リアリズム路線で推奨されたような作品なのだ。社会主義リアリズムのパターンとして唱えられたのが、典型状況における典型性格というやつで、戦後演劇を始めた世代はこの呪縛にとらわれていた。この典型性格が観客がその人物から学べるような社会主義的ヒーローである場合、すでにリアリティは希薄だった。一九五八年のブレヒトの「ガリレイの生涯」が与えた強烈なインパクトはなによりもまず主人公が否定的ヒーローであることだった。ただ反英雄といってしまうと底が浅くなるが、ともかく人物を矛盾像として提示するという書式はこの国のリアリズムを深化させたといえるのである。

岩淵（いわぶち）　達治（たつじ）　氏
１９２７年生まれ。
演出家。
学習院大学名誉教授。
著訳書『反現実の演劇の論理』『ブレヒト――戯曲作品とその遺産』『ブレヒト』、ブレヒト『ガリレイの生涯』、ヴェデキント『地霊・パンドラの箱――ルル・二部作』『三文オペラを読む』『ブレヒト全集』（未来社・全8巻）

ポストドラマの演劇

ちょっと一足飛びに現在の時点に視座を据えてみよう。最近ではポストモダンの演劇という流行語からポストドラマという言葉が生まれた。昨年秋にドイツで「ポストドラマの演劇」という五百ページの大著が出版されたが、これに目を走らせてみて愕然とした。ストーリー（プロット）をもつドラマ、作品のテーマ、性格を備えた人物、役、行動の動機づけなどを一切否定するような演劇の時代が到来する（すでに到来した）という本である。この本の著者ハンス・テイース・レーマンはフランクフルト大学教授で、知らない仲ではない。壁が崩壊して最初のブレヒト会議は彼が主催者だったから、その時に知り合ったのだが、すでにこのシンポジウムにハイナー・ミュラーがパネラーだったことからも分かるように、ブレヒトの遺産継承はミュラーの線を通じてのみ可能だという見解であったことが分かる。私はハイナー・ミュラーの紹介者でもあり、ミュラーの難解な作品の解釈にはレーマンの解説をずいぶん参考にさせてもらったが、少なくともそのころのミュラーの作品を解釈する彼の手つきは、従来の解釈の線で捕えられるものであったし、私もミュラーの舞台化を試みたときには基本的なコンセプトから出発していた。ミュラーは今は一部に熱烈なファンがいて、閉鎖的な舞台を作っているが、私は大抵の上演に対しては批判的だし、この線はもはやリアリズムだとは思わない。私の訳したミュラー作品、特に「ハムレットマシーン」などもよく取り上げられているが、これらの舞台化にはほとんど不満だし批判的で、翻訳者である私が結果的にこんな方向の元凶になってしまったことには耐えられない思いがする。だがミュラー自身がポストモダンの演劇というものに大きな影響を与えたことは事実であり、ドラマ形式の崩壊が一九七〇年代の彼の作風の変化と関係があることは事実だ。「ハムレットマシーン」は一九七七年に執筆されたが、当時の東独では出版できず、初演は西欧のほうが先だった。私がミュラーに興味をもったのは、彼が体制批判のために故意に分かり難い劇を書いたのではないかと思ったからだった。ミュラーが当時評価したのはロバート・ウィルソンの演出した舞台だったが、そこで彼は次のように述べていた。

（H・ミュラー「誤謬集2」からの引用）。

「啓蒙主義の誤った伝統ともいえる誤った概念把握というものが存在する。私はテクスト、文学的テクスト

を読む場合、まずテクストを理解しようとはしない。私はなんらかの意味でそれを受け入れるが、それは内容を把握するというのとは違う感性的な行為である。そして一方に、テクストを感性で知覚することを阻むような理性主義の伝統というものがある。テクストはまず感性的に知覚してはじめて、その後で理解もできるようになるのである。理解というものは過程のひとつであって、最初のアプローチではない」

日本の近代劇と自然主義劇

この感性に重点を移した発言は、理性を基盤とし、解釈を出発点とした従来の西欧の演劇の風土のなかに新たなパラダイムを提起したものだと考えれば大変挑発的だが、わが国のように感性的な受容が主流であったところでは、ミュラーの発言はむしろ本家帰りを促進させることにしかならないのではないかと思う。いわばプレモダンの演劇といってもいい日本演劇の明治以後の課題のひとつは（歌舞伎における活歴の試みも含めて）西欧のドラマのような論理的構造をもったドラマを導入することであり、それは小山内薫や島村抱月の運動によって具体化したが、それが徹底しなかったのは両者に見られる印象主義、新ロマン主義、象徴主義、審美主義的傾向への愛好であった。リアリズムという面から見るならば、自然主義へのアプローチがお座なりであったことだ。もちろん自然主義はイリュージョニズムに捕われてはいたが、ドラマの論理的構造は正確だった。現在ブームになっている泉鏡花は、日本の自然主義流行時代にロマン主義的な劇を書いたために、時流から取り残されて評価されなかった、という説があるが、私には劇界でそれほど自然主義が主流だった時代があったかをはなはだ疑問に思っている（散文についてはややそう言えるかもしれないが）。

近代劇と密接な関係を持つ自然主義劇のひとつの新しさは、演劇を社会問題の提起と論争の場にしたことだった。この点だけから言えばブレヒトは、反自然主義作家よりも自然主義の立場を受け継いでいるとさえ言える。ブレヒトが否定したのは自然主義においてもっとも顕著になったイリュージョニズムであり、その否定は演劇の社会性を強調するためになされたのである。ブレヒトが芝居が芝居であることを隠そうとしなかったのは、幻想破壊という美学的な実験のためではなく、イリュージョニズムが社会問題の学習や討論の邪魔になるからであった。ブレヒトの劇は造形においては自然主義よりもはる

かにリアルで、自然主義にそれ以前の時代の残滓として残ったヒーロー像や感傷性などとは全く無縁である。また日本でほとんど時差なしで紹介されるようになった表現主義の演劇と比較した場合、抽象性や観念性を嫌うブレヒトのほうがはるかにリアリズムに近いこともいうまでもないことだ。ここでまた時代を戻して、ブレヒトが世界的な注目を集めるようになったころに登場した不条理演劇に触れてみよう。

不条理劇の場合

ベケットの「ゴドーを待ちながら」がパリで初演されたのは一九五三年（日本では一九六〇年）である。不条理劇とブレヒト劇の基本的な違いは、不条理劇に明確な時代設定や人物の職業、背景などが欠落していることだが、この差異は自然主義の場合も同じである。不条理劇は時代や歴史的背景とは一切関係ない人間一般の存在の問題をテーマにした。歴史の発展を肯定しないから少しでも社会主義的な（あるいは肯定的世界観をもつすべての体制的な）作品とは対立する。不条理劇が最初アンティアトルつまり反演劇と呼ばれたのは、劇的対立を欠き、ストーリーが進展しないことだった。「ゴドー」では二人の人物が野原でゴドーという人物（神かもしれない）を待っている状況だけが描かれ、ゴドーは最後まで現れないのだから、筋の発展がなくこれまでのドラマを否定したものと受け取られたのである。日本では不条理劇の影響はブレヒト以上に強かったといえるだろう。西欧でもポストモダンが問題になる直前は、スイスの劇作家デュレンマットが言ったように将来の演劇はブレヒトあるいは不条理劇（またはその総合）という見取り図が示された。反演劇といわれた不条理劇は従来の演劇のなかに大きな場を与えられることになったのだ。日本でも不条理劇はいわゆるアングラよりはずっと演劇的で、不条理劇の影響から出発した別役実などは新劇のなかに定着した。ただ不条理劇はリアリズムではない。（演技には日常的な写実が必要とされるとはいえ）それは時代や環境という要素が存在しないからである。ブレヒトは「ゴドー」に興味を持ち、改作に取りかかったが、彼が真っ先に行なったのは、二人の浮浪人の身分、職業（前職）を決めることであった。マルクス主義者のエルンスト・フィッシャーは、ベケットの「勝負の終わり」の時代を核戦争以後とし、二人の人物ハムとクローヴは主従関係という階級的視点を持ち込む。不条理劇は進歩的世界観を否定するものという見地から絶対に自分の演出作品に

取り上げなかったのは日本では千田是也、外国ではイタリアのストレーレルがいる。しかし不条理劇には反体制的な意味を担わせることはできるので、長谷川四郎などの関心はそういう側面をもっていたのだと思う。旧共産圏でも不条理劇は初期には厳禁されていたがそのうち体制批判の隠れ蓑として徐々に利用されるようになったのである。ポストドラマという立場から見ると、かつて反演劇と呼ばれた不条理劇さえも現在では「ドラマ」の範疇に入るものと見なされるだろう（この事情は、別役実がアングラ劇でなく新劇に登録されている事情とやや似ている）。

ポストドラマと日本のアングラ劇

レーマンはポストドラマとの関連で七十六人の演劇人（ドラマではないのだから作家という言葉は使えない）を挙げているが、何人かは日本でも客演によってかなりよく知られている。例えばロバート（ポップ）・ウィルソン、舞踏演劇のピナ・バウシュ、西武パルコやシアター・カイでよく客演していたタデウシュ・カントール、ヤン・ファーブル、作曲家でもあるハイナー・ゲッベルスなどである。これらの作品は上演というよりパフォーマンスと言ったほうが適しているだろう。これらの人々のパフォーマンスでは、テクストが使われている場合もあるが、従来の演劇のテクストとは異なって意味内容やストーリーを担っていないという点で共通しているし、言葉というバリアがないというまさにそのために、国際的な受容が容易なのである。日本の舞踏がすでに西欧語でブトー・ダンスとして定着しているのも、テクストの介在を必要としないからである。

日本のアングラ劇の登場は六十年代の前半であり、テクストはまだ放棄されていなかったが、論理的な整合性を欠くという意味ではポストモダンの先駆現象とみてもよい部分があった。「新劇」誌の岸田戯曲賞が唐十郎に与えられた時、審査員だった芥川比呂志が激昂して審査員を辞退すると言ったという話があるが、戯曲の書法は明らかに変わってきていたのである。佐藤信の「わたしのビートルズ」に対する劇作家大橋喜一氏の誠実なアプローチは、アングラ劇との書法の亀裂を明らかにしただけだった。小林ひろし氏のあげた肉体の復権という要素については、テクストなしのパフォーマンスならば肯定できる部分もあるが、鈴木忠志氏のように、シェイクスピアやギリシア劇のテクストを手段に使うことは全く理解に苦しむ。これらのテクストがただ手段に用いられて

いるだけで、イントネーションがめちゃくちゃのために、内容を聞き取ることはほとんど不可能だからである。

ブレヒトのソング

リアリズムの演劇はあくまでもテクストが中心でなければならない。この辺で私の分野であるブレヒトに戻って駄文の締めをしたい。ブレヒトの作品が普通のリアリズム演劇と違うのは、音楽が使用されていることだが、それは日本から見ればずっと論理的だった西欧のドラマさえも、まだ情緒過多とし、芝居の流れを断ち切るために音楽が挿入されているのである。ミュージカルならば音楽は情緒をさらに高めるために入ってくるが、ブレヒトの歌はいわば情緒を殺すために挿入される。したがって従来のオペラなどとも違って、歌詞は台詞と同じように絶対に聞き取れるものでなければならない。ところがブレヒトとミュージカルの区別がつかず、歌となればやたらにミュージカルっぽい振り付けをする舞台がやたらに目につくのである。

先日横浜で上演された加藤直演出の「三文オペラ」もそうであった。とくにフィナーレの実にブレヒトらしい皮肉な歌詞は全くいい加減なものに変えられていたが、正しい歌詞でもあんな目まぐるしい演出ではどうせ聞き取れなかっただろう（フィナーレの歌詞については拙著「三文オペラを読む」（岩波書店）を参照されたい）。もっと腹が立ったのは、俳優座でロシアの若い演出家のやった「肝っ玉おっ母」である。私の訳した歌詞だけは使ったが、すべての歌に馬鹿げた振り付けをしたので、観客は落ち着いて歌詞の内容を聞くどころではなかったと思う。この作品で振り付けがあるのは、原作にも指定がある「女と兵隊の歌」だけで、あとの歌は演奏会のように、なにも動作をせず（あるいは動きを最小限に止めて）内容を伝えることに専心すべきなのだ。それを大抵は間違った絵解きのような振り付けをするので、目障りで歌詞に集中することなど出来っこはない。頭に来ていた私に追い討ちをかけるような劇評（七字英輔）もあった。歌詞がよく聞き取れないから、デッサウの曲は日本では無理だというのである。冗談ではない。あれだけちゃらちゃら動かれたら、どんな歌の歌詞だって聞き取れるはずがないのである。

もう原稿の制限をオーバーしてしまったので、歌詞のテクスト重視もリアリズムに必要だというせわしない発言だけ付け加えておこう。

99八雲国際演劇祭　報告記

演出家・メープルリーフ／シアター代表　貝山　武久

貝山武久氏
（八雲村国際演劇祭審査委員長）

私と〈しいの実シアター〉との出合い

私と八雲村の〈しいの実シアター〉との初めての出合いは何年前であったろうか。たしか日本演出者協会の事務局長になって間もなくの頃であったから6、7年前だろう。同じ協会員である劇団あしぶえの園山土筆さんから、今度新しく島根県八雲村に建設されるというシアターへの、資金カンパの要請がまわって来た。恥かしいぐらいの額を、それでも気持だけのつもりで送ったのを憶えている。

その後、私の所属していた劇団文化座の「荷車の歌」が、各地の演劇鑑賞会の例会として再度採り上げられ、全国巡演を果たす機会を得た。私のその折の役割は、現地協力出演の子供さんに演技をつけ、併せて事前の演劇講座を開いて会員さんたちとの交流を果たす、というものであった。たまたま松江市民劇場をまわった時、会員のMさんから「八雲村のしいの実シアターには行かれました?」と問われた。園山さんのことをはっと思い出しつつ、「いえ、まだなんですけど」と答えたら、「よかったら明日ご案内しましょうか?」というわけでMさんが翌日、車で私を八雲村まで案内してくれた。聞けばMさんのご主人は、しいの実シアターの設計に関わったとのこと。

松江市を出発して半時間も経たないうちに車は八雲村入りした。園山さんと再会、シアター内を案内していただく。

木材がかもし出す、やさしさと温もりを感じさせる、100人ちょっとが座れるという手造りの劇場、それが〈しいの実シアター〉であった。その折の土筆さんの言葉の端々に、

この劇場を拠点とするこれからの芝居づくりと、国際演劇祭開催にむけての、並々ならぬ情熱が感じとられた。海外から演劇祭開催の実施要項の書かれた英語の書類が、土筆さんの机の上に山積みされていた。

あれから数年しか経ていないのに、園山さんと劇団あしぶえは、着実にあの折の言葉を実践していった。代表作の「セロ弾きのゴーシュ」をもって、アメリカやカナダの国際演劇祭に参加、グランプリを獲得して凱旋するなど、華々しい活躍をする一方、95年に完成した〈しいの実シアター〉の柿落し記念公演として「星降る里の演劇フェスティバル」を開催、平石耕一氏の新作への意欲的な取り組みや、〈しいの実シアター演劇楽校〉と称した演劇ワークショップの実施などなど、国内的にも着々と成果を上げて来た。そして今回、それらの積み重ねの上に立って、地元八雲村で初めて開催する99国際演劇祭である。

当然、開催ホスト国としての、実施責任の重圧ということもあったのであろう。最終日、演劇祭の閉会宣言に際して、普段陽気で気丈な土筆さんが、さすがにキラリと眼に光るものを見せていた、その一事がこれまでに至る彼女の苦労の道程を、雄弁に物語っていたように私には感じられた。

そんな訳で今回の私は、審査員という重要なパートで招かれていたにもかかわらず、これまでのいきさつから、いわば応援団の一員になったみたいな気持ちでの現地入りだっただけに、厳正を旨とする審査員と程遠い存在であったことは、だれよりも自分自身がよく知っていた。しかし3日間の開催日を挟んで5日の滞在は、随所で私に思いがけない発見をもたらしてくれ、終ってみれば期待以上の収穫を与えてくれたフェスティバルであった。

以下は私の、主観だらけの貧しい報告記である。

確固としたコンセプト
「暮らしの中に演劇を」

まずは今回の演劇祭の開催のコンセプトであるが、文字どおりそれは〈地域の人々と共に芝居づくりをすすめ、演劇を暮らしの中へ浸透させよう〉という理念から出発したものだったと言えよう。そしてそれは、地域の人々と、行政と、創造団体の三位一体となった〈演劇によるまちづくり〉を目指すものであった。

〈演劇を暮らしの中へ〉の言葉は、私にとっての懐かしい響きを持った言葉であり、ほぼ40年前、学業を放り投げて演劇クラブ活動にのめり込んでいた頃、客席にいる人たちとの一体感を求めて、互いの生き方や生

活を、演劇を通して交流しようと、「生活に根ざした演劇」を標榜した、ふとそのことが連想された。しかしもちろんそれとは違うが、今回この八雲村に来てみて、「演劇を暮らしの中へ」浸透させようとする思いが、なぜか素直にこちらの腑に落ちてくるのを感じるのだ。そしてそれは現在の日本の、いわば〈何でもあり〉といった大都市中心の演劇状況とは、明らかに違った何かなのである。

今日の都市における劇場の多くが、貸し劇場であるという特性からか、大多数の観客は、いわば自分の好みの演し物を求めて、あれこれの劇場を観歩く、というのが一般的な現実である。しかし稀には、地域を中心として、そこに住む人々が集まる、といった劇場も存在する。海外にはこうしたスタイルの劇場が多く、しかもその地域に住む人々の人口比と、劇場数のバランスの良いところほど、理想的な劇場の立地条件となる。私がかつて十数年前、研修先としていたカナダのバンクーバー市などは、まさしくこの条件にぴったりといった感じで、今、そこの地域の劇場で上演されている劇やオペラが、その地域に住む人たち同士の社交と交流に、欠かせぬ話題を提供しているのを眼のあたりにして、うらやましくさえ思った。しかもそこに集う人たちの、老若男女のバランス比が良く、一定年齢層の若者たちだけが集中しがちな、日本の演劇文化状況とは異なった、市民的な広がりを感じさせる客席の印象なのだ。

これが文化的な厚みということなのかも知れない。いうなれば点と線だけではない、面としての地域性が感じられる、ということである。

今回のフェスティバルには、まずそれが感じられた。

このことは、地域に住む人たちと創造団体との結び付きだけではない、行政との共同歩調ということがあってこそ、初めて達成される質のものであろう。いやむしろそれは、不可欠の条件といっていいかも知れない。

小学校を訪問

八雲村の場合、創造側が希求するものと、行政側が求めるものとが、いい形で一致したということが両者にとっての幸運で、その間の事情に

ついては本誌101号に、それぞれを代表する形で、石倉村長と園山土筆さんの対談がなされていて、その内容を詳しく知ることが出来る。なかでも重要なことは、「村おこし」がややもすれば経済効果優先で選択されがちになるところを、村民の文化的欲求の線に添って、共同歩調を進めた、というところが何より肝要なことであったろう。

ウェルカムパーティ
（上）左端が石倉村長
（下）左下が園山土筆さん

そのイデーは、招聘する劇団の選択の基準や、創造側の演目の決定などにも明らかに反映されていたように私の眼には映った。もしも都会からの集客ということを、第一義的に考えるのであれば、全く違った形のチョイスも考えられたはずだからである。

しかし、創造側も行政も、その道は選択しなかった。フェスティバルの芸術監督としての園山さんは、愚直なまでに〈暮らしの中に演劇を〉のコンセプトにこだわりを見せていた。そのことこそが創造側と地域社会の住人である村人を結びつける、重要な接点であり、同時にそれこそが、地域に愛される劇団として最も大切な要件なのだ、ということを身をもって体験して来たればのこそであったろう。

組織、運営の面でもそのイデーは生かされていた。都会ならすぐさま〈商工会議所〉を中心として、となりがちなところを、八雲村の場合はまさしく、全村を挙げてといった規模になっていたからである。

15も作った委員会の、おそらくは交通輸送委員会関係であろうか、幼な顔をした少年少女たちが、喜々として道案内役をかって出ている。バイト感覚で働くということに馴れている都会人の眼には、ボランティア

各委員会の打合せは連日連夜行われた

ということの持っている本来的な意味と、その清冽さがまぶしく感じられた。

極めつけは、小学校の児童たちによるポスター展であった。海外からと、国内から参加した劇団の演目からイメージされる絵が何枚も、交流会や接待場所となった会館に貼ってあって、遠来の参加者たちの眼をなごませていた。あの児童たちの描いたポスターを見て、そこに歓迎の心を感じなかった者はおそらく一人も居なかったろう。

総じて妙な捻りが無い、思ったことを思った通りに実践しようという、スカッとしたフェスティバルであった。このことは開催の実施要項の中にも反映されており、特にコンテスト形式のフェスティバルには、絶対に欠かすことの出来ない、〈公平なルールづくり〉が周知徹底するように取り計らわれていた。

思うにこれは、芸術監督としての園山土筆さんが、かつて二回の海外演劇フェスティバルに参加、その時の体験をもとに、素直にいいなと感じた感性を基本にして要項が練り上げられたように私には感じられた。

その一例として、公演後審査員によって行われる〈劇評〉があった。

ウェルカムパーティ

これは公演後、次の公演の準備が終るまでの時間を利用して、審査員が3分から5分程度の劇評を行うというもので、観客を対象として、今終った芝居について、面白かった点や

感じたこと、または解説するという趣向が興味深かった。多様な見方があるのだということを、客席と交換し合うことが、広い意味で良い観客を育てることに連らなる。そうした理念が込められての試みで、この〈劇評〉は、同一の芝居を二度繰り返して上演するという、今回の上演方法と共に面白い試みであった。

もちろん、繰り返しの上演ということの中には、限られた時間の中で参加劇団に一つでもステージ数を確保してやりたいという思いと、仕込みバラシの時間を節約したいという思い、そして一人でも多くの観客に芝居を見せたいという主催する側の思いとが様々に交錯する中で最も合理的な案として採られたであろうことは容易に想像出来た。その点ではほとんどの劇団が、一回目より二回目の方が、本来的な力を発揮していたように私には思えた。やはり手馴れたものとはいえ、劇場条件を変えての、しかもギリギリのリハーサル時間という状況の中での公演であってみれば、二度目の方がより劇場条件にも馴れ、やりやすいというのは自明のことであったろう。

コンテスト形式のフェスティバル

もう一つは〈コンテスト〉という形式そのものについてである。

ウェルカムパーティ

アメリカやカナダには、〈シアタースポーツ〉なるものがあって、ここ数年よくやられている。これは演劇的な要素と、ゲーム的な要素を混合させて行う遊びで、例えていえば連想ゲームや尻とりゲームに近いものであるが、それをいくつかのチームに分かれて、観客を判定員として競うという、スポーツ感覚のPlayなのである。たしかにコンテスト形式のフェスティバルには、公正なルールのもとに、各チームが思い切り競争を楽しむことが出来て大会が盛り上がるという利点がある。陽気でスカッとして、いかにも海外の演劇人気質にぴったりのものも感じる。もっとも日本にも高校演劇コンクールという、伝統のあるコンテストがあるわけで、海外特有というものでもないが。しかし一方で、「演劇はそもそも数値化したり、判定されるべきものではない」という考え

審査会会場、あいさつする園山土筆氏

方も存在していて、要はその辺のところを、開催の前提として大いに論じ合って決めるべきだと思う。

今回の場合は、たまたま開催劇団である〈八雲アクターズ〉が、作品賞とピープルズ・チョイス・アワードという、これも海外でよく行われる〈観客が選ぶ賞〉をW受賞したということで、もちろんそれは八雲アクターズの「二十二夜待ち」が評価されたことの結果だが、それはそれとして今後、より公平感を保つためには、「主催劇団は、コンテストには直接参加せず、別な形で公演をもった方がいいのかも知れないね」と語っていた園山さんの言葉が印象的であった。いずれにせよこれは主催する側の考え方の問題だから、どのようなスタイルがあってもいいわけで、こうするべきだという決めつけ方はすべきでない、というのが平凡だが私なりの結論だ。

参加劇団のプロフィールとその舞台

今回の参加劇団は、海外から2劇団、国内からは3劇団の合計5劇団であったが、〈しいの実シアター〉を単一の会場とする限りにおいては、ほぼ限界の状況であったと思う。今後さらなる参加劇団をみるとすれば、当然八雲村の他の会館施設の使用や、野外劇場の設営などを含めての、同時多発的な展開をも考慮してゆかなければならない時に来ているかもしれない。それからセリフの翻訳変換の装置も将来的には必要となってくるかも知れない。

参加5チームのプロフィールを簡単に紹介すると、まずアメリカからの参加が、ウイスコンシン州のラシーンシアターギルド。この劇団は創立60年を越える名門で、30年以上にわたって芸術監督を務めるノーマン・マックフィーを中心としたチームであった。シェークスピアからミュージカル、児童劇まで多彩な活動を積み重ねて来た劇団で、今回の演目「アンジュラリクリスとライオン」は、イソップ童話として良く知られる、奴隷のアンジュラリクリスが、トゲを抜いて助けてやったライオンに恩返しをされる、というあれである。スタイル的にはコメディア・デラルテの手法でまとめた舞台で、簡略な装置を使ってスピーディな俳優の登退場と早変りが見もので、またライオンのぬいぐるみを着た女優さんの絶妙なアクションで、観客席を大いに楽しませていた。理屈ぬきの明るさで、大人から子供まで魅きつける技術にたけ、衣装デザインのセンスの良さに、優れた芸術性と伝統を感じさせられた。

ラシーンシアターギルド（米）　『アンジュラリクリスとライオン』

一方、カナダのノバスコシア州のリバプールから参加したウインズオブチェンジは、老若男女の俳優たちがバランスよく配役された、市民劇団としての印象を感じさせるチームであった。上演された「パッショネラ」という劇は、ニューヨークに住む煙突掃除人が映画女優を夢みて、それが幻想の中で叶えられるのだが、そこで体験したことは、富や名声を得ても愛がなければ幸せにはなれない、というもので、貧しくても身近な世界に幸せを再発見する、という話であった。テーマのポピュラー性で若い観客層に大いに受けていたが、全体としては粗いつくりであった。やはりこうした作品は、演技のリアリティと共に、照明や衣装を含めたファンタジーの要素が求められるだけに、海外公演の場合の不利は否めない。それとは別に、参加者の一人一人が心から八雲村に来たことを楽しんで、日本をエンジョイしていたのが印象に残った。

ウインズオブチェンジ（カナダ）
『パッショネラ』

岩手ぶどう座（岩手）
『うたよみざる』

国内からの参加は岩手のぶどう座。創立50年の伝統ある劇団である。文芸演出面における座の中心は川村光夫さんで、他にもふじたあさやさんを含めて座外の演劇人との交流も深く、常にレベルの高い舞台を生み出して来ている。なかでも今回の「うたよみざる」は同座の代表作であり、地元岩手に伝わる伝説をもとに劇化されたこの作品は、既に20年近くにわたって各地で上演され続けてきている。また三木稔さんの音楽によるミュージカルのバージョンもつくられている。演劇祭の開催地としては

若い八雲村が、普段あまり接する機会の少ない北国の、しかも伝統あるぶどう座を招待したということは、海外からの2劇団の招待に負けない良い選択だったと、私などには率直に感じられるのだ。

もう一つは対照的に若い集団の「演劇街」である。しかもこの劇団は山口県からの参加であるから、八雲村にとっては、いわば隣りの劇団といった感じである。この劇団の強みは何といっても、『演劇会議』100号記念にも作品発表している、広島友好を座付作者として有しているということであろう。今最も旺盛な創作活動を彼は示している。それともう一人は俳優兼任の演出の柳沢悟。この二人が中心となって、レベルの高い演劇制作をめざしているようである。ただし、これに対応出来る演技陣の充実が、今求められている課題であるだろう。今回発表した

劇団演劇街（山口）
『おうこくの木――ケーナとニトの物語』

「おうこくの木ケーナとニトの物語」は、無国籍ふうのつくり方で、ある種の新しさが感じられたが、上演時間が50分という、開催ルール上の制約もあってか、大幅なカットを余儀なくされたようで、その分話の展開も飛躍しすぎて、理解をし難くさせていたという面もあったと思う。

日本再発見の八雲村国際演劇祭

そして地元開催劇団の「八雲アクターズ」である。これは1966年に創立したという劇団あしぶえが、1992年に石倉村長との出合いを持ち、以降八雲村に活動の本拠地を移すわけであるが、今回の国際演劇祭・開催にあたって、地元から出演者を一般公募し劇団あしぶえの俳優たちと混成で、新たにつくりあげたチームということである。演目は木下順二の民話劇としてよく知られる「二十二夜待ち」であった。「セロ弾きのゴーシュ」で海外演劇祭の賞を受賞した劇団が、地域からの出演者を加えて民話劇の世界に取り組むということで大いに期待された。結果はとても楽しい上出来の仕上がりになっていた。プロの俳優である上原恵子さんと、あしぶえの若い劇団員

八雲アクターズ（島根）
『二十二夜待ち』

を中心としたアンサンブルに、一般公募で参加した須山恒さんや石倉富雄さんたちがよく馴染み、しかもその役のキャラクターや年齢的により厚みを加えた分、この劇で求められる村落共同体のリアリティをより増していたと言えるからである。また、セリフの要所に英語を折りまぜるという演出も抜群に面白かった。

都会の団地暮らしなどをしていると、地域や共同体におけるシガラミなどとは全く無縁になり、それはそれで自由ではあるのだが、その分人とのつながりが薄くなり、そのことの欲求不満も同時にふくれあがるのだが、久しぶりに八雲村のようなところに来て、このような劇をみていると、劇の中に描かれている世界と、現実の八雲村が、ひどく接近して感じられた、というのが実感であった。

この印象は、演劇祭開催期間中を通してのもので、参加者がホームス

演劇祭こぼればなし

昨年11月12～14日に島根県八雲村の「しいの実シアター」で開催された99八雲国際演劇祭のこぼれ話を二、三ご紹介しましょう！

▽日本語がわからないのになぜ？

日本の劇団の芝居が始まった。アレ？　言葉もわからないのに、どうして海外のお客さんが先に笑うの？　どうして日本のお客さんは、なかなか笑えないの？　なんか逆じゃない？

▽らっきょと梅干しが大人気

若夫婦一家のところにホームステイしたのは若いアメリカ人夫妻。最初は「若い者のすることだけん」と興味のなかった老夫婦。ところが、勧めた自家製のらっきょと梅干しに「うまい」の連発。びっ

テイ先でそれぞれもてなしをいただいた、その体験もその思いを増幅させていた。程度の差こそあれ、これは今回ホームステイした参加者のすべてが、世話になったホストファミリーとの関係の中で、共通して感じとったことではなかったろうか。

ともあれ、「二十二夜待ち」の中で語られた親孝行話も、ぶどう座の「うたよみざる」の芝居の中で感じた、村落共同体の持つ悪しき排他性、ということについても、都会の取り澄ました劇場で見るのとはまた違ったリアリティを、見る者に感じさせてくれた。そして、ことの本質に含まれている日本人の民族性や、体質的な面を掘り下げることが、現代の日本を考えるうえで、より大切な要素なのだ、ということを、改めて私たちに認識させてくれた。

八雲村での演劇祭開催の効用は、まさしく日本を再発見させてくれたということであろうか。

国際的にレベルの高い海外審査員

今回私の同僚となった審査員の一人、スーポンチュア氏はシンガポールからの来日で、とても博識な方だった。洞察力が深く、かつ舞踊を含めて伝統演劇にもよく通じている、という印象であった。シンガポールの中国歌舞劇研究所とナンヤン芸術院でそれぞれ要職にある方であり、批評的な面でなるほどとうなずかされるものが多かった。もうお一方はアメリカのカリフォルニアからご主人と共にいらっしゃったデボラチョミスキーラウトマンさんで、こちらはアメリカ人らしい陽気さの中に、生真面目でナーバスなところのある女性だった。芸術監督としての経験もあり、同時にアートマネージ面では大へんな腕きき、との印象を持っ

くりするやらうれしいやら。お土産に持って帰りたいとの申し出に、にこにこ顔の老夫婦。

▽村内の小・中学生、大歓迎！

来村前から招待状を送り、ポスターやカード、記念の手作りプレゼントなどを用意していた村内の小・中学生。参加劇団の学校訪問が始まると、待ってましたとばかりに大はしゃぎ。休憩時間には、サインを求めて人だかりが。

▽演劇祭ポスターが大人気

関空からシアターまでお迎えのバスの中、お土産に演劇祭のポスターがほしいと言われ、希望を聞いたら全員が手を挙げたのにはびっくり。かわいくてユニークなデザインは、日本のお客さまにも好評で、多くの人からほしいと言われた。第24回島根広告賞消

スーポンチュア氏

た。この二人とデボラさんのご主人のラウトマン氏、この方はお医者さんだそうだが、彼らと友人になれたことが私にとっての幸運であった。

その他、来日した劇団の人たちが八雲村の小中学生たちと交流会を持ったことの意義も大きく、ホームステイと共に忘れられない思い出を与えてくれた。また、リアリズム演劇会議を通して園山さんと交流の深い、昔からの友人である演劇人たちが、近隣から応援にかけつけて来てくれたことも、演劇祭そのもののレベル的な面を底上げしていたと思う。

村長の石倉徳章さんも企画運営委員長の野坂裕さんも、この方はデンティストということだったが、お二人ともユーモアのセンスが抜群で、そのセンスが国際演劇祭にふさわしい、固苦しくないリラックスした雰囲気づくりに大いに助力していたことを最後に附記しておきたい。また対談でも語られていたが、東西の文化的な差異について園山さんの良きアドバイザーの役を果たしたメアリー先生の存在も大きかったと思う。

自治体と共同して定期的な国際演劇祭を目指す、という壮大な計画に向かって、すでに2000１年への歩みを始めた「しいの実シアター」にさらに期待したい。

デボラさんと
夫君ラウトマン氏

費者特別賞も受賞した。次回はお土産用に、ポスター販売も考えてみるか？

▽観劇後の劇評が大好評

芝居の上演後、専門家による感想や解説をしていただいたことが新鮮で、視点の違う発見もあり、「なるほど」と感動も倍増。

▽さよならガラは大ダンスパーティー

「こんな田舎で、こんなに洒落たパーティーが開けるなんて、とても感激です」と静かに感慨にふける60代の女性。そのそばでは、3ヵ国入り交じっての大ダンスパーティー。「私はうるそうて、いけんわぁ」とは30代の女性。同じ女性でも、感じ方はいろいろなのね。

（小岩崎里瑠）

銀河ホールから何を学ぶか

こばやしひろし
（全リ演議長）

いよいよこの夏、岩手県湯田町の銀河ホールで第8回全日本演劇フェスティバルが開かれる。湯田町といえば昔からぶどう座で知られているが、この頃はぶどう座だけではなく銀河ホールで知られるようになったのである。なぜ銀河ホールが注目を集めているのか。それを学ぶことが今回のフェスティバルの一つの大きな目玉といっていいのである。

湯田町というと、地図を開いてもらえば分かるが、峠を越せば秋田県という岩手県の西端である。かつては金銀鉄の地下資源があり鉱山町で人口も1万3千人を超えていたのだが、いまでは掘り尽くし、温泉以外山林に頼るほか何もない典型的な過疎地帯である。

町とはいうが広大な山村である。その広大な山村にわずか4150人の町民が居残っているという感じである。戦後のぶどう座の歴史はそれを体でひしひしと受け止めてきた歴史といっていい。湯田町に働く場がないとしたら若者は当然都会へと抜けてゆく。ぶどう座も若者がいなくなるのは当然である。

その過疎の典型的な町に岩手県の国民文化祭を契機に銀河ホールができたのである。岩手県の演劇祭はここ過疎の町湯田町でおこなわれた。当然、ぶどう座の実績の成果である。設計は劇場設計で有名な清水裕之氏である。少ない予算で機能的に作られている。

問題はそれがどう生かされているかである。今では全国にいっぱいホールができているが、その多くが生かし切れずねずみが走っている。ところがこの湯田町の銀河ホールは過疎地になくてはならない存在としてでーんと腰を据えているのである。

ここの館長というか、アートマネージャーというか、すくなくとも館長ではない、仕掛人といった方がいいかもしれないのが、新田満という人である。わずか4千人の町で、おじいさんとおばあさんと孫だけの町である。これが町といえるのか、まさに過疎の山村である。ほっておいたらねずみが走るどころか蜘蛛の巣が張るだろうことは目に見えている。それが新田満という仕掛人が過疎の湯田町になくてはならないホールに仕立てたのである。

ゆだ文化創造館・銀河ホール

新田さんはまず演劇講座を始めた。見ることの面白さでなく、やることの面白さを体で知ってもらうためである。ところが「演劇講座？芝居だったらぶどう座があるべ」といってだれも振り向きもしなかったのだ。

アートマネージャーの新田満氏

新田氏の考えに理解を示した町長さんは、仕方がないので役場の職員を受講させ、なんとか第1回の演劇講座の幕を開けた。役場の職員だったら給料をもらっているから逃げるわけにいかなかったが、芝居をやってみたら面白いのである。

それが町民に伝わり、「芝居は何もぶどう座だけではないだべ、やってみれ面白いに」ということになり、第2回、第3回と毎年重ねられるようになった。受講生は15人から20人である。それが去年で6回重ねたわけであるから、100人は越えたわけである。なにしろ、じいさんばあさんと孫たちの町であるから、受講生もそうである。

町民の芝居が幕を開ければ、観客も舞台もみんな知っている人ばかりであるから、うまくても下手でも楽しくてならないのは当然である。こうして銀河ホールは湯田町になくてはならないホールになっていったのである。

一方で、国民文化祭以降、地域演劇祭をやっている。劇団支木も劇団やませも出ているが、これも去年で7回重ねている。私は去年の地域演劇祭にいったのだが、客席はじいさんばあさんが大半を占めている。そ

れが芝居を楽しんでいるのである。その核になっているのが100人にのぼる演劇講座の受講生なのである。芝居を楽しんでいるお客さんだから、いかに演劇ジャーナリズムに乗っていようが、理解に苦しむお芝居は受け入れられないのは当然である。「静かな演劇」で東北でも中央でも盛んにもてはやされている某劇団は散々の不評だったという。京浜協同劇団の「鉄道員」は大好評であった。

私は演劇ジャーナリズムの評価を全面否定するつもりはないが、演劇は観客無しに成立しないのである。ところが演劇ジャーナリズムで活躍する批評家や、マニアックな観客のいない湯田町のおじいさんおばあさんに対すると、少なくとも私は解放されるのである。私はこんなに解放された客席を見たことがない。芝居というものは本来そういうものでないだろうか。少なくとも江戸時代はそういうものであったに違いない。

こうして銀河ホールは4千人の湯田町の町民の交流の場になり、肌触れ合う場になっていったのである。劇場は町の顔であり、市民の顔というが、これこそが地方の公共ホールのあり方である。

富山県利賀村が一時、国際演劇祭を開き、全国の注目を浴びたが、鈴木忠志氏が水戸芸術館に移り、さらに静岡のSPACに移るや、忘れ去られた存在になりつつある。国際演劇祭がどんなに華やかに見えても利賀村村民とはなれた存在だったからにほかならない。

銀河ホールは違う。湯田町の町民としっかり結びついているのである。だからねずみは走る余地がない。当然、ホール利用率も考えられないほど多いのである。雪国だから、冬の12月1月は少ないが、5月85%、6月52%、7月56%、9月85%、10月に至っては92%の利用率を示しているのである。4千人の町で大都市と変わらない信じられない数字である。

これを見ても、建物を生かすも殺すも人材であるということを示している。銀河ホールに注目が集まり始めたのはこの新田満という存在が大きいことは言うまでもない。建物がどんなに立派であっても、それを生かす人材がなければ無用の長物である。その無用の長物がいかに多いか。文化のない文化会館がいたるところにあることを考えると、今回のフェスティバルは地域文化とホールの関係、地域住民とホールの関係、それがどうして作られたかを学ぶ絶好の機会である。ホールが住民のものになってはじめて地域文化は花開くのである。どんな豪華なホールでも住民のホールか否かにかかっている。

『日本演劇学会紀要』38号

「演劇のリアリズム」特集について

中国文学者　瀬戸　宏

日本演劇学会は今年8月発行予定の『日本演劇学会紀要』38号で「演劇のリアリズム」特集を行うことになっている。編集責任者として、その内容を紹介してみたい。

日本演劇学会が演劇リアリズムに取り組むのは、今回が初めてではない。1994年10月に日本演劇学会は秋期大会の一部として「徹底討論・リアリズム演劇とは何か」と題するロングシンポジウムを開催している。演劇評論家の大笹吉雄氏が93年2月発表の評論「現代演劇のリアリズム回帰」のなかで、平田オリザら若い劇作家の作品をリアリズムと呼び、当の劇作家たちがそれに反発して論争が始まったが、論者の間のリアリズム観がまちまちであったため、議論はかみあわないまま収束しようとしていた。そのため、リアリズムの概念整理を行おうとしたことが、この企画のきっかけである。

このシンポジウムは強い関心を学会の内外から集めたが、残念ながら討論そのものはリアリズムという芸術概念の複雑さを反映して混乱のまま終わった。聴衆として参加した藤沢薫氏は、『演劇会議』94号でその印象を『僕そこへ出て、頭が混乱しておかしくなるような観念的な空論ばかり聞かされ、これが現実に生きている人間の学会か…？　というような全くつまらない会議を経験したのです」と記しているが、このように評されても仕方のないシンポジウムだったのである。

しかし、まったく成果がなかったわけではない。最大の成果は、会場に入りきれないほど参加者がつめかけ、シンポジウム報告が載った『学会紀要』33号が売り切れになったことに示されるように、演劇のリアリズムの問題に今日でも多くの人々が強い関心をもっていることが明らかになったことであろう。私はこのシンポジウムの企画者として、報告の末尾を「この問題の探索は一回のシンポジウムで終わらせてはなるまい」と結んだ。

その後、『日本演劇学会紀要』が38号から個人責任編集体制をとり、私が編集責任者に指名されたのを機に、もう一度演劇のリアリズムを取り上げることにしたのである。

特集の中心は、座談会「演劇のリアリズム」である。94年のシンポジウム混乱の原因がリアリズムの歴史的経過を無視して今日の立場から一挙に概念整理をめざして失敗したことにあったのを反省して、今回の座談会ではリアリズムを歴史的に考慮することにした。座談会は4部構成をとり、第1部　演劇のリアリズムの成立、第2部　社会主義リアリズムの諸問題、第3部　日本演劇のリアリズム―1960年代まで、第4部　日本演劇のリアリズム―60年代以降とし、毛利三弥、永田靖、神山彰、斉藤偕子の各氏がそれぞれ報告を担当し、瀬戸宏が司会・構成にあたる。討論内容を統一させるため、参加者は上記5名に限った。座談会は延べ8時間以上におよび、その記録は300枚近い長文になる予定である。演劇のリアリズムに関する基本的な問題は、一通り取りあげることができたと思っている。このほか、リアリズム演劇に強い関心をもつ研究者からも論文を寄稿していただくことになっている。

『日本演劇学会紀要』は会員配布であるが希望者には販売もしているので、購入希望の方は下記まで連絡していただきたい。今回、日本のリアリズム演劇の歴史資料収集のためリアリズム演劇会議の方々とお会いして、日本演劇学会とリアリズム演劇会議の接触がこれまで極めて少なかったことを、改めて感じた。演劇研究者、「現場」活動家の双方が、相手の問題意識や活動内容を知らないのである。今回の「『学会紀要』の演劇のリアリズム特集にリアリズム演劇会議のみなさんが忌憚のないご意見を寄せられることを、編集責任者として望みたい。

購入連絡先
〒194-8610
町田市玉川学園6-1-1
T／F 042-739-8092
玉川大学文学部芸術学科内
日本演劇学会事務局

著者略歴
1952年大阪府生。
現在、摂南大学国際言語文化学部助教授。中国現代文学演劇専攻。
著書『中国の同時代演劇』（好文出版、1991）他。
訳書『現代中国戯曲集』第一、第三集（晩成書房、1995、1998、共訳）『現代中国短編集』（平凡社、1998、共訳）。

ロシア演劇レポート ⑰

私の30年物語 (1)

―60年代のソビエト演劇―

桜井　郁子

気がつけば30年

ミレニアムを迎え、6年ぶりで日本の正月を過ごした。ここ5年はモスクワの友人宅で新年を迎えていた。彼の地の新年を楽しむためではない、毎年10月に始まるシーズンの新作が出そろう頃だからである。ところが例のY2K問題で危ないと書きたてられたから、今年は日本で遠く眺めることにした。でも何も起こらなかった。トップの交代は演劇界にまで影響が及ばないだろうし、政治が不安定なら経済にひびくが、これもさして変わりはないようだ。一方、モスクワの新聞は3月のフェスティバル「黄金のマスク賞」ノミネートを報じている。相変わらずペテルブルグ諸劇場が優位、トップクラスの4劇団が顔をそろえている。今年も演出2作品をノミネートされたのはカマ・ギンカスだ。その一つは先号に書いた『プーシキン。決闘。死』。珍しくモスクワの老舗マールイ劇場が顔を出した。どんな作品群になるのか、期待がもてる3月である。

さてこの号のレポートは内容をがらりと変えることにした。気がつけばロシア演劇に関わりだしてちょうど30年、私にとって一つの節目の年になる。早川編集長の言葉がこれに重なった。「あんた自身のロシア演劇との関わりを、それもエピソードをまじえて書いてもらう方が、片仮名ばかりの紹介より、若い人にはよほどおもしろいだろう」。もっともだと思う。つい専門家のこだわりでこれまで書いてきたが、元来、ロシア演劇なんて何ほどのものと思っている方々には価値はない。どうしてそんなふうにうちこめるのかと疑問に思っている方に、答になるかどうかは知らないが、思いきって私の30年のページを開くことにした。

それに今つれづれに読んでいる一冊「20世紀後半のロシア演劇生活」(99年刊、A・スメリャンスキイ著)が滅法おもしろい。そう、ロシア演劇界も今振り返ってみるだけの累積がある。私の30年がそこにきっちりはまりこむ。「見るべき程のものは見つ」と知盛ばりの見栄を切るつもりは全くないが、百ページ近い写真ページも含めて、あれこれ思い出さ

れてこの大冊を手放せない。という訳で……。

モスクワ留学

きっかけは70年9月から翌年7月末までのモスクワ留学である。昔からチェーホフは大好きだし、ロシア演劇の舞台に親しんできた。それでもロシア演劇を専門にしようとは、帰国までも思っていなかった。元来私は高校の数学教師で、余暇の自学自習で学んだロシア語が、いつしか夜間大学や協会の講師をするようになり、ソビエト文学の翻訳が活字になり始め、もっときちんとロシア語をものにしたいと思うようになった。この願いを叶えてくれたのが、モスクワ大学の外国人ロシア語教員のための「10か月ゼミ」、当時西欧に唯一開かれたというべき留学ルートだった。

雀が丘にそびえるモスクワ大学本館に連なる翼屋の寮に一室を与えられ、奨学金も与えられるという結構な制度だった。当時は後に「停滞」と名づけられるブレジネフ時代だったが、物価は安定していて、住居費がゼロだから、食費、書籍費、劇場切符代のほとんどすべてが奨学金でまかなえた。ゼミのメンバーはドイツ、フランスなどのヨーロッパ勢にメキシコ、インド、日本を加えて約50名、この年は日本の9名が最大。9名の内訳は大学現職3名、翻訳・研究者2名、商社派遣3名に私だった。残念なことに寮の階はゼミ生に限られ、ロシアの学生と交流できないしかけになっていた。律儀な先生たちの講義のあとは、当然のこと、毎日のように街歩き、お決まりのコースは古書店をめぐり歩く途中で劇場切符を予約したり買ったりである。

毎週のプログラムに水曜は見学デーと定められ、友好会館での名作上映や博物館見学が提供された。映画は『母』『チャパーエフ』などの古典から、ドキュメント『ありふれたファシズム』まで。ヒヤリング学習に役立ったほか、ロシア人気質を知る機会になり、さらにこの年封切られた『チャイコフスキー』『罪と罰』『ワーニャ伯父さん』とは街の映画館で出会えた。一年間で見た映画25本。

ボリショイ劇場へ通いだしたのも10月から。大作バレエ『スパルタク』はワシーリエフ、マクシーモワなど名手をそろえ、力強い男性の群舞を見せてくれたし、世界のプリマ、プリセーツカヤの『カルメン組曲』『白鳥の湖』を堪能できたのも幸せだった。音楽院では世紀の演奏家オイストラッフのヴァイオリン、ロストロポーヴィチのチェロ・コンサートに会えた。この二人、74年には片や逝去、片やアメリカへ亡命という人た

ちだ。オペラ、バレエ、コンサートに親しむこと一年に28回、こんな贅沢をしたのは生涯一度きりである。いい席の入場券入手は厄介だったが、知人の助けとドル支払いで何とかなった。今ではボリショイ劇場など、いいソリストもないのに外人には法外な切符代を要求されるので行かない。

1年で44の舞台を

次はドラマ劇場の話。その前にちょっとつけ足し。

私の部屋は4階、北向きの大きな窓があり、簡素ながらベッド、机椅子なども備わって、小さいが居心地のいい一室だった。窓外の眺めは絶佳、目に入るのは大学構内の自然林と野だけ、冬は白一面の雪だが、春4月も終わりになると芽生えがはじまり、たちまちたんぽぽの黄色が眼下いっぱいにひろがって遠く地平に都心の高層ビルの白い点々が見える。こんなすてきな個室だが、隣室と一ブロックをつくり、洗面所、シャワーなどを共有する。この隣人に、私は恵まれなかった。パリから来た女の子は勉強もせず、男の子との遊びにふけりだして夜は騒然となることあり、私は落ち着くことができなくなり、2月頃から劇場通いの頻度があがる。いや彼女のせいだけでない、観劇そのものに魅かれ始めたと言うべきだろう。

68年『プラハの春』弾圧から西側に総スカンを喰ったロシアは、国内的には引き締めがはじまり、53年のスターリンの死で解けはじめた「雪どけ」が凍りだした時期である。でも60年代の傑作はのこっていたし、消えたものもあれば新たに生まれるものもあった。とりあえずのモスクワ芸術座、60年代の寵児のソブレメンニクとタガンカ劇場が主に通った劇場、この一年で44の舞台に接した。本気でロシア演劇にとりくんだのは、レニングラードの演出家トフストノーゴフの知己を得てからだが、この年にはまだ縁がなかった。

とりあえずと書いたが、新作をほとんど出せなくなった芸術座も、65年から68年（この年来日した）に多くの古典をリニューアルしてそれなりの見応えがあった。

チェーホフの『三人姉妹』『かもめ』、ゴーゴリの『検察官』『死せる魂』、ゴーリキイの『どん底』『敵』などの古典、『トゥルビン家のあり し日』（ブルガーコフ作）、『クレムリンの大時計』（ポゴージン作）、『七月六日』（シャトローフ作）などのソビエト作家の作品はロシア演劇史の生きたページ。新作は名優グリボフが主演したドストエフスキイ作『ステパンチコボ村』ぐらいだった。実は芸術座が姿を変えるのは翌年か

らで、エフレーモフが自分のソブレメンニクから引き離され、芸術座の首席演出家として移植された後である。

芸術座のソブレメンニク

そんな境目の年にソブレメンニクを訪れ始めた私は、創立に関わる記念碑的な『とわに生きるもの』（ローゾフ作）には会えず、後のソブレメンニク、つまり現在の劇場でやっと見ることができた。それでも俳優タバコフが活躍する『伝統的な集い』や『いつも売出し中』を楽しめたし、ゴンチャロフ原作の『平凡物語』（93年日本でも上演）ではエフレーモフの後輩ヴォールチェクの新鮮な演出に目を見張った。エフレーモフのここでの最後の演出作品『かもめ』は残念ながら不完全燃焼の印象だったが、後に同じ俳優を使って芸術座で完成、これは88年の来日で見せてくれた。

『永遠に生きるもの』
ソブレメンニク劇場
演出　O・エフレーモフ

ソブレメンニクは自称、芸術座のスタジオを名乗ったが、親は認知を急がない。それには訳がある。スタニスラフスキイは世紀の始めに芸術座の栄誉を守る実験と修練の場としてスタジオをつくり、多くの名優、演出家のみならず20世紀ロシア舞台史を構成する劇場を多く生みだした。しかし芸術座が救いを必要とした瞬間に自立的な「第二芸術座」が生まれた。スタニスラフスキイは生涯この「裏切り」を許さず、36年権力の手で第二芸術座が壊滅させられた時も指一本動かさず、第一スタジオは本劇場に吸収され、以後30年間芸術座はスタジオを持っていない。

ソブレメンニクは芸術座の昔の理想を実現することを志し、民主主義的な集団をめざした。その作風は「演劇のための演劇」を排して、限りなく日常的真実をつくり出し観客との距離を縮めること、俳優たちのイントネーションはリーダーのエフレーモフに似て「ささやき声のリアリズム」と評されるほどのもの、プログラムはあくまでも「反スターリン」を貫き、ローゾフやヴォローディンのような作家の同時代人生活の真実を追究する作品が重んじられた。例えば「とわに生きるもの」一作品だけでも彼らの輝かしい達成と

言える。この作品の内容は詳述する暇がない（野崎韶夫訳、白水社がある）が同じローゾフの脚色による映画『鶴はとんでゆく』は58年カンヌでグランプリを獲得、西欧の目をロシアにひきつけた。日本でも上映されたから、見た人もあるだろう。

タガンカ劇場

このソブレメンニクと対照的な舞台作りをしているのがタガンカ劇場。実はせりふが重要な現代劇のソブレメンニクでは半分聞き取るのがやっとだから（ついでに言っておくとソブレメンニクとは訳して現代人）フォルム表現を重視するタガンカの方が、当時の私には理解しやすかった。自由を希求するソブレメンニクに文化人たちがひき寄せられていたとすれば、タガンカは若者たちをひき寄せていた（もちろんそれは当時の話、今は両劇場とも状況が異なる）。タガンカは劇場前は言うに及ばず、近くの地下鉄構内から既に「余った切符はありませんか」の声がかけられる人気の劇場だったが、幸い切符入手のルートに恵まれて、せっせと通った。『世界を震撼させた十日間』『セチュアンの善人』『聞いて下さい！（マヤコフスキイ）』『母（ゴーリキイ原作）』『ガリレイの生涯』『プガッチョフ』など。ちょうど稽古の始まっていた『ハムレット』も日本新劇代表団の人々にまぎれこんで見学した。

『朝焼けはここに静か……』
タガンカ劇場
演出　Y．リュビーモフ

リュビーモフの手法は、例えば『世界を震撼させた十日間』や『セチュアン』に典型的にあらわれるように、時や場所などの細部にこだわらず、俳優の集団的な身体表現を駆使して、パントマイム、サーカス、道化の手法をとりいれ、舞台空間いっぱいにテンポ・リズムよく物語を展開する。いや、物語というより、エピソードを積み重ねていくやり方、場面転換には観客の頭上を走る光のカーテンを使うという工合であった。既に開演前からロビーで俳優たちがアコーディオンや歌でお客を集め、客席に導いていく〝街路演劇〟の手法も当時は新鮮だった。タガンカは現代劇作家の作品を上演し

たことがない。リュビーモフの強烈な個性のなす業か、ブレヒトやモリエールなどは別にして、ロシア・ソビエト作家の詩や散文を構成したオリジナルばかりである。

この年ではなかったが、ある時リュビーモフの優しい心遣いに接したことがある。切符がなくて、立ち見券で入場したが、大柄なロシア人に埋もれて何も見えず、たまらず二階から駆け下りて出ようとしたら、場内係のおばさんが追いかけてきてリュビーモフが呼んでいると言う。上演中いつも居る中央通路の首席演出家のテーブル横に、私を立たせてくれた。後にインタビューしたことがあるが、未だ一面識もなかった頃の話である。

この年、タガンカで私のもっとも心打たれた作品は「朝焼けはここに静か……」。ワシーリエフの小説に基づく。軍曹に引率された五人の女兵士が斥候中に、ドイツ軍と遭遇して死んでいく。この五人の生活史と戦場の模様が、四枚の巨大な板だけという簡素な装置の中で展開する。写真のようにシャワー室にもなれば、天井から吊されて森林をあらわし、くるりと回転すると銃を構えたドイツ兵が出現、彼女たちが一人ずつ倒れる時、くるりと回転すると女たちの過去のシーンが出てくる。牧歌的な銃後シーンと、緊張の戦場と、彼女たちそれぞれのプライバシーの哀切が、ひとり残った軍曹の慟哭に収斂する。内容とリュビーモフの表現が一致した例であった。

イルクーツク物語

俳優でもあるオフロプコフがマヤコフスキイ劇場で演出した『イルクーツク物語』は私の中でソビエト演劇への一歩を促す、力のある作品だった。イルクーツクで演劇活動をした後、メイエルホリドに師事した彼の『イルクーツク物語』はよく称賛されたワフタンゴフ劇場のものより、よりパセチックに悲劇的に仕上がっていた。

客席中央に花道を設けて、舞台に通じる。両側のせりで寮の一室やワーリャたちの住居を出現させる。舞台奥に置いた二台のグランドピアノがかき鳴らされる。雲が走り雨のしたたるシベリアの密林が天井一面に写し出される臨場感。そんな中で、ワーリャがヴィクトルに椅子をふりあげて怒るほどの感情の高まりを表現し「これがロシア人なのだ、これがイルクーツク物語なのだ」と私に思わせた舞台だった。トフストノーゴフが劇団民芸の舞台装置を見て「アラビアだとぬかした」と宇野重吉が書いているが、民芸がオフロプコフの舞台を見なかったのは残念。民芸によって教えられたこの芝居

に、もっと踏み込んで知るべしと私に教えてくれた一晩だった。

もう一つ、この年私に教えてくれた舞台のことを書いておこう。クネーベリ演出の『桜の園』。舞台後景はカーテンの簡素なつくりだが

『イルクーツク物語』
マヤコフスキイ劇場　演出　N．オフロプコフ

『白い桜の園』を見せてくれた、日本に来たシェルバンの『白』よりもっと早く。オフロプコフもクネーベリも、いわば演劇史の主流にないため忘れられているが、いい舞台を見せてもらったせめての記憶を書いた次第である。

スターリン死後のソビエト演劇の革新はどこから始まったか。

トフストノーゴフはスターリン存命の50年代始めから『楽天的悲劇』など作り上げ、56年ボリショイ・ドラマ劇場の首席演出家になった。スメリャンスキイは彼の『白痴』（57年、ドストエフスキイ原作）を、主役を演じた俳優スモクトノフスキイの誕生と共に一つの指標としている。

50年芸術座を追われ中央児童劇場に移ったクネーベリの下に演出家エフロス、劇作家ローゾフや俳優エフレーモフが慕い集まり、それがソブレメンニクにもつながっていく。

オフロプコフは54年、戦後はじめての『ハムレット』を演出した。サチーラ劇場ではプルーチェクがマヤコフスキイの『風呂』（53年）『南京虫』（55年）を出した。どちらもメイエルホリドがかつて演出した作品だ。

ワフタンゴフ付属大学で教え子たちの卒業公演にリュビーモフが作った『セチュアンの善人』が、64年タガンカ劇場創立に導いた。

58年パステルナークの『ドクトル・ジバゴ』が槍玉にあがり、63年フルシチョフがマネージの美術作品を酷評し、そんな中でソブレメンニクもタガンカも他の演劇人も当局の介入とたたかいつつ70年代の活動に入る。私の世界もトフストノーゴフとの出会いでひろがるが、それは次号で。

《観劇レポート》第37回東京働くものの演劇祭

演劇集団土くれ（10月7、8、9日）
『早春スケッチブック』
山田太一／作　石塚幹雄／演出

テレビドラマの印象、つまり、テレビならこれでいいのだろうが、生の芝居だと、先のシーンの残像と新しいシーンとが重なってしまい、その間の時間の推移や、そのためのさまざまの人々やものの変化がはっきりしなくなるように思えるのだ。場ごとの変化を際立たせたいときと、そうでないときのつなげ方に、それをとくに感じたようだ。

コントラストのきわだつ2人の大人の男性。その間でゆれる女であり、母であり、主婦である女性は、2人の男の媒介者でもある。それは男にはないといってもいいくらい強い「家族・家庭」感（観）で女としてのエゴ（個）を乗り越え、事態を打開し、2家族いっしょの家庭というものへ主導していく。結果として、弁証法的「正・反・合」の「合」に達しようとしたときに芸術家の死で崩れるのだが、ある展望をひらいたといってもいい。

媒介であって媒体ではないことによって、当の男たちも子どもたちも変わっていくという人間関係、社会性が描かれていて面白かった。それは「土くれ」の俳優たちの力演の成果といえよう。

演劇サークル「麦の会」（10月22、23日）
『黒髪の』
保戸田時子／作
吉岡利根雄／演出

古風な題名だが、舞台はなかなかに現代社会らしい問題性を提起していたのでホッとした。というのも、こちらが下町育ちの戦前派だからそう思っただけで、現代風俗のなかでは別にどうというほどのことではないのかもしれない。

ここでは、「弁証法的」でなく「過去・現在・未来」を考えさせられた。同時にわが身の老齢化も思い知らされた。東京でも、もうこういう風景はちょっと見られまい——と。

しかし、「三人姉妹」は、洋の東西を問わずいつもドラマとなってきたモチーフであり、それだけでも楽しませてくれるおなじみの世界だ。はたしてここでも楽しみはあった。多分にわが少年時代の回想もあってのことだが。現実問題としては経済不況、リストラ・失業の風当り強い

なか、先行き不透明に違いないのだが、若い世代に「邦楽・日舞」などの趣味もないではない、といえるのか気掛かりだった。

演出・演技に安心して楽しませてもらった。

演劇集団石るつ（10月22、23日）

『入口と出口』

――イエンセン神父の人生観――

L・コワコフスキー／作
古田耕作／訳
境野修次／演出

まことに申し訳ないのだが、身体的条件が最悪だったため、ほとんど観劇できなかったことをお詫びするほかない。神父さんが聖書を手に読み聞かせている姿ばかりが残っていて、ラストに全員がなにかに解放されたごとく踊るのが印象的だった。（脚本を読ませてもらい、ナチズムとスターリニズムに挟まれたポーランドならではの強烈な不条理劇である。「診察室」はおそらくアウシュビッツなのか、そしてそこへ送りこんだ市民たちの無知や学者や宗教の役割を告発したのでしょう）

日本での上演には、十分な解説（歴史的状況等スライド利用の工夫）と十二分な稽古が必要な作品であり、また、上演すべきいい作品だと思われます。またの機会に上演、発表してもらいたい。

劇団遊ＰＡＣ（10月22、23、24日）

『ハックルベリーにさようなら』

成井豊／作　島崎幸雄／演出

しごくまじめな少年の思い、成長が描かれている内容だ。別居している父とその愛人や、兄貴分のカヌーイストの先輩などとの交流から、母と子だけの生活から脱出して、心身ともに成長していく姿をいきいきと描いた舞台は、主演の若い女性の力演に負うところが大きい。小舞台をギリギリ一杯にあれこれ工夫したことは、かっての「小劇場」時代を思い出させてくれた（たとえば世仁下乃一座）。

「子どもの成長」というと、公式的か大げさになるしかないなかで、子どもの興味、関心、意欲などにそって「成長力」というべき「自発性」や、それをもとに成育するのをサポートする人々の善意を短時間に描き展開してみせて成功したといえる。

「家庭崩壊」「母子・父子家庭」「不倫」「蒸発」等、社会状況が、今日、さして特異な現象とも言えず、当人たちの苦悩、苦労はもとより大変だろうが、若い「生命力」そのものはさして傷つくこともなく成長しうるものだ、という自信がこういう作品を生む土壌になってきているのかもしれない。好感をもてる舞台だった。

ルクト舎（11月18、19、20日）

『殴られてもブルース』

加野こういち／作
大島総一郎／演出

「どこかへ抜け出したいが、どうしても抜け出せない」という状況な

のか、そんなことはない時代にもかかわらず、そう感じるといういわば「時代の閉塞感」が描きたかったのか、はっきりしない。

戦中派の老人からすれば「戦時中」の日本が、否応なしの獄中みたいな閉塞状況だったため、現在をそうはとらえられない（高校の寮の文芸誌に「明るい外に出ようとしてガラス窓にくりかえしぶつかる蛾」の詩をのせたら、憲兵隊から削除命令がきて、その頁を破ったことがある）。だから後者の「閉塞感」だろうと思うが、しかし「町を出ようとすると抑圧される」というのは、意識としても現在は希薄なのではないか。自由がないとするなら、もっと具象的にエピソードが描けるのではないか。したがって捕らえられ、裁判になっても不明瞭、かと思ったら、天から網が落ち、みんなが網にからめとられてしまう。裏にはさらに裏、奥にはさらに奥があって「漠たる不安」そのものが、正体なのか――と迷ってしまう。

ベテランの俳優たちがそれぞれしっかり演じていたから、「地方自治体なんかでリコールなんかして騒いでも、みんな中央政府の網にすっぽりやられるってことさ」という解説があり、「それにしてはブルースってなんだよ」と不服の声も聞かれた。

劇団埼芸（12月4、5日）

『初恋』

村山知義／作
鹿喰きよし／演出

「なつかしい新劇！」舞台装置の写実的なこと。

やっぱりわが小学校6年生のころ、こんな座敷での団らんがあった。ただ舞台の関係から、ずらり観客席にむかって座っての食事風景は、ちょっと違うのではないか。両親と叔父叔母が一列、向き合って子どもたちが一列、その間に女中さんがいて世話をするのではなかったか。夜、帰らぬ息子を待つ大人たちも、電灯の下に丸く座を占めたのではなかったか。これは電灯の明かりのとどく範囲で円くなってしまうからだが、こんなことが気になるのも、舞台があまりにも写実的だったからだろう。それに、いくらお祭りといっても子どもがあんなに大きい、母親があんな派手な着物は着なかった。時間の推移を舞台上の時計の針を動かすことで示していたが、奥で遠すぎる。「めくり」も必要か。

若い2人と大人2人の感情の流れが対照的に描かれており、奥行きの深い「芝居」になっていた。

日中戦争の始まった年、それからの急速な戦時体制という事態の展開を全く感じさせないこの芝居は、あえてそんな空気を見せないものにしたのか、どうだったのか知りたいと思う。すでにその年の12月には南京陥落があり、小学生も旗行列に駆り出されたりしたのだから。ともかくなつかしい芝居だ。

（東京　Ｙ・Ｙ記）

ストレートでさわやかな舞台

黒石演劇研究会『鉄道員（ぽっぽや）』

浅田次郎／原作　山本忠利／脚色　古川幸仁／演出

城谷　護（京浜協同劇団）

杉山隆一氏が元気なときに見ておきたかった黒石劇研の芝居を、昨年10月24日、ようやく見ることができた。浅田次郎の直木賞受賞作をうちの劇団の山本忠利が脚色した「鉄道員（ぽっぽや）」である。

うちの劇団も初演、再演合わせて30回ばかり上演していたので、先入観なしにといえばそれはちょっと無理な話だが、なるべく素直に見るようにした。

会場は黒石市民文化会館の多目的ホール。２００名くらいの会場。私が見た日曜日の夜の部は満員だった。３ステージだから五百数十人の人が見たことになる。

舞台はさわやかだった。力むことなく自然体でやろうと心がけたのか、それとも黒石の劇団員はもともとそうなのか、芝居は淡々と進んでいった。だから、登場人物が実生活ですぐそばにいるような気分になってくるからふしぎだ。「この作品を読んだときの感動を舞台でみなさんにうまく伝えられれば」と演出の古川幸仁（ふるかわでなくコガワとよむのだそうだ）が公演パンフで述べているが、そのストレートさが、舞台と客席との垣根をとり払ってくれたのかもしれない。

乙松（角田正実）は、いい味を出していた。そして、その同僚の仙次（加賀谷治）もまた人のいい初老の男の味を出していた。ただ、それだけでいいのかと思うのは欲ばりなのかもしれないが、この２人にもうひと味ほしかったのは、２人の微妙な対立やズレがもっとシャープに出てほしかったことである。これは私の勝手な推測でしかないが、黒石劇研の役づくりに欠けている点ではないかと思った。変わっていく局面でキラリとしたものを見せてほしい。

少女役の後藤陽子は、10代から20代までを鮮やかに演じてみせた。これはすがすがしかった。映画の広末涼子の悪口を言うつもりはさらさらないが、それを超えたあどけなさと成長した姿への飛躍があって、よくやったとほめたい。

音楽は選曲だと思うが、古川幸仁と北山寿美子のコンビがうまく曲を選んでいた。照明は見たことのある人だと思ったらそれもそのはず、劇団支木にいて、職場の転勤で埼芸にもいたことのある市川博之だった。彼がこういう形で全リ演の仲間劇団の仕事を手伝っているかと思うとうれしかった。

会場の入口に、うちの劇団から贈った川崎大師のだるま（劇団員の寄せ書きをしたもの）が飾ってあった。芝居がはねたあと、観客は感動した面持ちで帰って行った。あとで聞いた劇団の話によると、初めての客、若い客が多かったという。雪深い地方にあって、こうして地域の人々に支えられている地域劇団は幸せだと思った。撤去作業では、どこから現れたのか30人も40人もの人たちが手を出していた。劇団員は12人、実働は10人というが、こうしてＯＢの人たちや支援者が必要なとき力を発揮してくれるのだろう。劇団歴53年という歴史を感じさせる一幕でもあった。

２年前に亡くなった、演出もやり事務局長を務めていた杉山隆一のあと、黒石劇研はどうなるのかと心配していたが、昨年の「イーハトーボの劇列車」の演出者中辻鉄雄（劇団ＯＢ）とともに、今回演出を担当した古川幸仁がいい仕事し始めたことはうれしい限りだ。新鋭の古川の今後の活躍に期待したい。

世相を切って見せる舞台

教師の劇団創芸の『トラブル　トレイン』

萩坂心一／作　小野川洲雄／演出

東京で活躍する「教師の劇団創芸」の『トラブルトレイン』を、12月26日、神田パンセホールで見た。萩坂心一作、小野川洲雄の演出である。作者の心一君は、われらの「演劇会議」の前編集長、萩坂桃彦氏の息子さんで、明治学院高校の教師である。

事故続きのＪＲの電車がまたまた事故で止まってしまう。その電車の中で、さまざまな人間の実像が浮かび上がり、現代の世の中を風刺するという作品構成である。

電車には、山下という女の中学教師が乗っている。彼女は自分の教え子で現在不登校児となっている西川

智子（舞台には登場せず）と大井町駅で待ち合わせることになっていてこの事故に遭った。智子を説得してようやく今日の遠足に参加させることができたので、張り切っている。ところがこの事故。動かない電車に、待ち合わせ時間を気にしている山下は苛立ってくる。

山下という教師が教え子の智子と会えるかという期待感を観客に持たせて、その間にいろんなことが起こる。不登校の女子高生とその彼氏、女だけ3人で旅行に出かける主婦たち、リストラで失業した元大手出版社の編集局長、不況にあえぐ零細企業の社長、沖縄出身の売れないミュージシャン、地雷除去などの国際ボランティア活動の男性、養護学校の13歳の少年など12人の乗客が、次々とからみ合ってくるという仕掛けである。こういう登場人物を通して、教育、リストラ、沖縄、地雷問題などを抉っていく。

「いるいる、こういう人。車内に閉じ込められた12人の人間模様」と宣伝ちらしに書かれているが、そのとおりである。

出てくる役者たちは全員が教師か学校関係者。第54回公演となっているから30年くらいは続いている劇団なのであろう。ベテランが多いらしく、なかなかの演技力である。私もそう思ったが、一緒に行ったわが劇団の仲間たちも「なかなかやるね」と言っていた。先に、どこかで試演してみたら評判がよかったので、今回あらためて公演としたのだそうで、また再演したいとの声も劇団のなかで持ち上がっているそうである。

試演会のとき寄せられたアンケートの一部が公演チラシにのっているが、「テーマがよく、子どもも楽しく見させていただきました」、「意外性があってとても楽しめました」、「現代社会の抱えている問題性と同時に、そこに秘められている人間の再生の可能性を見たような気がします」とある。

台本を読んだり芝居を見たわが劇団員の意見のなかに、「いろんな問題が投げかけられてはいるが、一つの事件なら事件が深まっていくといいね」というのがある。それはそのとおりであるが、作者はこの作品で、むしろ一つにしぼらないで現代の問題点をごろっと投げかけるところに狙いを置いたのではないだろうか。押しつけがましくなく、投げかけてみる。そこから何かを汲み取ってほしいと思ったのではなかろうか。

私はこの作者に期待している。今、脂がのってきているとき。とにかく思うことを書きまくってほしいと思う。そのあと、きっと一つのテーマにしぼり込んでいく作品が生まれると思う。

NGキッズ（名古屋劇団協議会）の『窮鼠猫をかめ』

栗木　英章（劇団名芸）

1　はじめに雑感めいたことから

去る1月末、東の総会が行われたが、その席上で編集部から「中部の劇評が全然ない」と強く指摘された。たまたま目に入った「劇団活動報告」の、上野市民劇場のところに「……公演の舞台批評が全リ演内で反映される機会が全くない。ブロック活動も含め考慮してほしい」と記されてあった。曲がりなりにも全リ演に長く籍を置く一人として責任も感じ、とり急ぎ拙い劇評を書く次第。とはいうものの私などの観方や文章はマンネリ化の極みなので、次号から中部ブロックの新鮮な劇評を期待したい。

2　『窮鼠猫をかめ』（2／4～6名演小劇場）

これは、名古屋劇団協議会（在名6劇団加盟うち全リ演は演集・名古屋・名芸の3劇団）の若手が「NGキッズ」と称して3年前に発足、その3回目の公演で、劇団演集・磯谷誠の作・演出である。磯谷としては初の作・演出であり、ケイコ開始が12月という短期間の厳しさも含めて、各劇団から不安の声もある中、公演の推進メンバーの熱意に賭けてスタートした舞台だ。結果はどうだったか。

物語りは三つのオムニバスドラマを、二人の若者の語らいでつないでいく形で進む。「断れない」は、何事にもノーと言えない若いサラリーマンが最後は女に殺される話、二番目の「死語」はある教室に雑多な人物が入り込んで討論という不毛な話を進めるうちにタイムスリップしてときを失っていく。三番目の「人質」は、女を人質としてたてこもる男が、取調べごっこの末、その女に銃を渡し、逆に撃ち殺される。こういう不条理めいた劇にあれこれの解釈や「わからない」というのは禁句なのかも知れないが、少なくともタイトルの“猫をかめ”というアクティブな問いかけが客席に届かない、不明なまま幕が降りた。

「断れない」も、ただ気の弱い男の苛立ってくるエピソードにとどまり、「死語」では描かれる冗漫な世界の意図も意味もわからない。教室での討論なら、例えば描こうとされ

ていたバラバラの状態のクラスへ、OBたちが行く末、生き方を諭す目的で訪れるがその討論の過程で、OBたちも含め体制に推し流されているあたりをブラックユーモア的に提示したらどうだろうか。「人質」にいたっては自ら出演したせいもあり、書かれた情景と異質な重い演技で違和感が拭えなかった。

新しい挑戦は大切なことだ。若手の演技にも、各々の所属劇団の公演では観られない輝きも部分的にはあった。しかし、決定的なのは作品だ。古手であろうと若手であろうと、合同公演というのは、単独劇団ではやろうと願ってもできない作品に取り組むことに意味がある。果たして今回の作品は、各々の自劇団公演でも取り上げたいと願ったものであろうか。途中、有効な助言ができなかったことに反省も残る。

アンケートには、友だち感覚の「よかったよ」という感想も寄せられているし、本番の舞台から、出口のない状況の投影も感じられた。テレビ番組「世にも奇妙な物語」の亜流との指摘も聞く。少し辛口にすぎる批評になってしまったが、深いため息とともに、途中で席を立ったお客さんを忘れないでほしい。

ともあれ、厳しい局面で一つの舞台をまとめあげ、400人の人に観てもらったのだ。今回の初仕事をバネにして、今後一層努力を積み重ねて、地元に新風を巻き起してもらいたい。

総会が終わった直後というせいもあるが、私たちは今、こばやしひろし議長が東の総会に発表した基調報告の、次の苦渋の一節を自分のこととして読み返す必要があると思う。

「……デッサンのできないものが抽象画を書くようなもので、人間のかけない者がドラマと称するものを書きまくる……今日の資本主義の混迷の中で、その何で共鳴を得るか、目に見えない観客を何で手繰り寄せるか、今やその手繰り寄せるもの、企画が大切な時代なのである。それによって集団が燃え、観客が燃え、舞台は燃えるのだ……」

三　歴史の重み

去る2月14日、故若尾正也氏（演出・照明家。元演集代表、元東リ演副議長）の七回忌法要が行われ、百人以上が参列した。その後、若尾夫人（隆子さん）の主催で昼食懇親を兼ねた偲ぶ会が行われ、懐かしい顔ぶれで思い出話に花を咲かせた。その席上でもPRされたが、演集は久しぶりにオリジナル作品『黄昏の季節』（原作／佐江衆一「黄落」より、脚本／島田たろう）を3月2～4日上演する。この原稿の締切り日以降なので残念ながら劇評は書けないが、老いと介護という切実なテーマを真摯に投げかけてくれることだろう。また2月27日には、岐阜「はぐるま」の創立45周年を祝う会が催され、劇団の「あゆみ」や「こばやしひろし作品集」が出版される。京浜

協同劇団も「鉄道員」などいい舞台を生み出しているし、静芸も小島真木さんが健筆をふるっている。かつて私たちが東リ演に加盟したとき、先頭を走っていた劇団の元気な活動は、何よりも大きな励ましであり目標といえる。

若い人たちの舞台を観て、あらためて歴史の重みを、それを次世代へどう引き継いでいくか考えさせられる2000年の年明けであった。

庶民の情愛を感じさせる

劇団だいこん座「父（ちゃん）と呼べ」
藤沢周平／原作
境野修次／脚色
高橋　寛／演出

戸村　昌也

私が観たのは夜の部だが会場はほぼ一杯。観客に子どもの数が多いのにはちょっと驚かされたが、題名のせいからか。

さて、今回の「父（ちゃん）と呼べ」は、我が郷土出身の作家、藤沢周平の初期市井物の代表作の一つである。だいこん座にとって初の藤沢作品挑戦であり、地元劇団によるものとしても初めての公演になる。藤沢作品の持つ心にしみるような哀歓や人懐かしさをどのように舞台で表現するか、期待と不安が交差する中で幕が開く。

江戸下町の長屋に住む、初老のしがない叩き大工徳五郎は、ひょんなことから男の子を拾ってきてしまう。女房のお吉と乱暴な口を聞きあいながらも、この子を不憫がり、わが子のようにかわいがって育てるようになる。はじめて寅太と名を明かされて喜ぶお吉の様子や、近所の子らにいじめられて泣きながらしがみつく寅太に、徳五郎が「今日から俺がおまえの父（ちゃん）だ、父（ちゃん）と呼んでみな」という場面は心を打つ。そんなささやかな一時の幸せも、結局は寅太の実母があらわれて、寅太はあっけなくその母親のところへ帰っていく。二人っきりになった夜、徳五郎はお吉に「父（ちゃん）」と言わせて、お互いに涙をこぼす。

いかにも藤沢周平らしいこんな名場面で終わるのだが、しみじみとした寂しさと庶民の情愛を感じさせる良い舞台となっていた。脚色もやや場面転換が多すぎる感じはしたが、原作の雰囲気をよく伝えていたし、二人の主役も誠実に演じ、子役も達者で、だいこん座もどんどん層が厚くなってくるなとうれしかった。

（だいこん座友の会々員　元高校演劇部顧問）

含蓄深いタイトル

草川　八重子（作家）

人間座『子狐たち』

リリアン・ヘルマン／作　小田島雄志／訳　藤沢　薫／演出

人間座のスタジオ落成記念公演「子狐たち」を観た。すぐ目の前で芝居が進行する、親密な空間である。下足札をもらって上がるのもより家庭的な雰囲気で、床暖房で足元が暖かかったのもうれしい心遣いであった。どういう仕掛けの建物になっているのかわからないが、二階への階段のある、ピアノもあるリビングルーム、しっかりしたセットが組まれている。オカネかかったやろなーと、貧乏人はすぐそんなことを思って、なにがなし緊張したのである。

芝居が始まるとたちまち、私は一九〇〇年アメリカ南部にワープして、一つの家族の立会人とされてしまった。芝居が終わっても、普通の「観客」に戻れず、酔っ払いのようにふらふらとスタジオを出て、どうして家に帰ったのか記憶も定かでないのである。一種の酩酊状態であったろう。芝居の毒気に当たった時の症状である。

「子狐たち」という芝居に私は何の予備知識もなかった。「噂の二人」は観ており、もう半世紀近く昔、京都の昔人間には懐かしい「労働会館」で「ラインの監視」を観た憶えがある。映画「ジュリア」も観たので、リリアン・ヘルマンのことはちょっとは知っているという程度であった。

タイトルの何やら可愛らしい、子狐たちがじゃれて睦みあうというイメージとは、まるで違う「飽くなき欲望が跳梁する」骨肉の争いである。黒人たちをだましては、次第に大地主に成り上がっていった一族「ハバード・サンズ商会」が、北部の工業資本と結びついていく、アメリカ資本主義の勃興期を、一族のドラマとして、ダイナミックに描いている。

わが家で楽しみにしていたTVドラマ「大草原の小さな家」とほぼ同時代であろう。この一族はすでに労働から遠く、成り上がりものの痕跡を色濃く留めているものの、洒落た

家と服装、社交術も、多少の差はあれ、手にしている。兄弟の一人は没落した「南部貴族」の娘と結婚して、息子に「家柄のよさ」をその農園と共に残している。

芝居は「綿を工場に」ではなく「工場を綿の所に」たて、三人の兄妹が平等に投資して株を持つと決まった夜から、二週間の出来事である。この期間に彼らの衣裳は次々に剥がされ、本質が剥出しになっていく。兄妹の駆け引き、企み、取引。舞台はすべて、銀行家の妻となっている妹レジーナのリビングルームである。

彼女は病弱な夫を北部の病院に入れたままで、娘と召使たちとで暮らしている。田舎暮らしに飽きて、シカゴの上流社交界に入りたいという強烈な上昇志向をもっている。その絶好の機会到来なのである。二人の兄では集められない資金を自分の夫に出させることで、三分の一よりも多くの分け前を要求する。夫は自分の死期の近いことを悟っており、そんな話には乗り気でない。どうしても夫に出資させたい彼女は、娘を迎えにやって無理矢理夫を帰らせる。長旅に疲れ切った夫に出資を迫り続ける彼女に、夫は彼女の本心を見抜く。

兄弟は銀行家が貸し金庫に債券を入れっぱなしにしていることを知り、盗みだして資金に使う。レジーナ抜きで、儲けは山分けになるし、数か月借りるだけだから。しかし銀行家はそれを知ったうえで、兄弟に貸したものだと妻に宣言する。おまえには権利はないのだと。発作を起こした夫を、冷然と見つめて薬を与えず、意識をなくしてから召使を呼びたてるレジーナ。兄たちを、窃盗犯として告訴すると脅し、嫌なら自分に七五パーセントを寄越せと堂々と要求する。「風と共に去りぬ」のスカーレット・オハラを資本主義の毒に潰けたような女性である。

この兄妹がドラマの骨格をつくるのだが、清らかで純粋な魂を持ち続ける人たちも登場する。黒人のメイド、彼女に育てられたレジーナの娘、「南部貴族の娘」たちである。彼女たちの良心は風に曝される蝋燭の炎のように頼りなげで、こわれかかってもいるのだが。だがレジーナの娘は母とは違う生き方を探して、家を出る決心を告げるのである。

演技陣ではレジーナを圧倒的な存在感でみせた菱井喜美子をはじめ、みんな大健闘であった。「南部貴族の娘」は大変むつかしい役だが、芝居のうえではレジーナと対等の重さを持つ役だろう。壊れかかった神経を持つ者の放つきらめきが欲しかった。

この作品が発表されたのは一九三九年、第二次世界大戦が始まった年である。ファシズムの嵐がついに世界を戦争の嵐に巻き込んだのである。資本主義勃興期の彼や彼女は成長して、ファシストになったのである。「子狐たち」とはなんと含蓄深いタイトルであったことか。

家族は恣意的につくれるか

劇団未来『レンタルファミリー』

砂本量／作　森本景文／演出

演劇評論家　神沢　和明

「レンタル」という言葉が広まって、もう随分になる。豊かさが生んだ使い捨ての時代、という捉え方であの時はいたけれど、人が本当にもたねばならないものは何か、人にとって取替えのきかない唯一のものはまだ存在するのかという、問いかけであったのかもしれない。家族というものはレンタルで補えるような単位だったのか。この『レンタルファミリー』という苦いホームドラマは、それについてひとつの辛らつな意見をつきつけてくる。

70代夫婦の二人暮しである重明（植木吉弘）とサク（久能淑子）。二人いる息子たちの家族は、もう久しく訪れてこない。寂しさをかこつサクは、業者に「レンタル家族」の派遣を申し込む。そして死んだはずの三男・伸之の家族がやって来たが。彼らはちっとも望ましい家族ではない。やる気に欠ける父、でしゃばりの母、自閉症気味の息子、そしていかにも今風の何を考えているかわからない娘。実は会社から派遣されて来たのではなく、リストラされた家族が新商売として割り込んできたというのだ。

家族のレンタルということに馴染めず、彼らを拒んでいた重明だが、伸之を名乗った男があまりに自分の三男に似て頼りないが故に、いつしか混同してしまって説教を始めてしまう。重明・サクと触れ合う中で、問題を抱えたこの家族たちも、次第に心が溶け合い、家族の結びつきを取り戻し、元気になってゆく。「レンタル家族」が帰って行き、久しぶりに「家族」を経験して上機嫌の重明に、いきなりサクが離婚を申し出る。私もレンタルされていたのだ。彼女は重明の気持ちを斟酌することなく、さっさと宣言して、出て行ってしまう。一人取り残された重明。やがて彼の口から意味のない笑いとうわごとが流れ出した。

上演では「かみがた・きょうばし

版」とついている。場所を稽古場の周辺に設定し、台詞は大阪弁になっている。大阪と京都をつなぐ京阪電車のターミナル、町工場と小さな店、安い飲み屋が多い京橋という町の味わいは出ていないが、この芝居を自分たちの身近にひきつけてとらえようという意図がうかがえる。

訪れてくる家族が本当にレンタル家族なのか、それとも死んだ三男の家族が訪れたのか、台詞や演出ではぼやかした表現がされている。外出したサクが戻るまで演技を始めなくてよいと言う重明に、何を言っているのですお父さん、とまるで重明がボケているかのようにしつこく迫る様子や、重明自身が繰り返す、この男と伸之との深い相似（その妻同士も似ているらしい）、また芝居の中でしばしば本当の父子のような言葉が聞かれる。作り手たちの意図を勝手に読めば、本当の家族とレンタルの家族に差はない。いや、すべての関係がレンタルのようにたよりないのだ、ということか。であれば、妻のサクまでが、自分もレンタル期間がきれたので、と言って去ってゆくのはわかる。ただし彼女が、これからは自分の好きなことをする、と言い残して、長男の所に赴くというのは奇妙に感じた。私なら、妻が去った後重明が二人の息子たちに電話をするが、どちらも「この電話は現在使われておりません」と応対され、彼らもレンタルだった、とするのだが。

レンタル家族が立ち去って、ほのぼのとした気分の中で終わるかと思う途端、悲劇に急転してしまう転換は観客にも衝撃的である。重明は一挙に惚けてしまう。重明が大切に毎日ネジを巻く柱時計のゼンマイが壊れてしまうのは、説明的だが分かりやすい。

今やコンピュータでペットを飼い、それと会話して喜ぶ時代である。「ヴァーチャル家族」というソフトが売り出されても不思議ではない。よもやみつる氏ならそんなテーマでおもしろいものを書くかもしれない。

植木はすぐ説教する頑固者で口うるさいくせに、結局は妻にたよっていた男の哀れな無力さを、どこかユーモアをもって表現している。味のある台詞だが、始めに力がこもり後半がつぶやくように聞こえなくなる癖がある。そこに大事な言葉があると、不自然に強調される。息の配分の問題か、それとも台詞回しを細工することがかえって声をひきこんでしまうのか。広い所で稽古していれば気づく問題点のはずだが、狭い場所でのテーブル稽古で演技を作ってしまうと、見過ごし（聞き過ごし）てしまうだろう。久能は明るく夫に献身的な妻と見えていて、最後に夫を突き放すどんでん返しが印象的。伸之の吉田実のとぼけたような表情と口調がこの不思議な家族にふさわしく、その妻の三原和枝のはきはきぶりと良いコンビである。

（11月13日昼　未来ワークスタジオ）

神戸職演連『法王庁の避妊法』

飯島早苗・鈴木裕美／作　菊地照一／演出

大正中期。新潟の産婦人科医荻野久作は、臨床医としての忙しい毎日にもめげることなく、「女性の排卵日はいつか」という難問の研究に没頭していた。子供を望みながら妊娠しない女性、多くの子供を抱えるにもかかわらず妊娠が続く女性。ある日、既に7人の子を産み、もはや望まない子供を妊娠したキヨが難産の末、母子ともに死んでしまった。自分の無力を悟り研究の意欲を失ってしまう久作。その彼に大きなヒントを与えたのは、子供を望んで得られないハナの一言だった。月経から次の排卵日までの日数を考えていた従来の発想は間違っている。月経は排卵の結果なのであるから、排卵日から次の月経までの日数に注目すべきなのだ。力を得た久作は論文を進めるとともに、仮説を実証するため妻のトメに協力を頼む。排卵日をはずして「交合」を行えば妊娠しない。「排卵日」にあわせて交合すれば子供が授かるはずだ。しかしその実証のために子供を作ることを、理解者であるはずのトメは強く拒んだ。子供は「授かりもの」である、それを人間が自由にすることは恐ろしいことであると。

面白い題材であり、タイトルもうまい。だが私はこの脚本には、物足りない思いを抱いている。別に偉人伝を求めはしないが、人間像が、伝え方がお手軽なのだ。久作の苦心ぶりは「遅くまで家に帰らない」という周囲の言葉によって、そして久作自身のナレーションによって伝えられるのだが、舞台での彼の姿から現れてこなければならない。研究をあきらめようとするのも、発見に至るのも、なんとなくに見えてしまうのは、演技のせいだけではない。

この芝居は女性たちによって進められる。排卵日の秘密を探らねばと強く思わせるのは、いつもは明るいハナの大きな悩みであり、授かりものだからと言いながら顔をしかめるキヨの苦労である。そして研究の成功・博士号と名声への切望に舞い上がった久作に、人間の尊厳、命の誕生を軽々と扱ってはならないと警告するのはトメである。未来の芝居とからめていえば、親子の繋がりを人間の恣意で生み出してはいけない、ということでもある。

キヨの佐野康絵はよく気の回るおかみさんらしく見える。だが、子供が腹の上半分にいるらしく、下腹部に重みがかかっていない軽やかな歩き振りは気になる。ハナの衣笠奈緒美は子供を作ることに一所懸命になっている無邪気な明るさが良い。言葉もはっきりして、熱意の感じられるセリフである。トメの山本悠は、二幕で夫に、子供が生まれることまで人間の計算で決めてしまうことの恐ろしさを訴えるところに、説得力がある。一方で久作の坂井優は、口下手で要領の悪そうな田舎医師になっているが、長台詞になると相手に話し掛けないで自分に説明している。助手の古井の中垣和彦は、真面目で気の良い若者を見せるが、クリスチャンであることをもっと出して滑稽にできそうだ。高見医師の洲崎雅晴が器用で、久作を理解している部分も見せるが、気取って軽薄そうな男という柄にあわない。

全体にため息が多いのはなぜだろう。熱意にあふれて感情をダーッと出すわけでもないのに、セリフの中や後に疲れたような、ハーッ、が入る。間をとっているのか。思い出しているのか。そのために会話がつながらず、テンポにのれない。次のセリフの者が、前の者のセリフ終わりを明らかに待っている。思ったところまで息が続かないので、セリフの途中で息を調節する、それがため息になっているのではないか。音量と息の量は別ものだから、どんな稽古場でも本息稽古を心がけていると、変わってくるだろう。出演者が揃ってする稽古が不充分になって、やりとりの間がうまくつかめないのだろうと同情はするが、さらに努力してほしい。

（2月12日　神戸アートヴィレッジセンター）

劇団きづがわ『紙屋悦子の青春』

松田正隆／作　山田一己／演出

演劇評論家　阿部　好一

老夫婦が彼らの出会った戦争末期のころを回想する。その過去にも現在にも桜の花の思い出がからむ。一見、ふつうの回想形式に見えるが、その過去の場面に現在の老夫婦の会話が突然聞こえてくる箇所がある。ふつう回想形式では現在の場面に過去の声が聞こえてくる例はあるが、回想された過去の場面に突然現在の声が聞こえてくる例はあまり知らない。時間を超越して流れる人間の意識下の声を聞くような——不思議な魅力のあるドラマである。松田正隆の92年の作品。

鹿児島県の特攻基地のある町。紙屋安忠夫妻と安忠の妹悦子、安忠の学校の後輩の海軍士官明石とその友人永与。地方弁で語られる一見素朴でユーモラスな会話、その奥に揺れ動く感情のさざ波。安忠夫妻も悦子も内心では明石のプロポーズを期待

しているが、死を期した明石は自分の思いを抑えて永与を紹介する。安忠（中屋光雄）以外はダブル・

キャストで、それも組合せがさまざまあるが、筆者はそのうちの2回を選んで、ともかくも全員の演技を見ることが出来た。プロポーズに来た士官二人と悦子とのぎくしゃくした応対、それでいてとぼけた会話が一番の聞かせどころだろう。これが筆者の見た二つの組合せのどちらも面白かった。池田広美、河塚俊哉、島本拓治の組が心の動きを明快に演じわけていたが、それだけにややオーバーに見える部分もあった。若い士官たちの無骨で純朴な人間性を強調する意識が、劇の流れを少し重くしたようでもある。もう一方の橋野悦子、寺島由浩、玄羽哲雄の組は心理表現の面ではやや弱く、明快さを欠くが、ユーモラスな雰囲気の出ているところが評価できよう。

ただ出演者によっては演技に少々クセがあるように見える人もいた。それが個性的というのであればいいのだが、どうもまだそこまでの面白さなり説得力は持っていないようである。この問題はまだもう少しこの劇団の活動を続けて見たうえでないと正確には言えないかと思うが。さらに欲を言えば、戦後の老夫婦ふたりの場面でもう少し情感がほしいが、これがどちらの組も充分には出ていない。ここに力点を置いてしっかり見せたら、さらに舞台に深みだ出たのではないかと思う。

この公演は大阪市大正区の劇団稽古場で行われた。本来芝居を上演するのは少々無理なような小空間なのだが、やはり戯曲によっては案外効果を生むものだと思った。この作品などはその点でも特筆に値する。数少ない登場人物と小空間のなかでこそ生きてくるドラマもある、と知ってはいるつもりだが、それ以上具体的に考えたこともなかった。ところが、今回その一つのいい実例を見せられたように思う。ともあれ、いろいろな意味で手応えのある舞台だった。

（99年11月19～28日劇団稽古場）

客演がプラスに働いている

演劇評論家　今泉　おさむ

劇団大阪『華、散る』

芳地隆介／作　熊本　一／演出

明治の時代、自由民権運動に目覚め、以後終生、女性解放運動に尽力した〈福田英子〉の半生を描いたドラマ。世に知られる爆烈弾事件までは、花田清輝が「明治ダイナマイト娘」で描いているが、これはその後の彼女の軌跡に焦点を当てている。新しい明治の時代になっても、家族制度は江戸時代封建制そのままを引きずり、女性は男性の陰に閉じ込められたままであったのが、その自立を強く求め、実践していった姿は思い起こす必要がある。

まず、ホリゾント一杯に、〈英子〉を象徴する大輪の花弁が華やかに写し出されているのが目を引く。二つの高みを持つ構成舞台にこれから登場する人々が集まり、その見守る中、溌剌とした若い〈英子〉が走り込んでくるプロローグは観客の興味をかき立てる。そして、現代の若い男女・青年たちが彼女を取り囲みながら、口上人＝コロスとしての役割を発揮しながら場を進めていく。

彼女が人生の中でまつわっていく男たち。婚約者の自由党士・小林樟雄（斎藤誠）、最初の夫となる自由党指導者・大井憲太郎（杉本進）、二番目の夫・福田友作（清原正次）、年下の恋人・石川三四郎（神津晴朗）との交情を通して舞台は進展していく。男たちとの交情から、「英子」の生活を描いていく。女性解放という主題の中で、この目の付けどころは適切であろう。

中村みどり（英子）は溌剌とした風姿は作り出そうとしている。幾多の物事に動じない気丈さを前面に押し出している。だが、時の流れ、年輪の積み重ねによる人間の変化が不十分。場に対する対応は出来ているのだが、人間の成長の過程が表現できたかと言うとやや疑問である。対応する男たちは揃ってベテランをあてたので、個々の人物の骨格はきちんと作り上げている。だがここでも、もう少しアソビというか演技に余裕

が欲しい。ふくらみが欲しいのだが直線勝負であるところがつらい。この硬さは他にも通じる。笑いが欲しい場面（例・やくざの絡み）でも出てこない。真面目さが先立ってしまう。これに英子は合わせてしまっている。中では、清原正次（福田友作）が真面目だが気弱な人物像をうまく表現した。これは最近、他劇団への客演が多い経験がプラスに働いているのではないか。加えて言えば、脇を固める、英子を取り巻く女性たちがその数も含め、劇団の層の厚さを感じさせる。女囚・生徒たちの場面での集団演技がしっかりとしている。

時代風俗への接近として、口上人を現代の若者にすることで、視点ははっきりさせたのだが、うまく演じられたとは言えない。どうもピシッと決まらず力不足である。その点、ロマンを感じさせる定番のバイオリン弾きの音色のほうが時代を色濃く写し出した。運動と体制側との接点には「尾行」が立つ程度であり、彼が民衆との遊離を間際に語るのは批判としては痛烈であり、「自由民権運動」が民衆の中に浸透していかなかったのは事実だろうが、これよりも主題は（英子）の女性解放の心根ではなかったか。そしてこれは一定の成果を成したと言える。全体としてまとまってみると、壮大なドラマとして仕上がっている。

（10月23日　昼　近鉄小劇場）

劇団息吹『煙が目にしみる』

鈴置　洋孝／原案　堤　泰之／作　木田　昌秀／演出

「斎場」における人間模様を描くとなると、故人にまつわって吹き出してくる親類縁者を巻き込んでの争い事となるのが通常だが、ここではほのぼのとした「人間」に対する優しさ暖かさが舞台を包み込んでいる。それは、正面の窓を通して映える散る桜の美しさにも象徴されている。

関西・近郊都市のとある斎場の待合室。そこのソファにへたりこんでいる二人の男。実は死者。三途の川の渡し賃をめぐっての最初のやりとりで笑わせる導入の仕方がうまい。中年の野々村浩介（平尾光秋＝客演）は高校野球の監督。家庭を顧みず打ち込んでいた男が、引退したとたんに脳出血で死亡。母はまだ元気。老年の北見栄治（岩崎徹）は悠々自適の一人暮らし。共通の趣味、競馬で知り合った29歳のあずさ（池内利津子）と愛しあったあげくの腹上死という羨ましい結末。ただし、独立して事業を経営している一人娘（安田広美）は自分より年下の娘とのそれを恥ずかしがってだれにも知らせず密葬で済まそうとしている。

亡霊がうろついて、斎場に集まった人々との人間模様を眺めることからの各々の人生が浮かび上がってくる。この趣向はさして目新しい発想とは言えない。ストーリイそのものも結局は日常生活のスケッチにすぎない軽いタッチという感じはある。といっても、登場する人物たちが個性豊かに書き分けられ、それを出演者がよく呑み込んでいるので、安心して見られる。現実では二人とも突然の死と言えるので、悲しみの最中なのだが、通夜・葬儀と慌ただしさが過ぎての最後の収まりの時として、一種の諦めと落ち着きが参列者にはあるはず。その雰囲気をしっかりと掴んでいるので現実感がある。それに対応する二人の亡霊からも、諦観した落ち着きとユーモアが漂っている。そこに自然と微苦笑が浮かんでくる。

「斎場」での儀式をしっかりと踏まえ、その間の時間に挿し込まれる遺族・参列者の動き。中では野々村浩介の従妹夫婦のしっかり者の妻（秦野智子）と脳天気な夫（戸高真也＝客演）の様子が笑いを誘う。だが、メインとなるのは北見栄治の葬儀に参加を拒否された、愛人あずさと娘・幸恵との関係。それに野々村浩介の母・桂（柳辺育子）が一肌脱ぐこととなる。現実ではボケ始めている桂がイタコもどきに死者が見え始め、会話も始めてしまう。最初は不審を抱いていた周囲も徐々に受け入れだす。そのあたりを自然と落とし込んでいく雰囲気を演出がうまく作り出している。桂が呼び寄せたあずさと、幸恵の仲をうまく取り持っていく。この結末も、観客は心情的にホッとする。

亡霊の二人がうまくはまっている。ベテランだが、これまでそう器用とは思ってなかったのに、うまくコンビを作り上げている。実生活では全く見知らなかった二人の間に友情？が芽生え、連携プレーをしていく仕様が自然。平尾は自分の劇団の時より伸びやかにやっている。柳辺は台詞は硬いが役そのものにはうまく合わせている。

題名と同じヒットソングを主題曲にし、斎場が用意したであろう「別れの曲」も含めて、音楽が非常に効果的に使われて余韻を残すドラマに仕上がっている。

なおこの舞台は99年度「大阪新劇フェスティバル」作品奨励賞を得た。

（11月20日　夜　クレオ大阪西）

北から南から

●劇団通信

〔劇団　湖（うみ）〕

ご無沙汰いたしております。しばらくぶりの投稿のため、古い内容で申しわけありません。

昨年の一般公演は、渋谷健一／作・飯田信之／演出の『冬の提灯』第2話（この子等をはなさず）となり、10月23日、24日の両日三笠市民会館で上演しました。これは現在の三笠の居酒屋を舞台に展開する人情劇で、渋谷氏の前作（冬の提灯）にも優る意欲と、飯田氏の強い後押しで実現したものです。そしてこの作品は（財）北海道文化財団5周年記念公演（文化財団プロデュース）として、11月5日札幌市「かでる2・7」で発表することになりました。地方からの発信を、大半がはじめての観客にどのように受けとられたのか。その後、三笠の隣り町の美唄市でも11月14日に公演することができ喜んでおります。

いつもと同じように、この公演でも多くの客演のみなさんのお世話になりました。劇団シアターⅡ（札幌）からは真田宏一氏（代表）以下6人、劇団川（江別）からは春日功夫氏以下3人、劇団恵庭小劇場（恵庭）より本間由美子さん（高校2年）、劇団新劇場（札幌）工藤篤氏、フリーの小林秀治氏（石狩）、斉藤和徳氏（札幌）、それに子役として市内の小学生後藤拓也君以下4人、よさこいソーラン（札幌）の「いっちょやりまSHOW」平柳マリ子さん以下6人などでした。ありがとうございました。

なお、この公演の前に上演された、劇団さっぽろ創立40周年公演『常紋トンネル』に加藤元が客演として参加させていただきました。

（加藤）

〔劇団　海鳴り〕

新年明けましておめでとうございます。こちらはもう流氷の真っ盛り。ガリンコ号Ⅱも毎日大活躍です。

さて、昨年は、3月吹雪の公演で幕開けをし、またも12月の吹雪の公演で活動を終了しました。1回限りの予定だった小劇場巡回公演『狸の殿様』は、その後、地元中学校、斜里町公演と、ついでに市内の親子劇場を打ち、結果4ヵ所公演となりました。市内の親子劇場は『狸の殿様』と『ふす』の2本立て、上演時間1時間半、料金500円と手ごろだったせいもあり好評でした。

今年は北海道演劇祭の年で、今後、演目の決定をし、早々に稽古に入らねばと思っておりますが、相次ぐ女優陣の出産で女性が不足。団員募集にも力を入れなければと考えております。

（五十嵐陽子）

〔劇団　さっぽろ〕

全リ演総会、ご苦労様でした。それにしても、全日本リアリズム演劇会議の英語表記がないとのこと、驚きました。

劇団は現在、ファミリー劇場『やまんばのにしき』（作／矢作京介・演出／飯田信之）と『ふたり地蔵』（台本／高坂純・演出／飯田信之）の2本の作品で巡回中です。子どもたちには、やさしい『やまんば』が好評のようです。

3月中旬から、新人研修が始まり、4月から本格的に『やまんばのにしき』と『ぼくたちの遭難』（作／渋谷健一・演出／飯田信之）の稽古予定です。公演班を編成すると約1年そのメンバーで固定されます。キャスティング同様、たいへん重要な要素です。

また、『むかし話の世界』がちょうど3月で200話となります。のべにすると相当数の俳優が出演したことになりますが、その中から自分のレパートリーとしてものにできそうな作品の再演をと考えています。

（林中直樹）

〔劇団　新芸〕

雪あかりの街小樽の新芸です。今回の〆切日の2月20日は小林多喜二の命日。多喜二祭のある日。北海道演劇集団後志（シリベシ）ブロックの演劇ゼミナールを仁木町の劇団馬群別（マグンベツ）を中心に行う日です。

今年の新芸は、9月中旬の北見の北海道演劇祭と10月14日の小樽公演に新芸のために書きおろしてもらった渋谷健一作品『小樽・運河・桜坂』をどうやったら上演できるのかという重い課題に直面しています。13年ぶりの昨年の舞台で代表が「来年は小樽を舞台にした作品を上演します」とあいさつしてしまいましたし、作者とは絶対上演する約束です。

病み上がりの新芸にしてみれば、昭和16～20年という時代で、場所が三つで、登場人物13人なんてどうするのという次第です。主人公が代表の鹿角にあて書きされてるみたいなので、演出をどうしたらよいのかに始まって、キャストの三分の二は他から集めなければなりません。前回と違って、時代らしい背景にするためにはセットも道具も衣装もとんでもなく大変です。製作費が数十万円も足りません。とりあえず2月5日の新年会での人集めと協力の呼びかけから開始したところです。

（宮津）

〔釧路演劇集団〕

現在、北海道では「道立劇場」の建設を計画していますが、経済が冷え込み実現への計画が具体化していませんが、建設に向けたネットワーク作りのための事業として、平成10年度から「北海道舞台塾」を、10年度は道内4か所（釧路・旭川・函館・札幌は日本劇作家大会と共催）で、11年度は（上記の他、北見・帯広）を加え開催されております。演劇を中心とした取り組みであり、今後、この成果が北海道の演劇の底上げとなっていくのか。また、演劇と地域住民がどう近づき触れ合いが生まれていくのか、注目し検討していきたいと考えております。

釧路では、釧路市内8劇団（高校演劇研究会、子どもミュージカルも含む）で構成する釧路演劇協議会が中心となり進めているところです。11年度は、第1部―2月25～27日、日本青少年演劇作家会議と共催で「劇作講座―3分間のひとり芝居」と「横内謙介氏による公開稽古」、第2部―3月18、19日の日程でトヨタ自動車との共催で「トヨタ・アートマネージメント講座」が開催されます。その取り組みを現在進めているところです。

北海道演劇集団の「第19回北海道演劇祭」（隔年実施）

が9月15～16日、北見市と端野町で開催されます。この準備も始まりました。全リ演のみなさまの参加をお待ちしております。

私たち劇団は、現在、舞台塾の準備と「柄本明ひとり芝居」のプロデュースと柔公演に向けた脚本選定を行っております。公演は9月を予定しています。昨年より、釧路では市民を中心に、明治時代にできたレンガ倉庫「浪花町16番倉庫」（330㎡）の保存と創造アトリエ空間としての活用を目指した運動が実り、今年4月中旬にオープンする予定です。劇団では、今年はそのレンガ倉庫での公演を計画して準備しているところです。

（尾田）

〔黒石演劇研究会〕

第56回黒石演劇研究会公演『鉄道員（ぽっぽや）』（原作／浅田次郎・脚本／山本忠利・演出／古川幸仁）を上演しました。1999年の話題作の上演とあって期待と不安の入り交じった複雑な心境でしたが、観劇くださった方々の評判もまずまずで、ほっとひと息ついております。

この作品を上演するにあたり、様々な方々のご協力をいただきましたことを感謝申しあげます。特に脚本家の上演許可から京浜協同劇団の方々にはお世話になり、当日は寄せ書き入りの達磨を城谷さんが持参、観劇していただきました。私たちには日頃縁遠い方の参上に非常に興奮いたしました。夜には城谷さんとゴローちゃんをまじえての打ち上げとなり、貴重な講評もいただき忘れられない一夜となりました。城谷さんにはばらし・搬出もお手伝いいただき本当にお世話になりました。この紙面をお借りしてお礼申しあげます。

今回の公演は、大ホールではなく「多目的ホール」での公演となりました。観客と一体になれる快感は爽快でしたが、舞台が狭い、照明が思うように使えない、客席が思うように取れないなどと多くの問題も残りました。今年もこの小ホールで力を蓄え、いつの日かまた大ホールで上演できるよう精進しております。

さて、近況はと申しますと、未だに公演の興奮を引きずり、ぼーっとしてはいられない時期に来ているのですが、しています。早く台本を決めないとと思いつつ、また酒を、今宵も黒石の夜は冷えると言うのにはしごはしご。台本はいつになったら決まるのー。てな具合です。みなさまがこの紙面をご覧になるときには台本も決まり立ち稽古に励んでいると祈らずにいられません。

（清野）

〔劇団　弘演〕

2000年2月16日（水）劇団弘演の代表である青山司が残念なことに不慮の事故により亡くなりました。63歳でした。

青山は劇団に33年在籍し、25年間、劇団代表を務め、俳優として、また演出も手がけ活躍してきました。体調をくずしてからの10年間は、制作・パンフレット等宣材のデザイン、場面の少ない役ならと俳優も続け、ナレーションなどで参加していました。劇団の相談役としてなくてはならない重要な人でした。

また青山は書家（一戸金鶴）としても有名で、数々の個展を開いていましたし、児童文学の世界でも童話を書き、お話玉手箱と称して昔ッコ話をしてきました。多種多才な人で、最近では「永い入院の経験を生かしてそれをコミカルな芝居として戯曲化したい」

と話していました。その矢先の事故でした。残念で無念でなりません。作間雄二亡き後の弘演をささえ、育ててきてくれた大黒柱を、また一本失ってしまいました。しかし私たちはこの現実に負けるわけにはいかないのです。今こそ団員一同手をたずさえて、良い芝居創りに頑張ります。

今年の公演は、青山司追悼公演にと考えています。

今後も頑張りますので、よろしくお願いいたします。

（作間しのぶ）

〔劇団　やませ〕

稽古場は超寒～っ！小さなFF式と二つの対流式のストーブ。暖冬？どこが～？……この出だしは、この時期の通信の定番になっています。ゴメンナサイ。

その寒さにめげながら（いや、めげずに）、八戸市公会堂文化ホールでの加藤健太郎／演出の『おこんじょうるり』の稽古に入っております。また、小道具等をもういちど丁寧に作り直そうと、稽古日以外の日も必死に作っているところです。

5月の連休が終わったら、湯田町での演劇フェスティバル公演の『我が内なるラピュータ』の稽古に入る予定です。この『我が内なるラピュータ』は、湯田公演が終わるとすぐ、中学校演劇教室で八戸市公会堂で上演します。ちょっとキツイのですが、頑張らなくては……。

キツイと言えば、10月中旬に、大学教員の建築科学会総会での歓迎公演として、柾谷の一人芝居『海村』も予定されています。大丈夫でしょうか？

11月17、18日には、劇団創立30周年記念公演『九戸政実』が待っています。柾谷の脚本は4月に出来上がることになっているのですが、さぁ～て、どうなっているものやら……？「山ごもり」と称して、稽古には出なくていいことになっているのですが、ちゃんと稽古に出ている柾谷。柾谷さん、そんなことしてていいんですか？

とまあ、目の回るような忙しさの1年になりそうですが、とにかく頑張らなくてはっ！

（高森）

〔劇団　だいこん座〕

湯河原での東会議総会はとても有意義なものでした。基調報告の「物の豊かさより心の豊かさへ、経済主義からの脱却」など同感するところが多々ありました。西会議の代表としてあいさつされた園山土筆さんの「あしぶえ」での活動、国際演劇祭のこと、そのパンフレットをみただけで創意工夫しながらすばらしい活動をされている様子がわかります。

特別講演の岩淵達治氏はブレヒト劇の権威として70代とは思えない元気な発言、良いものはよい。こんなブレヒト劇はダメときわめて明解に話されて目がさめました。

だいこん座は5月20日公演予定で（鶴岡市中央公民館ホール・pm7時開演）灰谷健次郎／作・大橋喜一／脚色『ワルのポケット』（一幕）の稽古に入っております。6人の子役は前回は大人が演じたのですが、今回は小・中・高生が演じます。歌も踊りもある芝居なので楽しくやっています。10年以上前にできた作品ですが、灰谷健次郎の子どもをみる目はたしかで現代にも十分に通用します。

〔劇団　仙台小劇場〕

昨秋のハードなスケジュールの後遺症で、なかなか次の公演が立ち上がりませんが、

昨夏できなかった、夏休み親と子の劇場の稽古がやっと始まろうとしています。今年は湯田町のフェスティバルの前に『アリババ』の再演です。今回も、多人数の芝居で、劇団員を増やそうともくろんでいます。

一方では、地元の芝居を地元の人たちとつくり上げるプロジェクトが、また始まりました。仙台のいつくかの地区からの期待はあるのですが、一つ一つ大事に創っていきたいと思います。

（石垣政裕）

〔劇団群馬中芸〕

上越の山々は雪でおおわれ、群馬は冷たい空っ風の吹きすさぶ毎日です。

1月の全リ演総会は出席の予定でいたのですが、劇団の都合でどうしても出席できませんでした。こんな時こそ、参加劇団の活動状況や、また客観的に自分たちの方向性を考えられるいい機会だったのに残念です。

さて、私たちの活動についてですが、この1年はこれまで通り群馬県内と関東近県での巡演活動が圧倒的に多い年でしたが、この間、北は宮城県、南は広島県、島根県そして高知県、福岡県と、遠いところから公演の依頼があり、あわただしい1年でもありました。

公演作品は、99年度の新作『イーハトーヴォものがたり』（原作／宮沢賢治・構成／中村欽一・演出／幸晃彦）と、前年度までの作品『郵便屋のテクルさん』、『宛名のない手紙』（作／中村欽一・演出／ふじたあさや）、『ちびすけ兎のカルロス・ロサーノ』（作／中村欽一・演出／ふじたあさや）、『ちょっと昔のものがたり』（作／中村欽一・演出／ふじたあさや）の4作品です。

今年度の予定は、5月のゴールデンウイークにあかぎ未来スタジオで右記の作品の中から3作品を日替わりで公演する予定です。また夏には新作『コッペパンはきつね色』（原作／松谷みよ子・脚本／中村欽一・演出／ふじたあさや）を仕込み、公演の予定でいます。

様々な困難な状況ばかり目につく毎日ですが、人間性を追求した確かな舞台づくりを目指していきたいと思います。

（追記）私たち劇団群馬中芸はなかなか新しい劇団員が入らず劇団員不足です。関心のある方、ご連絡をお待ちしています。

（秋山としひと）

〔劇団　埼芸〕

◆昨年の12月4、5日に第74回公演『初恋』（村山知義／作・鹿喰清／演出・会場／浦和市民会館）を行いました。1999年の東働演事業の演劇祭にも参加しての公演でした。合評会・団内の反省会で、装置だけはいつもの埼芸らしく立派な舞台だったという評価はあっても、作中の人物の掘り下げや人間関係の機微にまでは演出も俳優も心が届かず、劇的な感動には十分いたらなかったという評価を率直に認め、今後の創造活動のバネにすることを心に刻みました。

しかし、新たな演出家が一人誕生したことは、世代交代という劇団の抱える課題のひとつに挑戦できたという意味で価値あることと評価もし、今後も劇団員の総意をもって新しい演出家を育てていこうと年初定例の総会で確認しました。

◆今年の第75回公演は、「演劇会議」100号記念戯曲集に掲載されている『風・夏冬』（作／相沢史郎・上演台本／佐藤逸平・演出／由布木一平）です。上演会場は7月22日、28日が浦和市民会館、8月25日が岩手県湯田町銀河ホールで行われている「第8回全日本演劇フェスティバル」参加。そして9月30日、10月1日が東京の三百人劇場での公演を予定しています。4人の客演者を得て1月23日、台本作者の読みで稽古開始。目下、岩手・秋田の方言獲得に四苦八苦しているところです。

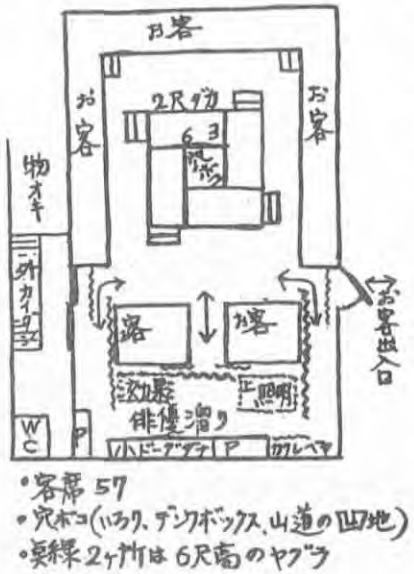
◆劇団の姉妹朗読サークル「きらきらの会」が『星野富弘詩画集』の朗読会を公開することに決定し、今、4人が台本作成に取り組む一方、語り・表現読みの訓練に、ほとんど欠席者もなく猛訓練中です。

（中川）

〔劇団　銅鑼〕

1月21～23日。ドラマフアクトリーVol1『序章』（作・演出／平石耕一）を上演。日本有数の景勝地で高山植物の宝庫である尾瀬沼の自然を開発から守った山小屋の人々を描いたものです。ワークショップから出発し稽古場の空間を生かした実験的な試みとなりました。

試みの内容はまずアリーナスタイルであること（図参照）。四方客席、装置なし、表裏なし、観せる意識なし、観客はここで展開する生活を観るという仕組み。もう一つの試みは、開発計画を阻止するため主人公がとる行動を二通り用意したこと。①行政批判か②世論を高めるか。劇半ばで中断、お客に挙手で選んでもらう、その結果、若干の配役変更をして劇を続行する。お客様も積極的に参加して下さいました。



元々若手を中心とするワークショップから始まった上演ですから主な配役は全員若手、そこへ『センポ・スギハアラ』『らぶそんぐ』の旅から帰ったメンバーが脇役陣、エキストラ陣、スタッフとして直ちに合流、2千年の幕開けにふさわしい総出演の賑わいとなりました。俳優溜りはものすごいラッシュでありました。

『序章』とは4月公演『樹々の息吹』（作・演出／平石耕一）の先駆（プロローグ）に当たることから名付けられました。本号がお手元に届くころ『樹々の息吹』は開幕します。30年前に発足した環境庁が舞台。初代長官大石武一氏は尾瀬沼開発に〝待った〟をかけた大臣です。東上線成増アクトホールにて。4月25～28日。お待ち申し上げます。

今年も『センポ・スギハアラ』の巡演が続きます。『らぶそんぐ』は秋の巡演です。

昨年9月上演の『池袋モン

パルナス』は池袋演劇祭の大賞を受賞しました。地域に根ざそうとする劇団の意志がまた一歩前進できました。感謝をもってご報告いたします。

（菊地佐玖子）

〔青年劇場〕

２０００年を迎えた今年の公演は小劇場からスタートします。

今回小劇場企画として上演される「Ｒｅａｄｅｒ」はアリエル・ドーフマンの『抵抗三部作』のひとつとして『谷間の女たち』『死と乙女』に続く作品です。『死と乙女』についてはすでに4年前に上演いたしました。したがって青年劇場での公演は『死と乙女』に続いて第2弾でしかも本邦初演になります。

時は近未来。〝法王〟と呼ばれる検閲官の許可を待ったくさんの本、その中のひとつに彼しか知り得ない過去が描かれていた。しかもその本を発禁にしようとすればするほどそこに書かれていることが事実となっていく……。ここに描かれた日常の中の「恐怖」は権力者や権力機構の側ということだけでなく、普遍的な広がりを持って我々に迫ってきます。2月23日から27日まで7ステージ、於・シアターサンモール（新宿）です。

『谷間の女たち』は99年、地人会によって上演されましたので、今回『Ｒｅａｄｅｒ』が日本で初演されることで「三部作」は日本においてすべて紹介されることになります。

小劇場公演が終わると間もなく、4月公演、高橋正圀／脚本・松波喬介／演出『菜の花らぷそでぃ』の稽古が始まります。4月14日、15日の2日間、前進座劇場で、18日から30日まで15ステージを新宿南口・紀伊国屋サザンシアターで取り組みます。

さらに、2年前に憲法草案の成立過程を描いて話題を呼んだジェームス三木／作・演出による『真珠の首飾り』の5月東京再演が控えています。その後、『真珠の首飾り』の全国公演のスタートです。関東、東北、沖縄、近畿、東海地方で実行委員会方式や様々な形態での公演が予定されています。

その他、『愛が聞こえます』が6月・7月、九州の演劇鑑賞会を巡演し、『17才のオルゴール』は5月から7月、学校公演の旅がスタートです。合わせて『翼をください』も旅に出発です。年明け早々多忙ですが、劇団員一同元気です。よろしくお願いします。

（宮部）

〔東京芸術座〕

春未だきの2月11日、2年ぶりに〝新春の集い〟を稽古場で開催いたしました。

ミレニアム最初の年もあってか、例年に倍する地域の方々や演劇関係者にご参集いただき、手作り料理による接待ではありましたが、みなさまが喜んでくださり、また劇団活動への激励もいただき、劇団員一同、21世紀へ向けた演劇活動への決意を新たにいたしました。

年頭公演は、アトリエで1月29日～2月2日の5日間、7回公演。再演ではありますが、リメイクした『あの日私は』（構成／乾一雄・演出／山口みる）でした。

2月5日（土）、6日（日）の2日間、劇団始まって以来と思われる劇団演出部主催「これからの演劇、もとめられる芝居」をテーマにシンポジウムがもたれました。講師には演劇評論家の菅井幸雄氏、演劇ジャーナリストの赤坂治績氏、名古屋演劇鑑賞会の宇都宮吉輝氏のお三方。劇

団制劇団における歴史的遺産の継承と若手世代によるその学習の必要性。演劇におけるリアリティとは何か。演劇の魅力とは？いまの観客はどんな演劇を求めているか。など各講師から刺激的問題提起があり、これからの活動に大きなエネルギーをいただいたことでした。

この間の巡演作品は、1月～3月、『夏の庭』（湯本香樹実／原作・印南貞人／演出）を都内とその近郊での中学校を主にした公演。この作品は1999年度、東京都優秀児童演劇選定優秀賞を受賞しました。

4月以降、巡演作品は3年目になる『ブラボー！ファーブル先生』（平石耕一／作・杉本孝司／演出）が北海道・東北・関東・近畿を高校およびおやこ劇場で巡演。『勲章の川』（本田英郎／作・高橋左近／演出）は2年目。東北・関東・東海・近畿・山陰を高校とおやこ劇場で巡演。

さて、劇団創立40周年の掉尾を飾るのは、藤原新平氏（文学座）を招請しての、氏の翻案・脚色・演出によります『夜明けの街』（原作はＥ・Ｄ・フィリッポ）。9月1日～5日は久々の紀伊国屋ホール、6日は大田区民プラザ。大規模公演になるので、今から観客動員の成功に向けて鳩首凝議をしているところです。

（郡司）

〔演劇集団土くれ〕

第48回公演は、99年10月7日（木）～9日（土）で4ステージ、山田太一／作・石塚幹雄／演出の『早春スケッチブック』を上演しました。観客数は約６００。回収したアンケートは１５０枚でした。会場は麻布区民センターホール。東京働く者の演劇祭、麻布演劇市参加でした。

舞台は、会場の舞台条件から、上手に信用金庫渉外課長望月の家、下手に写真家沢田の家として配置しました。舞台については大変好評で作者も観劇に訪れ、「もう少し膨らましても良いと思うところもありましたが、働きながらやっていることを考えれば大変良くつくったと思います。舞台の上下配置も見やすかった」との評をいただきました。

第49回公演は、10月19日（木）～21日（土）。会場は麻布区民センター。現在作品選定中で、4月からの稽古開始の予定です。アジテーションだけでなく、形だけでない内面の本質を問う舞台づくりを目標に。

（石塚）

〔演劇集団石るつ〕

昨年10月公演の『入口と出口』は演出的工夫の不充分さがあり、作品を生かしきれなかったようだ。作品は、ポーランドの状況をより知っている人ならば面白かったが、日本での上演には工夫と親切、ていねいな解説が必要だった。後日、機会があれば挑戦したい。

6月に向けて、稲垣足穂の作品から『天体症候群』と題名して、第3弾を準備しています。そして秋には石るつ版『四谷怪談』をこれも並行して準備を進めています。

6月8日・9日の2ステージ森下文化センター多目的ホール

『天体症候群』（稲垣足穂作品より）

いとうエリコ／台本・演出

〔京浜協同劇団〕

昨年11月3日、劇団は「神奈川文化賞」を受賞することができました。賞金百万円と立派なブロンズ像をもらいました。神奈川文化賞は金額が他府県にくらべ高いことでも有名ですが、稽古場にもロケが入り、「神奈川ニュース」

映画として劇団のことが県内の37の映画館で1ヵ月間上映されたのをはじめ、新聞でも延べ10回報道されたので、劇団としては大いに助かりました。受賞を祝う会を12月18日に開いていただきましたが、こばやし・後藤両議長をはじめ全リ演のみなさんにご出席、またはお祝いのメッセージをいただき、本当にありがとうございました。

公演では、昨年11月から12月にかけて、川村光夫／作『うたよみざる』を藤井康雄の演出で上演。舞台は一定の評価をいただくことができたのですが、お客さんを130０人しか集めることができず、赤字を出してしまいました。このところ、普及する力が弱まってきており深刻な課題になっています。

3月には、北川幸比古／原作・若林一郎／台本・岡田和夫／作曲の『とびだすエンピツ』を「かわさき演劇まつり」で上演します。演出には内田勉が初めて挑みます。この「かわさき演劇まつり」は、伊藤革新市政が実現したときから29年間も続いており、市長がかわっても継続されています。市が毎年約１００万円を出し、足りない分は観客から大人１２００円、子ども８００円をもらうというやり方です。

6月には第38期研究生（8人）が北野ひろし／作『あ・い・ま・い』を瀬谷やほ子・清水治栄の指導で卒業公演としてやる予定。

7月上旬には、稽古場で、大庭久美子／作『さよならパーティ』を室野定子の演出で10回上演する予定です。

全リ演事務局長として東奔西走している城谷護は、妻の瀬谷やほ子と共に腹話術や語りなどのボランティア公演で島根県桜江町から「桜江ふるさと大使」の称号を贈られることになり、3月に現地でミニ公演をやることになりました。

（城谷）

〔劇団　やまなみ〕

2月20日、『鉄道員（ぽっぽや）』の都留公演（山梨県芸術劇場・劇団やまなみ第180回公演）は600人余の観客でした。この公演は山梨県教育委員会・都留市教育委員会・（財）都留楽友協会（うぐいすホール）が主催し、都留市文化協会・都留市社会福祉協議会が後援し実現した再演。昨年の甲府公演同様、「心打つ感動的な舞台をありがとう」との声が寄せられ、劇団員一同感激もひとしお、さらにリアリズムを追究する芝居づくりを確信しあい手締めを行いました。

6月公演（6／17）は、創作劇を上演することで作者を中心に第1稿の検討を進め、4月から稽古に入る予定となっています。

（河野）

〔劇団ＲＩＮ（げきだんりん）〕

約13年前、静芸の一員だったころ、山崎三郎さんに勧められて東リ演作家会議に初めて参加して以来、劇団ＲＩＮを創立した後も参加させてもらっている。創立11年を迎えた今、なつかしくそのころを思い出す。

今は、劇団のほか、静岡市こどもミュージカルの演出、一人芝居フェスティバル実行委員など対外的な活動に振り回される中、自分の立つ位置をあらためて見つめ直しているところである。打ち合わせ等を含めると、ほとんど毎日、演劇関係の活動をしていて見つめ直す時間は本当はないのだが、気分は躁である。岡安さんや白石さん、銅鑼の大峰さんなどの情熱に触れられたことが心の支えになっている

気がする。

全リ演作家会議にはかかさず参加してきた。小さいけれど、一応劇団の代表の自分には、ガキ扱いされるこの会議が実はとても心地よい。劇団員を引っ張っていくプレッシャーがないからだろう。できれば、若い人たちにも多く参加してもらいたい。こばやしさんたちの話は理論的でかたっくるしいと思うかもしれないが、楽しみ方、参加する意味は意外と多い。肩身の狭い自分が言うんだから、間違いない。次の作家会議が楽しみである。

ということで、劇団の近況と今後の予定。11月27、28日サールナートホールで『看護婦物語—命の値段と結婚の値段—』上演、取材した人を含め現場の看護婦さんたちにも好評だったことが、非常にうれしい。1月17日メディアシティー百人劇場で一人芝居フェスティバル参加作品『けせら』上演、こちらは一人芝居の難しさを痛感、観客動員を含め理想と現実の厳しさをあらためて感じる。

今後の予定は、5月28日静岡市市民文化会館中ホールで『新アンドロイドの子守唄』上演予定、8月18、19、20日静岡市市民文化会館中ホールで静岡市こどもミュージカル『生命の樹』上演予定。

静岡の演劇環境・動向が、また最近新しい展開を見せている。その流れを意識しつつ、自分の立つ場所を見失わないようがんばっていきたいと思う。

（中村和光）

〔劇団　からっかぜ〕

昨年12月4日浜松市福祉文化会館で、浜松市芸術祭参加により『ブンナよ木からおりてこい』（原作／水上勉・脚色／小松幹生・演出／布施佑一郎）を上演、幸いなかなかの好評でした。本年度は『アンネの日記』を平井新／演出で秋から冬の公演を予定しております。6公演１０００人動員をめざして頑張ります。

（中村正人）

〔岡崎演劇集団〕

私たちは昨年、30周年を迎え、第60回定期公演には創作を、久しぶりに黒野鑑一／作『ヤマトユキハラ』（南極探検家白瀬ノブの生涯）を上演することができました。もちろん課題を残しての公演でしたが、一方では「重い素材をよくまとめた」などの評価も得て30年の一区切りをつけることができました。

今年度の前半は新美南吉の作品で、子ども劇場を6月に企画しています。そのうち1本は名芸の栗木氏の作品を使わせていただくつもりです。

次に後半の公演について少していねいに説明いたします。私たちは15年ほど前、岡崎文化協会の公募入選戯曲である板倉ミチ／作『人形お七光陰譜』を上演、好評を得ていました。今回、岡崎演劇鑑賞会が創立30周年を期に地元の劇団を育てようと再演計画を打ち出しましたが、経済的にいささかの困難が生じていました。

そんなとき隣の知立市では新築ホールを今年の夏オープンさせます。『人形お七光陰譜』は知立市の山車文楽を書いた本ですので、知立公演でいくらかの経費が賄えないだろうかと知立市の意向を伺ったところ、なんとオープン記念の目玉に置きたいから主催者として制作したいという返事が返ってきました。

結果は、岡崎演劇鑑賞会の拠出額は知立ホールのそれよりも下回ることになってしまいましたが、鑑賞会会員の誠意と小さな自治体の一生懸命

が見事に調和しながらうまくいくだろうと私たちは楽観しています。

ちなみに演出は、初演と同じ新人会の八田満穂氏があたり、脚本は麻創けい子さんが原作『人形お七光陰譜』をリニューアルして上演することになっています。この件については機会がありましたらまた詳しく報告させていただきたいと思っています。

（浅井克彦）

〔劇団　演集〕

前号でもお知らせしましたが、今、3月公演『黄昏の季節』の追い込みに入りました。テーマは〝老人介護〟です。父93歳、母88歳、介護する息子夫婦は共に60歳（こういう状況を「老老介護」と呼ぶらしい）ホームの長老96歳、父の恋人80歳等、役柄のほとんどが高齢者、幸い劇団には高齢者が多く、「年寄り連は全員集合！」でこの作品に取り組んでいます。冬場の稽古が心配されていましたが、みな、元気に（お互い体を気づかいながら）夜遅くまで稽古に励んでいます。今、まさに老人パワーで熱く燃えています。

「老人介護、それは死にゆく人への介護である」これは原作者、佐江衆一氏（黄落）の言葉です。長い人生の最期にだれもが迎えるであろう介護、それはどうあるべきか？一人でも多くの方に観ていただき、そして考えてもらいたいという思いで、舞台創造に励んでいます。この記事が出るころには、その評価も出されていることでしょう。

（公演日　3月2日～4日、於・西文化小劇場）

追伸

長年劇団代表を務めた、故若尾正也の七回忌の法要が2月14日、寿林寺で百余名の参加者のもと、執り行われました。その席上、奥さんで現女優の〝お隆さん〟から手記の出版が発表された。

『一本の金線』　若尾隆子

正也が書いておりました軍隊での日記を読み、夢多き一人の青年正也が、軍隊という枠の中で、何を考え、どう生きようとしたのか、その想いの深さを、みなさまにも知っていただきたい（出版にあたっての言葉より抜粋）。

4月刊行予定、頒価2千円

（島田たろう）

〔劇団　名芸〕

昨秋上演した『302号室の春』（作／栗木英章・演出／片野耕治）が名古屋市民芸術祭に選ばれて、1月25日に授賞式と団内の祝う会があり、盛り上がる年明けとなりました。今年は名古屋劇団協議会若手（NGキッズ）の公演が2月に行われ、名芸からもスタッフ・キャストで多数参加しました。劇評で触れましたので参照いただければ幸いです。

現在は春の定期公演目指して稽古に励んでいるところです。

●劇団名芸第49回公演

『頭痛肩こり樋口一葉』

作／井上ひさし

演出／佐野むつみ

4／16～18　名芸平針小劇場

地元でも何度か上演された名作への挑戦で、女性陣を中心にいい舞台を創ろうと燃えています。引き続いて夏恒例の子ども劇場も、ミュージカル仕立てということで、稽古後などに踊りの基礎訓練をスタートさせました。

●第19回天白、31回南子ども劇場

『冒険者たち』

脚色／小田健也

演出／服部順一

天白＝7月名芸平針小劇場

南＝8月名古屋南文化小劇場

その他、有志が参加している〝反核舞台人の集い〟の活動や、地域の文化ふぉーらむの行事などにも取り組みながら、今秋と来春のレパ討議も始めています。「東」総会に提起された鋭い基調報告にも学びながら、21世紀につながる創造と普及に努力していきたいと思います。

「戯曲『旅人打鈴』は、演者織茂秀子と私栗木が協力して生み出しました。その旨明記しなかったことをお詫びするとともに、上演にあたっては二人の了解が必要ですので承知してください。お願いします」

（栗木）

〔劇団　はぐるま〕

まずは、『ジプシー』の報告からまいります。11月26日から12月5日までの御浪町ホールで11ステージの公演を行いました。観客動員数は目標の1000人には届かず959人でした。狭い御浪町ホールで、舞台も張り出しにしたため、ゆったり見てもらうには80人程度が適正だったのですが、ステージによりバラつきもあり、大台に乗せられなかったのは残念でした。ともあれ、舞台の内容自体は好評で、アンケートもいつもの倍以上寄せられました。親子の絆すらなくなりかけている今の世の中で、三世代が身を寄せ合って暮らす〝ジプシー〟たちの生き方が共感を呼んだのだと思います。

2月27日には、劇団はぐるま創立45周年のレセプションを開催します。今まで劇団を支えてくださったみなさまへの感謝と、21世紀への希望を込めてのもので、今はダンスなどの出し物の練習や、パーティーの準備で忙しい日々を送っています。

また、こばやしひろし／原作の『郡上一揆』が映画化されることになり、クランクインが3月に迫ってきました。これには劇団も全面的に協力することになっています。

このため、今年の春の公演はありませんが、研究所の卒業公演は4月8、9日に『柳（りゅう）』を御浪町ホールで上演します。なお、夏のミュージカル劇場は、8年ぶりの『孫悟空』の予定です。（内田薫）

〔劇団　上野市民劇場〕

底冷えのきびしい伊賀盆地にもやがて春が訪れるころとなりました。まずは1月の『にんじん』公演の報告ですが、〝にんじん〟役をダブルキャストで取り組みましたので、思わぬ難しさと成果を体験しつつの稽古でしたが、いつにも増した熱の入った舞台になり、それがお客様にも伝わっているのがよくわかり、劇場はまさにお客様と感動と創造をともにするところであると実感しました。

観客数も増え好評ですが、遠く岐阜（はぐるまのみなさん）から仲間が観に来てくださり、感激とともに励みになりました。辺ぴなところですがまた来てくださいね。

今後の予定は2月26日に総会を開催して来年の創立50周年にむけての計画を立てるところです。21世紀に新たな力強い一歩を踏み出せる総会にしたいと思っています。

（東恭子）

〔劇団　すがお〕

底冷えのする稽古場での稽古はつらい。雪のふる夜は道路が凍る。そうすると稽古はなし。これまたつらい。そんな中で次回公演の準備中です。もっとも北国の寒さにはかないませんが。

第59回公演『ガラスの家族』

キャサリーン・パターソン／原作・吉原廣／脚色・坂下和

代・加藤武夫／演出　3月11日（土）～12日（日）2ステージ。桑名市コミュニティプラザで。この企画は「日韓文化交流」と名づけて、韓国からのプロの道化師マイムを招待しての公演です。ほかにも美術家との日韓友好美術展も同時に開催します。

芝居の方は、踊りもはいって楽しいのですが、何せ時間が足りな～いと演出の悲鳴が聞こえます。

アイルランドから招聘の手紙が来ました。公演旅行も行きたいし、金はなし。夏の全リ演フェスティバルも参加したいし。どうしたものかと悩んでいます。

〔劇団　たけぶえ〕

昨年秋の公演がチラシまで作りながら実現することができませんでした。

今まではよそごとと思っていた荒波がいよいよ私たちの劇団にも波及してきたようです。仕事の終わるのが次第に遅くなってきて、稽古に来られるのが8時半、9時という人が何人か出てきました。その一方で、9時、9時半になると帰宅しなければならない人がおります。団員のすれ違い活動です。

結局、昨年は5月の韓国公演、（小山内薫『息子』）と7月に2回の市民劇場、（水上勉『ブンナよ木からおりてこい』）を実施しただけでおわってしまいました。

これといった解決策もないまま、年を越してしまいました。新しい世紀を控え、それにふさわしい活動の開始を考えてはいるのですが……。

苦渋の結果、今年度の活動計画は……。

中心となる自主公演では、これから〝近代劇〟をシリーズとして上演していくことになりました。これは昨年の『息子』公演で団員が刺激を受けた結果を踏まえ、これから演劇の原点にかえって勉強していこうというものです。

第1弾としては岸田國士の『葉櫻』、それにもう1本を検討中です。

そして秋には恒例の一般公募による「市民劇場」ですが、今年は11月3、4、5日に「国際地域演劇祭」を準備しておりますので、そのなかで実施しようと思っております。「国際地域演劇祭」は第5回目になります。今回は来るアジアの時代を受けて、韓国・マカオ（中国）それにもう一か国を招聘したいと考えております。

なんだかんだといいながら、今年も大変な年になりそうです。早く冬眠から目覚めなければなりません。

▽春の公演

日本近代一幕劇撰・岸田國士「葉櫻」「紙風船」

5月24・25・26日午後7時～武生市文化センター小ホール

〔劇団　京芸〕

こんにちは、京芸です。まもなく2000年最初のGIレース・フェブラリィステークス。淀のまちはにぎやかになりそうです。キングヘイローかキョウエイマーチか、大穴のレッドチリペッパーか!?いやいや、京芸の大本命は創立50周年記念公演です！

●藤沢薫・早見栄子、役者生活50年の2人がひとり芝居を2本立てで上演いたします。

藤沢『はたがめの鳴る里』（作／下戸明夫）

早見『花いちもんめ』（作／宮本研）

半世紀にわたる芝居人生、芝もダートも不良馬場をも情熱で駆け抜けた2人の役者が、魅せます！　超一流の心と体をどうぞ存分に味わってください。2000年3月23～26日、劇団京芸D・Dシアターで。

●そして、お待たせしました、京芸50周年記念公演『文珠九助』。9月の上演に向けて、着々と計画が進んでおります。地元・伏見の義民伝を上演するということで、劇団員一同、希望に燃えています。

――原作／西口克己・脚本／尾川原和雄・演出／岩田直二でお届けする『文珠九助』みなさま、乞うご期待！

●昨年夏に上演された『POPCORN・NAVY～鹿屋の四人』『鮮やかな朝』も各地での公演が決まり、超有力な若手劇団員たちを中心に全国展開を進めてゆく予定です。

その他、全国おやこ劇場や学校公演、京芸付属俳優教室の終了公演、そして記念誌の発行など、2000年は本当に忙しい年です。でも楽しい！みなさま、今年の京芸は目が離せないぞ。チケット・勝馬投票券のご購入はお早めに♥

●……実のところ、やっぱり武豊が入りそうな気がします。

（赤土綾子）

〔関西芸術座〕

☆1月29日夕より、恒例の『ざ・びらき』を催し、各界より150人の来賓を迎え、劇団員の手料理で和やかなひとときを過ごしました。今年は若い方々も多く、スタジオと稽古場の2面の会場を準備し、大変盛会でした。

☆スタジオ公演。『黄昏』アーネスト・トンプソン／作・青井陽治、堤孝夫／訳・門田裕／演出で3月8日～12日に上演します。同作品は映画にもなった秀作で、寺下貞信、河東けいのベテランも参加します。

☆ファミリー劇場『猫はしる』工藤直子／原作・勇来佳加／脚色・松本昇三／演出で、7月28日～8月6日。関芸スタジオで上演予定。

☆移動公演、中・高・一般を対象に『遙かなる甲子園』戸部良也／作・西岡誠一／脚色・鈴木完一郎／演出で上演中。なお、先の東京公演でも好評を得たが、今年は名古屋をはじめ、近畿の労演・演鑑連8か所、15ステージの例会の予定。

これと並行して、新『薫ing』岡田なおこ／原作・宮地仙／脚色・玉野井直樹／演出が中・高校・子ども・おやこ劇場高学年例会に上演中です。

また小型形式の『宇宙のみなしご』森絵都／作・井上登紀子／脚色・松本昇三／演出が中学・子ども・おやこ劇場高学年に巡演。

☆附属演劇研究所では、第43期日曜クラスの卒業公演が『広くてすてきな宇宙じゃないか』成井豊／作・小松健悦／演出で3月26日、関芸スタジオで上演します。

〔劇団　未来〕

1999年最後の公演、砂本量／作・森本景文／演出の『レンタルファミリー』はかみがた・きょうばし版に改稿させていただき、11月11日～14日、19日～21日、劇団未来ワークスタジオで8ステージ上演しました。

改稿によって、現代の家族関係のありようをより身近に表出することができ、またベテラン、中堅、若手のキャスティングも効を奏しました。舞台セットも稽古場の狭い空間を生かした板坂晋治さんのプランを劇団で製作し、象徴的で現実感のあるものとなり、好評でした。

12月7日から第3期の太鼓教室が始まり、教室生21人は3月8日の終了式までに、八丈島太鼓と八丈島太鼓囃子の

習得に向けて、寒い中、太鼓を猛打しています。

また、12月は1年の締めくくりの第40回総会を開催し、劇団の組織運営、経営、上演舞台の創造、普及の総括と2000年の活動方針を討議しました。

特徴的だったのはm・yが提案した、3月プロデュース公演『BROTHER』(作／よもやみのる)についての討論が活発な戯曲研究となり、正月明けの1月中旬まで続くという続会となりました。最終的には上演そのものはしないということになり、1月～2月の稽古場は2001年2月上演予定の清水巌／作『一九九五こうべ曼陀羅』(大阪新劇協プロデュース合同公演・大阪自演連合同公演)と演劇会議100号記念戯曲集掲載の脚本／相沢史郎・台本・構成／佐藤逸平『風・夏冬』の戯曲研究をしています。

当面の課題は、6月28日～7月2日に上演予定の『太鼓構成劇』台本作成と秋の公演の戯曲選定です。どちらも今のところ難航しています。

(f)

〔大阪府職員演劇研究会〕

昨年、一昨年と身丈に合わない作品を上演して、みなさんから多大なる激励、ご批判、ご指導、ご鞭撻等々いただきましたが、今年もまたもやジャイアント馬場かピッペンかという作品を上演することになってしまいました。鐘下辰男／作『金翅雀(ひわ)の群れ』です。この作品は、昨年秋にNHKTVで「スタジオ演劇」として放映された作品で、ご覧になった方も多いと思います。リストラをする方の矢面に立たされた人事課長が自殺し、その葬儀に集まった、上司の人事部長や首を切られた同僚などが織りなす赤裸々な人間ドラマで、鐘下流の、ハイ・テンションななかにもこっけいな笑いがプラスされた、見たあと長～く残る芝居です。

そんな作品を、一昨年の『ら抜きの殺意』に引き続き、関西で初めて、いやひょっとすると全国で初めて私たち「府職劇研」が舞台に乗せるという、まさに自自公の定数削減冒頭処理よりも恐ろしいかもしれない暴挙を、やってしまうことになりました。しかも6月8日～11日までの4日間で、なんと5ステージも上演するという、これまた前代未聞、驚天動地、阿鼻叫喚の日程を組んでしまったのです。

鐘下辰男ファンはもちろん、年々体力の衰えを感じる劇団員がはたして5ステージをやり通せるか、「怖いもの見たさ」の方もぜひ見に来てください。そして遠方などでどうしてもみることができない方は、次回の劇団通信をお楽しみに！

上演日程

6月8日(木)午後7時～
9日(金)午後7時～
10日(土)午後2時～、6時～
11日(日)午後2時～

上演場所　谷町劇場(劇団大阪稽古場)

「大阪春の演劇まつり」参加

(秋田高志)

〔劇団　潮流〕

2000年がやって来ました。劇団もおかげさまで創立40周年を迎えました。潮流を支えてくださったみなさま、また新たに潮流を見守ってくださっている方々に、深く感謝いたします。これからも日々活力のある創造を展開していきたいと思っております。どうか今後ともよろしくお願いいたします。

40周年最初の公演は1月の

『思い出のブライトン・ビーチ』(ニール・サイモン／作・藤本栄治／演出・近鉄小劇場)で幕をあけました。初めてのニール・サイモンということもあり、演出はじめキャスト、スタッフともにたいへん緊張しましたが、随所に笑いも生まれ客席の反応も上々でした。やはりこの作家のうまさを改めて思い知らされました。

今後の記念公演は『紙芝居ブンナよ木から降りてこい・映像と池下雅子の一人芝居』(水上勉／作・平田一紀／演出・八尾プリズムホール・レセプションホール・3月19日(日))、第二回試演会『リディイチェからの花々』『橘』(マリオ・フラッティ／作・堂崎茂男／演出・稽古場公演・3月24～26日)、『乱れて熱き吾が身には』(吉永仁郎／作・藤本栄治／演出・厚生年金会館芸術ホール・9月1日、2日)と続きます。劇団の伝統と歴史の継承もさることながら、創造は日々新たにの精神で歩み続けたいと思います。

(堂崎)

〔劇団　大阪〕

昨年10月の第50回公演『華、散る』(芳池隆介／作・熊本一／演出)は残念ながら観客数1000人にほんの少し届きませんでした。演出の熊本も苦しみながら戯曲に立ち向かい、役者も主役の中村みどりをはじめ、若手は若手なりに、ベテランはベテランなりに苦悩しながらの取り組みでしたが…。

さて、12月に2000年の作品を決めるべく臨時総会を、明くる1月に定期総会を開催し本年度の方針を決定しました。①ベテランの創造のさらなる飛躍と挑戦を！　②そのためにも「一人芝居」「二人芝居」「実験劇場」等の企画を！　③パソコンを活用し、新しい分野に挑戦！　④8月湯田町でフェスティバル『そして、あなたに逢えた』公演の成功を！

いずれにしろ来年30年を迎えようとするなか、創造面、運営面等あらゆる面での停滞を打ち破らなければ、21世紀の展望も夢も沸いてこないのではと思っています。

『華、散る』の取り組みを契機に、新人それも男性が数名「新人公演」に参加してきました。その中の二人は研究生として劇団に参加し、あとは「新人公演」取り組みの結果ということになりそうです。それにしても久しぶりの男性新人の参加でうれしくなります。

〈公演予定〉

3月3～5日　新人公演『汚れっちまった悲しみに』(劇団稽古場)作／鐘下辰男・演出／堀江ひろゆき

5月18～21日、5月25～28日　第51回公演『光る時間』(谷町劇場)作／渡辺えり子・演出／熊本一

10月20～22日　第52回公演『海の沸点』(近鉄小劇場)作／坂手洋二・演出／堀江ひろゆき

(清原)

〔劇団　かすがい〕

昨年から「稽古場存続の危機」が緊急課題となっていました。団員が増えない。公演財政が苦しい。家賃が払っていけない。次の公演は、稽古場さよなら公演か、と話し合ってきました。今年1月、家主さんの厚意により、家賃交渉成立。なんとか首がつながりました。でも、これからが大事。劇団運営、公演活動と、今年も突っ走っていきます。

さて、創造面では、1作品のロングランに挑戦しはじめました。首のつながった稽古場で、昨年11月に行った『カ

タクチイワシ』を、今年3月に2週間、6月に尼崎市演劇祭、11月に2週間。ロングランの難しさは、前に見たお客様がいる、ということ。同じことの繰り返しでは、ロングランをする意味がない。一度創ったものを、もう一度創りなおす、ということのむずかしさに直面しながら、そして、今までに味わえなかった楽しさも味わいながら、取り組んでいます。ご期待ください。

（当面の予定）

6月10、11日　尼崎演劇祭
場所／ピッコロシアター
（鐘ヶ江）

〔神戸職演連〕

いよいよ2000年が幕をあけました。この節目の年に、私たち神戸職演連は、サークル創設40周年、第50回公演をしました。

『法王庁の避妊法』（作／飯島早苗、鈴木裕美・演出／菊池照一）

2月12、13日　於・神戸アートビレッジセンター

上演台本が決まったのが、昨年の8月。その後、半年間の稽古期間がありましたが、サークル員の仕事の都合などで、なかなか全員揃っての稽古ができず、こんなことで本当に本番を迎えられるのかと、ハラハラしたりもしましたが、公演当日が近づくにつれ、みんなメキメキと調子を上げていきました。両日ともお天気に恵まれ、2月だというのにとても暖かい2日間でした。お客様の反応もよく、おかげさまで好評のうちに幕を閉じることができました。

次回公演については未定ですが、今後ともわたしたちの持ち味である家族的な暖かい雰囲気を大切にしながら、21世紀に向け、よりよい芝居づくりをしていきたいと思いますので、これからも神戸職演連をよろしくお願いします。

（衣笠）

〔劇団　四紀会〕

「暖冬」を覆すかのような終盤の巻き返しに見舞われた今年の冬、みなさまはいかがお過ごしになられましたでしょう。

四紀会ではウイルスが猛威をふるい、スタッフ・キャスト中3分の2が風邪引き状態での本番初日という異常事態を経験しました。それが、1月30日にスタートした110回公演『ぼくはくまです…?』『木竜うるし』。2000年の幕開けを飾るステージだっただけに、これからの多難ぶりを予感させる舞台となりました。そして、それを物語るかのように、というと語弊がありますが、5月に予定していた『ヨンカーズ物語』再演の中止。初演キャスト陣のやむを得ない事情に伴い、涙をのみます。

そんななか、期待されるのが2月に小品発表会を終えた教室生の卒業公演（7月）と、そのOBたちによって進行中の演劇教室30周年記念公演（9月）。ともに若いパワーでこのミレニアム、乗り越えてほしいものです。

おっと、もちろんベテラン・中堅どころにも、エールを送りますですよ～、ハイ。それでは、また。

●当面の公演予定（移動公演を除く）

◆神戸働くものの演劇教室31期生卒業公演
「演目検討中」
7月1、2日（土、日）
県民小劇場

◆演劇教室30周年記念公演
『見よ、飛行機の高く飛べるを』永井愛／作・森卓也／演出
9月2、3日（土、日）
シーガルホール　（里中）

〔演劇集団和歌山〕

30周年なのだ！

劇団は今年で創立30周年。今、3月5日の記念パーティーの準備に大わらわです。西会議の方からもたくさんの方から出席の返事をいただいており、この場をかりて御礼申し上げます。

さて、記念公演は和歌山出身（現在の那賀郡桃山町）の劇作家阪中正夫（1901～1958）の「馬」を9月に上演します。この作品を「古い」と言う劇団員もいますが、どうしてどうして、帰ってきた不良青年徳次郎を軸に、親子、兄弟の愛憎を描いた傑作です。地元の支援のもと、秋に県内各地の巡演が決まっています。ご期待下さい。

〔演劇集団　あり〕

昨年9月26日米子市文化ホールでの、歌舞伎『箟釣瓶』の脚色『燃えてさうらふ』を、県演劇連盟の応援を得、地域の美容師、衣装を集めている人、着付けの人、殺陣師等々の協力を得、2ステージを行い、異色の作品でしたが、幅広い観客700人を迎えました。

楽しかった。わかりやすかった。綺麗であった。日本的でよかったと言われ…評判もよかったと言えます。このような歌舞伎に近い芝居を、地元のアマチュアが観せてくれ、地域に根をおろそうとしていることがわかったと、60、70代の人からのあたたかい励ましもありました。

次回公演は、5月21日、和田憲明／作『アリゲーターダンス』を田中小百合／演出で行います。物語は、若い在日三世の外国人や、出稼ぎ労働者等を描いた、きびしいなかにも明かりを求める、片隅に生きる青春群像といえます。

山陰は雪国で仕方ありませんが、今年は特に決まったように、稽古日に雪に降られ苦労しています。

季節の春が待ち遠しく、そして、文化国家?日本の春はどうすれば迎えられるのかと…

（宮倉）

〔劇団　あしぶえ〕

今年の山陰は例年にもない雪の多さ。八雲村も雪に埋もれ路面が凍結して、稽古を休みにせざるを得ない日が多い冬でした。

さて、昨年の11月12～14日に開催された「99八雲国際演劇祭」は、行政も住民もあしぶえの劇団員も初めての体験で、大変ながらも、夢のような3日間でした。招待劇団員、審査員、そして遠方からお越しくださった観客のみなさま、ありがとうございました。最終的に、276人の完全無償ボランティアと41軒のホストファミリーが集まり、演劇祭開催直前まで、連日連夜準備を行い、「参加者がひとり残らず楽しめる」演劇祭を目指しました。

形式にとらわれないなごやかな雰囲気の開会式に始まり、すべての参加劇団員・審査員が一般家庭にホームステイ。厳しいルールのなかコンテスト形式で行われた上演。「国際理解教育」をすすめるための小中学校への学校訪問。あたたかい雰囲気のウェルカムパーティーと賑やかながらも、別れを惜しんださよならガラパーティー。感動的な劇評会と表彰式。みんなが知恵を絞り、他には見られない演劇祭をつくりました。

改善する点はいろいろありましたが、大きな事故もなく、成功裡のうちに演劇祭は終了しました。そして感慨に浸る間もなく、2001年11月の「第1回八雲国際演劇祭」に向け、準備が始まりました。

劇団あしぶえでは、間近に

タクチイワシ』を、今年3月に2週間、6月に尼崎市演劇祭、11月に2週間。ロングランの難しさは、前に見たお客様がいる、ということ。同じことの繰り返しでは、ロングランをする意味がない。一度創ったものを、もう一度創りなおす、ということのむずかしさに直面しながら、そして、今までに味わえなかった楽しさも味わいながら、取り組んでいます。ご期待ください。

（当面の予定）

6月10、11日　尼崎演劇祭
場所／ピッコロシアター
（鐘ヶ江）

〔神戸職演連〕

いよいよ2000年が幕をあけました。この節目の年に、私たち神戸職演連は、サークル創設40周年、第50回公演をしました。

『法王庁の避妊法』（作／飯島早苗、鈴木裕美・演出／菊池照一）

2月12、13日　於・神戸アートビレッジセンター

上演台本が決まったのが、昨年の8月。その後、半年間の稽古期間がありましたが、サークル員の仕事の都合などで、なかなか全員揃っての稽古ができず、こんなことで本当に本番を迎えられるのかと、ハラハラしたりもしましたが、公演当日が近づくにつれ、みんなメキメキと調子を上げていきました。両日ともお天気に恵まれ、2月だというのにとても暖かい2日間でした。お客様の反応もよく、おかげさまで好評のうちに幕を閉じることができました。

次回公演については未定ですが、今後ともわたしたちの持ち味である家族的な暖かい雰囲気を大切にしながら、21世紀に向け、よりよい芝居づくりをしていきたいと思いますので、これからも神戸職演連をよろしくお願いします。

（衣笠）

〔劇団　四紀会〕

「暖冬」を覆すかのような終盤の巻き返しに見舞われた今年の冬、みなさまはいかがお過ごしになられましたでしょう。

四紀会ではウイルスが猛威をふるい、スタッフ・キャスト中3分の2が風邪引き状態での本番初日という異常事態を経験しました。それが、1月30日にスタートした110回公演『ぼくはくまです…?』『木竜うるし』。2000年の幕開けを飾るステージだっただけに、これからの多難ぶりを予感させる舞台となりました。そして、それを物語るかのように、というと語弊がありますが、5月に予定していた『ヨンカーズ物語』再演の中止。初演キャスト陣のやむを得ない事情に伴い、涙をのみます。

そんななか、期待されるのが2月に小品発表会を終えた教室生の卒業公演（7月）と、そのOBたちによって進行中の演劇教室30周年記念公演（9月）。ともに若いパワーでこのミレニアム、乗り越えてほしいものです。

おっと、もちろんベテラン・中堅どころにも、エールを送りますですよ～、ハイ。それでは、また。

●当面の公演予定（移動公演を除く）

◆神戸働くものの演劇教室31期生卒業公演
「演目検討中」
7月1、2日（土、日）
県民小劇場

◆演劇教室30周年記念公演
『見よ、飛行機の高く飛べるを』永井愛／作・森卓也／演出
9月2、3日（土、日）
シーガルホール　（里中）

〔演劇集団和歌山〕

30周年なのだ！

劇団は今年で創立30周年。今、3月5日の記念パーティーの準備に大わらわです。西会議の方からもたくさんの方から出席の返事をいただいており、この場をかりて御礼申し上げます。

さて、記念公演は和歌山出身（現在の那賀郡桃山町）の劇作家阪中正夫（1901～1958）の「馬」を9月に上演します。この作品を「古い」と言う劇団員もいますが、どうしてどうして、帰ってきた不良青年徳次郎を軸に、親子、兄弟の愛憎を描いた傑作です。地元の支援のもと、秋に県内各地の巡演が決まっています。ご期待下さい。

〔演劇集団　あり〕

昨年9月26日米子市文化ホールでの、歌舞伎『篭釣瓶』の脚色『燃えてさうらふ』を、県演劇連盟の応援を得、地域の美容師、衣装を集めている人、着付けの人、殺陣師等々の協力を得、2ステージを行い、異色の作品でしたが、幅広い観客100人を迎えました。

楽しかった。わかりやすかった。綺麗であった。日本的でよかったと言われ…評判もよかったと言えます。このような歌舞伎に近い芝居を、地元のアマチュアが観せてくれ、地域に根をおろそうとしていることがわかったと、60、70代の人からのあたたかい励ましもありました。

次回公演は、5月21日、和田憲明／作『アリゲーターダンス』を田中小百合／演出で行います。物語は、若い在日三世の外国人や、出稼ぎ労働者等を描いた、きびしいなかにも明かりを求める、片隅に生きる青春群像といえます。

山陰は雪国で仕方ありませんが、今年は特に決まったように、稽古日に雪に降られ苦労しています。

季節の春が待ち遠しく、そして、文化国家?日本の春はどうすれば迎えられるのかと…

（宮倉）

〔劇団　あしぶえ〕

今年の山陰は例年にもない雪の多さ。八雲村も雪に埋もれ路面が凍結して、稽古を休みにせざるを得ない日が多い冬でした。

さて、昨年の11月12～14日に開催された「99八雲国際演劇祭」は、行政も住民もあしぶえの劇団員も初めての体験で、大変ながらも、夢のような3日間でした。招待劇団員、審査員、そして遠方からお越しくださった観客のみなさま、ありがとうございました。最終的に、276人の完全無償ボランティアと41軒のホストファミリーが集まり、演劇祭開催直前まで、連日連夜準備を行い、「参加者がひとり残らず楽しめる」演劇祭を目指しました。

形式にとらわれないなごやかな雰囲気の開会式に始まり、すべての参加劇団員・審査員が一般家庭にホームステイ。厳しいルールのなかコンテスト形式で行われた上演。「国際理解教育」をすすめるための小中学校への学校訪問。あたたかい雰囲気のウェルカムパーティーと賑やかながらも、別れを惜しんださよならガラパーティー。感動的な劇評会と表彰式。みんなが知恵を絞り、他には見られない演劇祭をつくりました。

改善する点はいろいろありましたが、大きな事故もなく、成功裡のうちに演劇祭は終了しました。そして感慨に浸る間もなく、2001年11月の「第1回八雲国際演劇祭」に向け、準備が始まりました。

劇団あしぶえでは、間近に

迫った春公演『セロ弾きのゴーシュ』に向け、稽古・準備に余念がありません。89年12月の初公演から、10年と半年の年月を経て、いよいよ100回目の公演を迎えます。見逃した方は、ぜひともおいでください。この公演で、ひとまず打ち止めとする予定です（移動公演は除きます）。これからよい季節を迎える山陰に、観光を兼ねて、観劇にお越しください。

◆『セロ弾きのゴーシュ』

6月11日（日）11時と14時
18日（日）貸切・学校公演
7月8日（土）20時
9日（日）11時と14時
23日（日）11時と14時

◆『ブラボーファーブル先生』

10月22日（日）11時と15時
11月5日（日）11時と15時
19日（日）11時と15時
26日（日）11時と15時

上演日は変更になる場合もあります。詳細については劇団へお問い合わせください。

（小岩崎里瑠）

〔劇団　演劇街〕

前回もお知らせしました通り、昨年11月12～14日に行われた八雲国際演劇祭に『おうこくの木』で参加。新作での参加、50分という上演時間、国際演劇祭に伴う言葉の壁などあり、舞台成果としては反省の多いものとなりました。反面、劇団員個々のなかに大きな収穫もあったと思います。また、実行委員会の演劇祭への取り組みや村民の方々の篤いもてなしに感動しました。他劇団のみなさんとの交流もよき財産となりました。八雲での経験はこれからの劇団活動や個々の生活のなかで生かされていくものと思います。

年明けて2000年、最初の舞台は、山口県の公共ホール・文化行政関係者のアートマネージメント研修のプログラムの一つとして『藪の中』（芥川龍之介／作・柳沢悟／演出）を上演。観劇人数や芝居の性質を考え、徳山市文化会館の大きな舞台の上に客席と舞台を一緒につくり、上演しました。劇団と文化行政の関わり方など考えての取り組みでしたが、一定の成果はあったと思います。

これからの予定は、春の新人募集と秋の『おうこくの木』の再演。また夏ごろに女優陣を生かす新作をやりたいと計画しています。個人的には拙作『ヒロシマのマチエール』のリーディングをしたいなあと考えています。

（広島友好）

〔テアトルハカタ〕

昨年博多座公演を無事好評のうちに終え、ホッとする間もなく、毎年恒例の八女郡広川町の成人式の集いでのダンスショー、2月11日親子貸出し文庫主催によりまして、アンケートベスト5のうちの作品であります、音楽劇『はだかの王様』作／徳満亮一・演出／中村ジョー、ファミリー劇場として無事終了しました。

今後、6月本公演としまして、『キネマの天地』作／井上ひさし、8月児童劇団と一緒に『ブンナよ木からおりてこい』脚色／小松幹生・演出／高田豊三、9月若手公演といたしまして実験劇場2本を予定いたしております。

また音楽劇『長靴をはいた猫』作／石山浩一郎・演出／黒江昭治、音楽劇『はだかの王様』作／徳満亮一・演出／中村ジョーの2作品は、これから小・中学校の巡演作品といたしまして巡演いたします。

（中村）

戯曲

合唱構成劇

五月の陽光（ひざし）

作・構成　楠本 幸男

登場人物

日本国憲法A（主権在民）
日本国憲法B（戦争の放棄）
日本国憲法C（基本的人権の尊重）

勝男
正枝
和子

清川　渡
本山律子

目の見えないギタリスト
少女　光子
　　みのり
　　るり子

父
母
娘（律子）

社長
社員A　（清川　渡）
社員B　（横山）
社員C　（台詞なし）
女子社員A（川上玲子）
女子社員B（台詞なし）

ダークスーツの男A
　　B
　　C

（1）

客席が暗くなると音楽がながれる。
スライド「報告　その1」
男の声が聞こえてくる。

男の声　天皇陛下による終戦のラジオ放送を……正確に言えば、日本が戦争に負けたという天皇陛下の放送を聞いたのは、私が九州の軍隊に配属されていたときでした。復員列車から見る風景は、空襲で残骸となった町と、飢えてやせ衰え、目だけがぎらぎらとした人たちでした。ふるさとにもどった私は、生活のため、戦前にしていた教師になるしかありませんでした。今まで教えてきたことが間違っていたと懺悔し、新しい日本をつくろうと教壇で語る私は、生活のためだといくら自分をごまかしても、どこか白々しい思いがついて離れなかったのです。

スライド「1947年　夏」
明かりがつくと蝉の声。
舞台上手に大きな楠が立っている。下手にはピアノ。
中村勝男と正枝の夫婦が楠の下で休息して

いる。どうやら庭で畑仕事をした後らしい。蝉が鳴いている。

勝男　毎日毎日、ええ天気やなあ。

正枝　ほんまに。

勝男　……シベリヤは、寒いやろなあ。

正枝　え?

勝男　シベリヤや。まだ、何十万人も、残されてる。

正枝　ほんとに、はよ、帰りたいやろになあ。

勝男　……

正枝　……お父さん、このごろよう何考えてんの?

勝男　……

正枝　しょっちゅう、ぼおーっと考え込んでる。

勝男　……お前は毎日、どう思うてる。

正枝　え?

勝男　今、生きてることや。

正枝　生きることは食べること、着物を闇米に変えること。

勝男　……わしはな。時々思うんやが、嘘でもええ。日本は神国や、日本は世界で一番強い国や、日本は必ず戦争に勝つと信じ込んでいた時の方が幸せやったんやないやろうかって。そんなことを思うと、もう、明日からは教壇に立てんような気がする。戦争が終わって二年になるのに、町はまだバラックのままや。配給の食料も事情が悪なるばかり。だれもが闇米に頼らな生きていけんし、世間では不正が横行して、ずるがしこい、厚顔無恥な連中が得をする時代や。いったい、これでよかったのか。

正枝　……私ら女はね。本当に信じてたわけやない。日本が戦争に勝つって。大本営の発表も。……でも、国がどんなことになろうと、わが子は育てていかなあかん。自分は死んでも、子供は生きさせなあかんって。だから、ほんとをいうと、前とあまり変わってないかもしれへん。

勝男　確かにわしらは今、生きていくのに精いっぱいや。今日に夢中で明日のことなんか考えてられん。しかし、それだけで、果たして人間が生きているといえるのか。ただ、その日の餌を求め、その日を生きるだけやったら。あの蝉と同じやないやろか。

正枝　これからや。まだまだこれからつくっていくんよ。あれだけたくさんの爆弾でこわされたもの、そう簡単にはもどらへん。

勝男　爆弾で壊されたんは、家や建物だけやない。日本人の心や、誇りや。

正枝　でも、おなかぺこぺこでも、子供たちはあんなに元気やもん。あの子らがきっと、新しい日本の旗を振りかざしてくれる。私らは今はしっかり子供を育てて、あの子らのあとついていこらよ。

勝男　確かに子供の目は、濁ってない。次から次へと際限なく知識の水を求める。だからわしは、教壇に立つのが恐ろしい。信じるものを持たんと、信じるべき美しいものを心に抱かんと、知識や情報だけを伝えるのが、つらい。

正枝　教育勅語や軍人勅諭が美しいものやったの?天皇陛下のために死ぬことが美しいものやったの?

勝男　(いらだって)そんなことは分かってる!　……それにかわる、何か、心のよりどころや。

蝉の声

和子が帰ってくる。

和子　ただいま。

正枝　お帰り。

和子　おなかすいたわ。何か、食べるもんない?

正枝　晩まで我慢して。

和子　ないんか。(カバンを片づけながら)お父さん、今日、学校で、日本国憲法のこと勉強して来たんよ。お父さんも学校で教えた?

勝男　お父さんは小学校の先生やから、まだや。でも、読んだ。今度から、教師もこの憲法の精神に従って教えていかならんそうや。……和子、お父さんは正直のとこ、戸惑うてるんや。これをどう、生徒に教えようかって。

和子　なら、お父さんも、これ読めばええわ(カバンから「新しい憲法の話」という本を出す)この「新しい憲法の話」っていう本に、憲法のことがわかりやすく書いてあるんよ。

正枝　どんなこと書いてあった?

和子　天皇陛下は、象徴なんやって。

正枝　象徴って?

和子　ええと、まあ……ここに書いてあるけど……読むで。(読む)今ここに何か目に見えるものがあって、他に見えないものの代わりになってあらわすもの。

正枝　?

和子　まあ、日の丸の旗や、学校の旗みたいなものよ。

正枝　天皇陛下、この間、人間宣言されたばっかりやのに、今度はまた、旗におなりになるんかいな。

和子　それと、うちが気に入ってるんは、ここ。戦争の放棄っていうとこよ。(読む)今度の憲法では、日本の国がけっして二度と戦争をしないように、二つのことを決めました。その一つは、兵隊も軍艦も飛行機も、およそ戦争をするためのものは、いっさい持たないということです。これから先日本には、陸軍も海軍も空軍もないのです。これを戦争の放棄と言います。「放棄」とは「すててしまう」ことです。しかしみなさんは、決して心細く思うことはありません。日本は正しいことを、他の国よりさきに行ったのです。世の中に、正しいことぐらい強いものはありません……。

勝男　……もう、二度と戦争はあかん。これから五十年、百年たって日本がもっと豊かな国になっても、戦争は絶対にしたらあかん。

和子　へええ、それって、すごいこと書いてるんと違う?私らが死んで、その子供の時代になっても、そのまた子供の時代になっても、そのまたまた子供の時代になっても、永久に戦争はしないってことやろ。すごいことやん。

勝男　たしかに、大変な決意がこめられてる。

和子　その次の、基本的人権っていうところも読んでみるわね。お母さんもきっと気に入ると思うから。(読む)空襲で焼けたところへ行ってご覧なさい。焼けただれた土から、もう草が青々と生えています。みんな生き生きとしげっています。草でさえも、力強く生きてゆくのです。ましてやみなさんは人間です。生きてゆく力があるはずです。天からさずかったしぜんの力があるのです。この力によって、人間が世の中に生きてゆくことをだれもがさまたげてはなりません。しかし人間は、草木とちがって、ただ生きてゆくというだけでなく、人間らしい生活をしてゆかなければなりません。この人間

らしい生活には、必要なものが二つあります。それは「自由」ということと、「平等」と言うことです……。

正枝　自由、平等、ええ響きやなあ。

和子　そやろ？　自由。自由、自由！……

うちらは、これから自由なんや～！。

勝男　和子。確かに自由はすばらしい。が、しんどいことでもある。人に言われたり、命令されるがままに行動するのは、ある意味では楽や。しかしこれからは何から何まで自分自身の頭で考えて行動せなあかん。そして、失敗の責任も自分がとらなあかん。

和子　何がしんどいんよ。お父さん、人の命令どおりにするより、自分で考えてする方が楽しいに決まってるやん。そんなの苦労でも何でもない。お父さんの頭、まだ戦争時代とかわってないで。

勝男　！

正枝　和子！

和子　うち、遊びに行ってくるわ。

正枝　宿題はすんだんか。

和子　帰ってからやる。

正枝　先にやりなさい！

和子　私は、日本国憲法に基づいて自由に行動するから、干渉せんといて。行って来ます！

勝男　ふふっ。

正枝　やれやれ。これから子供はますますやりにくくなりますね、お父さん。

勝男　わしは、憲法の条文を読んだとき、はっきり言ってまだ信じられんかった。こんなことがこの国に根付くんやろか。国はころりと態度を変えて、あの憲法はもうやめだなどと言い出さんかと。

正枝　今までさんざんだまされ続けてきたからなあ。

勝男　でも、和子はあんなに素直に憲法を受け入れている。案ずる必要はなかった。……素直に、憲法を教えればええ。ありのままに、憲法を、子供たちに教えよう。

正枝　そうよ。もう、国が何と言うたって、子供たちから自由を取りあげることはできやんのやもの。

勝男　うまく説明できんところはうまく説明できんと言い、分からんところは子供たちと一緒に考えていこう。

正枝　子供たちは勝手にどんどん学んでいく。あの子たちは、憲法の子やもの。

勝男　なぜこの憲法ができたのか、どういう失敗をして、何百万の命の犠牲を払ってこの憲法を手に入れたのかを、私たちは情熱を持って伝えよう。

鐘の音が鳴る。

舞台の両袖から合唱団が登場してくる。それと同時に役者たちが消えていく。ピアノの伴奏が始まる。

すてきな自由を

作詞　峯陽　作曲　大西進

一　戦争があった　爆撃がつづいた
焼け野原のあかざを　摘んでは食べていた
※思い出そう　あの日のことを
わすれずに　いつまでも

二　戦争があった　若者が死んだ
若者を愛してた　娘が泣いていた
※くりかえし

三　戦争があった　自由がうばわれた
歌も愛も人生も　息を殺していた
※くりかえし

四　山川もうたえ　鳥たちも歌え
この国の平和を　すてきな自由を
すてきな　自由を

歌が終わると暗転。

（2）

スライド「憲法が施行されて50年がすぎた」
スライド「報告その2」
5月の公園。
前場と同じ楠が上手に立っている。
上手で中学生くらいの少女が一人、ブランコをしている。
下手にベンチがあり、若い男女が座っている。

律子　明日は？

渡　企画会議や。夜遅くなる。

律子　あさっては？

渡　営業の打ち合わせや。あかん。

律子　行ける日ないやん。

渡　すまん。いま、新商品の開発で忙しいんや。

律子　もうええわ。他の人誘っていく。

渡　待ってくれ、明日、できたら何とかするさかい。

律子　約束やで。

渡　できるだけ何とかしてみる。……それはそうと、律子、一度、君のご両親に会いたいんやが……。

律子　それって、正式のプロポーズ？

渡、うなづく。

律子　日曜日も出勤やのに、時間とれるの？

渡　あたりまえや。休むときは、休む。

律子　私……

渡　何？……結婚、考えてなかったんか？

律子　ううん。考えてたけど、結婚にあたって、渡君に条件あるの。

渡　何？

律子　……

渡　何でも聞くよって、言うて。

律子　ほんと？

渡　（うなずく）

律子　私、結婚したら、渡君に、煙草やめてもらいたいの。

渡　なんや、そんなことか。

律子　簡単なことやろ、やめてくれる？

渡　しかし、まあ、煙草はそう簡単にやめられるもんとちがうで。

律子　私、煙草の煙辛抱できやんの。それに、赤ちゃんのためにも悪いでしょ。だから、絶対にやめて欲しいの。

渡　しかし、それは……

律子　愛する私のただ一つの願い、聞いてくれへんの？

渡　努力はしてみる。

律子　努力やったらあかんの。絶対やめてほしい。いい？

渡　ま、やってみる。しかし、完全にやめられるまで、しばらくはええやろ。

律子　その時は換気扇の下で吸って。いい？

渡　あ、ああ。

律子　ああ、良かった、私の願い、聞いてくれて。私、渡君に煙草は絶対やめられんって言われたら、どうしようって心配で……

渡　……楽しみやなあ。僕らに、どんな子供、生まれてくるんやろ。

律子　私、かわいがるわ。

渡　頼むわ。賢くて、素直な子に、育ててくれよ。

律子　なに他人事みたいに言うてんの。子育ては夫婦でするもんやない。

渡　しかし、僕は仕事もあるから。
律子　私も仕事続けんのよ。
渡　結婚したらやめるんと違うんか。
律子　何言うてんの。会社の男どもにさんざんこき使われながら今まで続けてきたんやもん。絶対やめられへん。そりゃ、社長は結婚したらもうやめてほしいみたいなことほのめかすし、私らよりもっと若くて、安い給料で使える女の子を入れたい気持ちが見え見えやわ。でも、私はやめへん。もっともっと勉強してだれにも負けやんような仕事をしていく。
渡　強いな、君は。
律子　家事も分担するんよ。
渡　しかし、僕は料理もできんし……
律子　なら、後かたづけと掃除やって。
渡　ああ、もうやめよ。こんな話してたら夢なくなるわ。
律子　夢がふくらむやないの。育児も、家事も二人で分担して、理想の家庭を作っていくのよ。
渡　小遣いは、月五万もらうで。
律子　あんた、何考えてんの?二万よ。二万円。
渡　（驚いて）ええ?
律子　渡君、そんなことでよく、私に専業主婦になれなんて言えるわ。
渡　しかし、つきあいが……
律子　お金貯めて、早く家も建てやんとあかんのよ。
渡　そうやな。自分らの家を持ちたい。白い家がええな。それと、庭も絶対欲しいな。
律子　うん。白い、庭付きの家。
渡　やっと意見があった。
律子　ふふっ。（時計を見て）あっ、もうこんな時間。
渡　家まで送っていくわ。
律子　……（カバンを差し出して）バッグ、もって。
渡　はい!（受け取る）
律子　あんまりとばさんといて。この間は車酔いしたわ。
渡　うん。赤信号でちゃんと止まるって。
二人、上手に去っていく。
楠の影から三人の憲法の分身が顔を出す。やがて、三人、姿を現す。三人とも、派手な衣装をまとっている。
憲法A（主権在民）　見た?
憲法B（戦争の放棄）　見た見た。
憲法C（基本的人権の尊重）　あれこそ、男女平等、憲法の精神が完全に実現されているわ。
憲法A　男女平等というよりも、男女逆転ではないかな。
憲法C　これまで、差別され、男の言うがままになっていた女が、対等に口をきいてるじゃない。最高!これぞ、新しい、民主主義の国の男女像だわ。
憲法B　あの二人、もう、接吻ぐらいはしただろうかね。
憲法A　いや、まだそこまでは……
憲法B　昔と違って最近の男女はすすむのが早いと聞いたぞ。
憲法A　でも、せめて結婚式をしてからでないと、接吻までは。
憲法C　そんなこと、今回の旅の目的と関係ないでしょ。
憲法AB　……
憲法B　しかし、うわべだけではまだ判断できないぞ。外見は立派な、おいしそうなリンゴでも、中が腐っていることもよくあることだ。

憲法A　国民に、インタビューする必要があるな。
憲法C　女の子がいるわ。聞いてみましょう。
三人、女の子に近づく。
憲法C　ちょっと、お嬢ちゃん。
光子　……
憲法C　聞きたいことあるんだけど、教えてくれる。
光子　おばさん、だあれ。
憲法C　……
光子　名前よ。だれでも名前があるでしょ。
憲法C　怪しい者じゃないのよ。わたしは、そうね、ええと、ケンポ、ケンポ……
憲法A　わたしは、ケン、って読んでくれたらいい。（憲法Bをさして）この人は、ええ、のりお、そして、（憲法Cをさして）これがあ、あの、ノリ、ノリピー、
憲法B　三人そろって、まあ、ケンポーズってとこだ、ははは……
光子　私の名前は光子。光の子って書くの。
憲法A　じゃあ、みっちゃん。おじさんたちは、日本国憲法が、どれだけ国民に根付いているか調査してるんだ。でも、さりげなく、国民の実態を知りたいので、三人ともこんな、地味な服装をしてるって訳だ。日本国憲法って、知ってるだろ。
光子　知らない。
憲法C　学校で習ってるはずなんだけど。
光子　学校行ってないもん。
憲法C　おうちが、貧しくて行けないの?
光子　おばさん何いってんの。義務教育はただじゃない。
憲法B　そうか、それは知ってんだ。じゃあ、教育を受ける権利も知ってるね。みんな、憲法に書いてあることなんだよ。
光子　学校なんか、面白くないもん。
憲法A　……いじめっ子がいるのかい。
光子　……
憲法B　（拳を握って）いじめる奴は、こうして、ぶったおしちゃえ!
憲法CがBをにらむ。B、気まずそうにしている。
憲法C　お母さんや、先生に相談してみた?
光子　……私、ちょっと、他の人と変わってるの。だから、みんな、私を見ると、いじめたくなるみたい。だから、相談してもどうしようもないの。
憲法A　変わってなんかいないじゃないか、普通の女の子だ。
憲法C　どこが変わってるの?
光子　……どことなく。
憲法C　変わってて当たり前じゃない。一人一人違うんだから。
伴奏が入る。
三人が踊りながら歌う。
舞台に手話通訳者があがり、手話で歌詞を通訳する。
スライドで歌詞を映し出す。

「私と小鳥と鈴と」
詩　金子みすず　曲　森川隆之

私が両手を広げても
お空はちいとも飛べないが
飛べる小鳥は私のように
地べたを早くは走れない
私が体をゆすっても
きれいな音は出ないけど

あの鳴る鈴は私のように
たくさんな歌は知らないよ
鈴と小鳥とそれから私
みんなちがってみんないい

光子　私、帰る！

少女、走って去っていく。

憲法A　私たちのやり方が悪かったのかな。

憲法B　励まそうと思って、慣れない踊りまで踊ったのに。

憲法C　（Bに）あなたが、いじめっ子はぶったおしちゃえなんて言うからよ。だいたいあなた、自分の立場を理解しているの？

憲法B　だから、あれは、言葉の綾で……

憲法C　言葉の綾で済む問題じゃないでしょう。私たちは憲法そのものなのよ、憲法の三つの柱、私は基本的人権の尊重。

憲法A　私は、主権在民。

憲法C　（Bに）あなたは？　言ってごらんなさい。

憲法B　戦争の、放棄……

憲法C　戦争の放棄の分身であるあなたが、暴力を容認することは、私は、断じて許すことはできません！

憲法A　しかし、まあ、基本的には、理解しているのだし、たまに、まあ、ちょっとした間違いをしたところで、そう、目くじらをたてる必要はないと思うが。あなたは、女だけに、ちょっと言うことが、くどすぎる！

憲法C　私が、女だけに、女ゆえに、女であるからゆえに、く、ど、い、で、す、と！（怒り狂う）

憲法B　許して下さい。さっきの発言は、取り消します。……そうだ。私たちも自分たち自身憲法でありながら、憲法のなんたるかを忘れかけているのではないだろか。

憲法A　もう、五十年にもなりますからな。

憲法B　昔はスリムな体だったが、近頃はずいぶんと腹が出てきた。（Aに）あなたも、ずいぶんと太ったね。

憲法A　まだ君ほどじゃない。そうだ、もう一度、我々自身の憲法を確認してみようじゃないか。

憲法C　男女平等の条項も、確認する必要がありますわ。

三人、客席に向かって朗読する。

スライド「日本国憲法前文」

憲法たち　日本国民は、正当に選挙された国会における代表者を通じて行動し、我らと我らの子孫のために、諸国民との協和の成果と、我が国全土にわたって自由のもたらす恵沢を確保し、政府の行為によって再び戦争の惨禍が起こることのないようにすることを決意し、ここに主権が国民に存することを宣言し、この憲法を確定する。

ファンファーレが鳴る。

憲法B　何か、こう、エネルギーがみなぎってきましたね。

憲法C　まるで、森の中で、新鮮な、緑の空気を吸ったような気分。

憲法A　わたしは、五十年前にもどって、生まれ変わったような気分だ。

憲法C　エネルギーの補給が済んだところで、さて、調査を続けましょ。

A、Bうなずく。

三人、楠の陰に行く。

暗転。

（3）

スライド「報告　その3」

現代の日本のある家庭。

憲法たちが楠のかげで成り行きを見守っている。

父　そんな話は聞いてなかった。

娘　だから、今日、話したんやない。

父　……だいたい、車を買うのに、色も値段も、型も、売り主が決めて、はい、これで買いなさいっていう売り主がいるか。お客さんの立場に立って、ナビゲーターはつけるか、カーステは純正でいくか、ホイールはどうするか、値段は何パーセントひきましょう、あらかじめ、何度も話し合いして、先方さんが納得してから売るんが筋や。

娘　お父さんの車買うんとちがうやん、私の結婚相手決めるんやん。私が決めたらええんとちがうん。

父　あほなこというな！　お前を大学卒業さすのに、何百万かかってるとおもてるんや。

娘　人身売買と違うやろ。お父ちゃん古いわ。

父　……スキー、だれと行ったんや。お父ちゃんは、女友達と行ったって、お母さんから聞いた。

娘　だから、それは嘘ついて悪かったって……

母　お父さん、でも律子は……

父　（妻に）お前はだまってい！（娘に）既成事実先につくって、それで認めよら、詐欺やないか。

娘　詐欺やなんて……ひどいわ。……お父さん。一体あの人のどこが悪いん？　まじめに働いて、私や、子供を大事にしてくれるような人には見えへんの？　あの人、何か、悪いことするような人に見える？

父　そんな問題とちがう。

娘　なら、どんな問題よ。

父　……物事には、釣り合いちゅうもんがある。

娘　お父さん、学歴のこと言うてんの？

母　それでも……

父　お前は口をはさむな！

娘　あの人は大学出てないけど、大卒の人以上に仕事できるし、上司からも一番期待されてんのよ。

父　たかが二流の会社やないか。

娘　私も二流や。ちょうどつりおうてるやない。

父　女は結婚したら家のことしたらええ。しかし、男は……あんな小さい会社、つぶれたらどうするんや。

娘　私も働く。二人で力あわしていくから、それでええやろ。

父　女は家庭を守ったらええんや。

娘　うちのお母さんも働いてるやない、お父さん、言うこと矛盾してるわ。

父　だから、もうちょっと結婚は待てと言うてんのや。

娘　お父さん、言うて。収入や学歴の他に、一体あの人のどこが気にくわんの？

父　……あんな、なよなよした男、性にあわん。

娘　そんならお父さん、筋肉もりもりの人やったらええの？

父　……

娘　私と結婚するんやから、そんなこと関係ないやろ。

母　おとうさん、私は……

父　お前はだまっとれ！

娘　……もうええわ。もうどうでもええわ。

娘、泣いている。

母　……そら、お前がええと思うた人と結婚するんが一番や。そやけど、お父さんも、お前が、ずっと幸せになれるように、いろいろ考えた上で言うてくれてるんやで。

娘　何で分かってくれへんの……おかあさん、もうええわ。うち、もうつかれたわ。

（泣いている）

舞台の役者の動きが止まり、照明がやや暗くなる。

憲法C　大変！　憲法の危機だわ。

憲法B　もう少し様子を見ないかね。私は、国民が自分で解決するのを待った方がいいと思うがね。

憲法C　何をのんきなことを言ってるんですか。ここであの子があきらめたら、一生後悔するのよ。

憲法C、大きく息を吸い、風を舞台に向かって送り出す。

ピューという風の効果音。

スクリーンにスライドが映る。

スライド「憲法第24条　家族生活における個人の尊厳と両性の平等」

「婚姻は、両性の合意のみに基づいて成立し、夫婦が同等の権利を有することを基本として、相互の協力により、維持されなければならない」

舞台が明るくなる。

娘　（涙をぬぐって）もう分かったわ……。

父　何が分かったんや。

娘　お父さんにいくら言うてもだめ。お父さんがこうと思うたら絶対認めてくれへん。昔からよう分かってます。もう結構です。……私、この家を出て行きます！

父　ああ、出て行け出て行け、親のいうこともきけん奴は、今すぐ、この家から出て行け！

母　そんなこといわんと、もうちょっと話し合いしたら……

父　聞く耳もたん！……わしも、何も、無茶は言うてない。お前もまだ二十四や。この世に男は星の数ほどある。もうちょっと、ええ条件の男を捜してからでもええやないか、言うてるんや。

娘　私はあの人が世界中で一番いいと思ってるんです！

父　いつお前は世界中の男を調べた！

娘　……（改まって）お父さん、お母さん、長い間お世話になりました。私は、あの人と結婚して、二人で力あわして生きていきます。

父　結婚式には出んぞ。

娘　はい。

父　びた一文ださんぞ。

娘　そのつもりです。

父　もう、お前は娘とは思わん。

娘　お母さん、いまから荷物まとめます。タンスとベッドは適当に処分して下さい。ドレッサーとアルバム類は悪いけど、後で住所知らせるから送ってくれますか。

母　お父さん、この子も、ここまで言うて

るんやし、渡さんと結婚しても、幸せに生きていかよう。ここはもう、私らが折れて、結婚さしちゃらんかえ。

父　おまえまで、な、何を言う！

母　考えたら、渡さんも、礼儀正しい、ええ人やないか。この子がここまでいうんやからまだまだもっと私らの知らんええとこあるんやろかえ。

父　お、お前、ついに悪魔に魂奪われたか！

間

母　ええ？……何ですやとう？……悪魔に魂奪われたやとう？……

父　……

母　（冷たく）お父さん、長い間お世話になりました。私も、これで、あんたとは縁切らしてもらいます。

父　（あせって）それとこれとは話が違うやないか。

母　いいえ。前から思うてたんです。ちょうどええ機会ですわ。律子、お母さんもこれからはアパート借りて、貧乏でも、好きなように生きていきますから、お前も、渡さんと二人力あわして幸せにやりなはれ。

父　お、おまえ……

母　ふん、悪魔に魂奪われてるやと、よういうわ。悪魔はあんたや。何でも、俺が決める、俺が決めるって、威張って。あんたが私の意見を聞いてくれたこと、今までに一度でもありますか。昼間は昼間で事務員兼掃除のおばさんでこき使い、帰ったら、帰ったで、やい、新聞もってこい、お茶もってこい、おまけに、家が片づいてないやの、飯がまずいやの、文句ばっかり。あのけちくさい会社が倒産しかかったとき、銀行やら友達やら頭下げてお金の工面したのはだれやと思うてんの。この三十年間、趣味の一つにも精出すわけでもなし、毎日毎日面倒くさい帳簿つけたり、確定申告したり、一体あんたは私が好きでやってると思ってたんですか。

父　お前、本心で言うてるんか。

母　よろしいです、さいなら。私はあんたの奴隷と違います、一人の女です！

娘　お母さん……

母　律子、お互い、がんばろな。

母と娘、手と手を取り合う。

父　何という結末や……。

暗転。

楠が明るくなり、憲法たちが登場する。

憲法A　やりすぎたな。

憲法B　思いっきり吹かなくとも、ふっと吹かせるくらいでよかったんだよ。

憲法C　（しょげて）ほっといても、もう少し話し合えば何とかなったかも知れないわね。……（しょげている）

憲法A　たまには失敗もある。さ、元気を出して。そうだ、また、エネルギーを補給しておこう。

憲法B　うん。我々も、もう若くはないのだからね。無理は禁物だ。

憲法C　でも、私たち、五十才にしては、若いと思わない？

憲法A　しかし、時々健康のチェックを受け、リフレッシュする必要はある。では。

三人、朗読する。

スライド「憲法第九条」

憲法たち　日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、（以下はメロディーにして歌う）永久にこれを放棄する。

憲法Ａ　元気出た？

憲法ＢＣ　バリバリよ！

暗転

（4）

スライド「報告　その4」

下手にベンチが置かれてあり、目の見えないギタリストがギターをつま弾きながら「私と小鳥と鈴と」を歌っている。そばでは光子がそれを聞いている。ギタリスト、歌い終わる。

小鳥のさえずる声。

光子　ギター、上手ね。楽譜、読めるの？

ギタリスト　耳で覚えるんだ。

光子　私、不器用だから、そんなことできない。

ギタリスト　君ならもっとうまくできるさ。楽譜も、ギターも、見ることができるんだから。

光子　あなたの目、生まれたときから見えないの？

ギタリスト　十四才の時、病気でね。

光子　悲しくない？

ギタリスト　そりゃ、悲しいときだってあるさ。でも、楽しいときもある。君だってそうだろ。

光子　私は……あんまり楽しいことはない。

ギタリスト　両親が、うまくいってないのかい。

光子　知ってるの？

ギタリスト　あてずっぽうさ。

光子　……それに、私、可愛くないし、人に好かれるタイプじゃないの。……強くなりたい！……私、もっともっと強くなりたい！

間

少女の目に涙が潤んでくる。ギタリスト、ハンカチを出す。

光子　（立ち上がって）どうして分かるの？

ギタリスト　……

光子　本当は、目が見えるんじゃないの？

ギタリスト　君も、目をつむってごらん。

光子、目をつむる。

ギタリスト　……かすかに風が吹いているのが分かるだろ。それに、緑の匂いもする。

間

光子、うなずく

ギタリスト　目が見えないと、他の感覚が鋭くなっていくんだ。音や、まわりの雰囲気とかが、見える人以上に鋭く感じるようになる。

光子　（目を開けて）人の心も、感じる？

ギタリスト　目を開けないで……

光子、再び目を閉じる。

ギタリスト　……あまりよく感じるので、いやになるくらいだ。

光子　……小鳥が、歌っているわ。

ギタリスト　……いま、遠くで電車が走ってるだろ。

光子　……聞こえる。

ギタリスト　想像してみるんだ。どんな人が乗ってるんだろね。家族連れでハイキングでも行くのかな。それとも遊園地かな。

光子　予備校に行く受験生もいるかもね。

ギタリスト　恋人同士も乗ってるよ。長い髪の女の子が、こう、男の子の方に寄り添って、髪をなでてもらってる。

光子　見えるわ！　女の子が、電車の中を走り回ってお母さんに叱られてる！

ギタリスト　おじいさんが、こっくりこっくり居眠りをしてる。

光子　小さい子がだだをこねて泣いてる！

ギタリスト　……君って、面白い子だね。

光子　よく言われるの、変わってるって。……それに私、人とつきあうのが下手なの。

ギタリスト　……僕は、こうして君と話をしているとき、どきどきしてるんだ。

光子　……

ギタリスト　人と話すときは、ああ、この人は僕のことをどう思ってるんだろう、何か気にさわったんじゃないだろうか、僕がへんなことを言ったんじゃないだろうかってしょっちゅう想像してしまうんだ。……。時々、いやになるよ。

光子　わたし、あなたが、わりといい線いってる男だと思う。

ギタリスト　……（苦笑）

光子　私、小学生よ。それでも、どきどきしてる？

ギタリスト　今でも、少し。

光子　もし私が、あなたと同じくらいの年齢の……似合いのカップルみたいな女の子だったら……

ギタリスト　（深刻になって）とても、話などできそうにない。

光子　ふふっ。

ギタリスト　想像するってことは、いやになってくることもある。でも、いいことばかり想像すると、しだいに愉快になってきて、周りの人たちまで愉快な気分になってくるから、不思議だ。

光子　……

みのりがやってくる。

ギタリスト　だれか、来たのかい。

光子、みのりを見つけてギタリストの反対側に回る。

ギタリスト　どうしたの？

光子　……会いたくないの。

ギタリスト　君の、敵かい。

光子　味方なの。

ギタリスト　なら会えばいいじゃないか。なんていう子？

光子　みのり。

ギタリスト　どうして話しかけないの？

光子　どきどきするの。

ギタリスト　なら、歌えばいい。

ギタリスト、ギターを鳴らす。

みのり　光子ちゃん……。元気？

光子、話そうとするが、できない。

光子　さよなら。

走り去っていく。

(5)

スライド「報告　その5」

アパレル関係のある小さい会社。

社員が忙しそうに働いている。社員の動きは、単調な繰り返しで、いくぶん戯画化したものであってよい。女子社員は男子社員にお茶を出したり電話の応対をしている。

社長はちょっと離れたところに座り、書類に手を入れている。

社員A、さっきから何度も時計を見ながらそわそわしている。

社員A　（ついに決心して社長の近くへ行く）あのう、勤務時間も終了したことですし、そろそろ失礼してよろしいでしょうか。

社長　失礼って、どこへ行くの。

社員A　家の方へ、帰りたいと……。

社長　家で、何すんの？

社員A　いろいろと、プライベートな予定がございまして。

社長　みんな一生懸命仕事してるのに、君一人だけ、帰るって言うの？

社員A　ええ、まあ……

社員たち、仕事をしているふりをしながらも、成り行きを見守っている。

社長　（冷たく）ああ、いいよ、君、今すぐ帰りなさい。

社員A　……

社長　どうしたの？　プライベートが、忙しいんだろ。だったら、今すぐ帰りなさい。（素っ気なく）さあ、さあ、早く。

社員　……

社長　私はねえ、帰りたいと言うのならすんなり帰したげるよ。でも、君の言いぐさが気にくわないんだよ。勤務時間も終了したことですしだと？　君は勤務時間が終われば、後は自分の自由だとでも思ってるのかね。そういう個人主義は、私は好かないね。うーん、好きくない！

社員A　……

社長　帰りなさい。さあ、帰った、帰った。

社員A　……すみません。自分が、未熟でした。

社長　でも、プライベートが、忙しいんだろ。

社員A　いえ、よく考えれば、何とか都合がつけられることが分かりました。仕事にもどります。

社長　（素っ気なく）あっ、そう。

社員A、仕事にもどる。社長も新聞を読み始める。

社長　あ、川上くん、お茶、おかわり。

女子社員A　はい。（社長にお茶を入れる）

楠の影で見守っていた憲法たちに明かりがつき、三人で大きく息を吸って風を吹かせる。風の効果音。すると、社員Aがまた社長の所へ行く。

社員A　あのう、今日は残業する代わりに、明日、有給休暇をいただくことにしましたので、よろしくお願いします。

社長　身内に、不幸ごとがあったの？

社員A　いいえ。実は、今日、仕事終わってから女の子と芝居を見に行く約束をしていたんですが、明日の昼の公演もありますし、明日はちょうど彼女も休みだし、ゆっくり芝居を見られると思いまして。

社長　……君、今日は、どうかしてるんじゃないかね。明日は月末だよ。ひと月後

には新商品の発表が迫っているんだよ。

社員A　でも、芝居の公演は明日で終わりなんです。

社長　芝居ね、結構。たまにはリフレッシュも必要だ。でも私はね、君の言い方にひっかかるんだ。明日、有給休暇をいただくことにしました、だと？　一体そんなこと、だれが決めたの。先輩たちは休む時、なんて言ってる？　休みをいただいてよろしいですか、って言うのが礼儀じゃないか。

社員A　でも、我々の権利ですから。

社長　権利？　ますます気にくわないね。好きくない！　全体、そんな言葉教えたのだれ？　言ってみなさい。

社員Bが立ち上がる。

社員B　私です。……でも、それくらいの単語は、小学生でも知ってることです。

社長　それなら権利には義務もつきまとうことをどうして教えてやらないんだ。それと、休みは仕事があいたときに取ることもだ！

社員A　この前の日曜日にも出勤しました。先々週もです。僕が入社したときからずっと3ヵ月ごとに新商品の発表です。仕事のあいている時なんかないじゃないですか。僕だって、人生を楽しむ権利があるはずです。

社長　君は、この仕事、向いてないようだね。……このアパレル業界はわりと若者に人気のある業種なんだ。それにこの不況だしね。

憲法たち、ますます声援の風を送る。

社員A　それ、脅しですか。

社長　人聞きの悪い言葉は使うな。私は事実を言ってるだけだ。

社員B　（立ち上がって）清川君は入社してまだ二年だけど、これまで休んだのは、叔父さんのお葬式で一日、風邪で三日だけです。僕だってこの五年間に休んだのは免許の書き換えと、親父が入院した時、それと、風邪で四、五日休んだだけです。僕らだって、健康で文化的な生活を送る権利があるはずです。

社長　君たちは、そんなに仕事がいやなのかね。

社員B　好きです。自分に向いていると思います。だからこそ、みんな残業もつけずに、毎日遅くまで働いてるんじゃないですか。みんなこの会社で長いこと働きたいんです。ですから、有給を自由にとるくらい認めてくれてもいいじゃないですか。

社長　（開き直って）私は残業を強制した覚えはないがね。日曜出勤もだ。君たちが自主的にやっていると思っていたが、今まで、思い違いをしていたようだ。

社員AB　……

社長　分かった。私のやり方に不満を持っている人は、手を挙げなさい。

社員たち、手を挙げようかと戸惑っている。憲法たち、風を送る。すると、全員が手を挙げる。

社長、とまどう。

社長　川上君、水！

女子社員A　水だの、お茶だの、コピーだの、ファクスだの、私、そういう仕事のためにこの会社に入ったんではありません。わたしにも、山本さんや、横山さん

のやってるような仕事をさせて下さい。

社長　……

女子社員A　それと、仕事中にあまりエッチなことを話しかけないで下さい。

社長　私は、職場が和んで、みんなが楽しく仕事ができるようにと……

女子社員A　社長にはストレス解消になっているかもしれませんが、私にはストレスがたまるばかりです。

社長　分かった！　お前ら全員首だ。明日から会社へ来なくてよろしい！

社員B　従業員を物みたいに勝手に首を切ったり、すげ替えたり、そんな権利はあなたにはないはずだ！

社長　生意気言うな。今日は残業できない、明日休ませて欲しいって言えば私は休ませてやるよ。しかしね、権利やら法律を盾に、休むのが当然だっていう顔をしてるような、そういう思想が私は一番嫌いなんだ。

社員A　あなたには、憲法や労働基準法を守る義務があるはずです。

社長　うるさい！　憲法だの、労働基準法だの、そういう危険思想の持ち主は、今すぐここから出て行け！

社員たち、静かに出て行く。社長はそれに気がついていない。

社長　お前たちも、昨日や今日入社した訳じゃないんだから、この業界がどれくらい厳しいかくらいは分かるだろう。安い輸入品はどんどん入ってくる、同業者はどんどん値を下げてくる、それでも生き残るためには消費者のニーズにあった、価値の高いものを、次々と打ち出していかねばならんのだ。昔なら一回ヒットがあったら数年は生き延びられた。今は、3ヵ月ごとにヒットを出さねばだめなんだ。すか食らえば、こんな小さな会社、明日にでもぺしゃんこだ。私だって、毎日いろいろ悩んでるんだよ。そりゃ憲法も労働基準法も大切だ。そんなことはだれでも分かる。だがな、会社がつぶれれば何もかもご破算だろうが。ああ、湿っぽい話になった。こんな話はやめて、みんなでパーッと行こうじゃないか。川上君、川上君、どこへ行ったんだ、また横山君のカラオケで、チーク踊ろうじゃないか。川上君……川上君……おい、みんな……隠れてないで、出て来なさい……

（机の下など社員を探し回る）

楠の陰から憲法たちが出てきて、もう一度力一杯息を吹く。

ピューという効果音。それとともに社長が吹き飛ばされ、入れ替わりに合唱団が「思想の自由」「良心の自由」「信教の自由」など、憲法に盛り込まれた自由や権利の条項を書いたプラカードをもって登場する（飾りつけはそれぞれ創意あるものがよい）。

歌が始まるとスクリーンにも、自由や権利の項目が次々と映し出される。

スライド

「学問の自由」
「思想の自由」
「信教の自由」
「良心の自由」
「奴隷的拘束からの自由」
「苦役からの自由」
「表現の自由」
「集会・結社の自由」
「職業選択の自由」
「外国移住の自由」
「国籍離脱の自由」
「教育を受ける権利」

「労働の権利」
「裁判を受ける権利」

合唱団員がそれぞれの振り付けで体を動かしながら歌う。憲法たちも一緒に体を動かし、踊る。

何人か専門のダンスグループが演技をしても良い。

Human Rights

詩　笠木　透　曲　岩田美樹

（一部削除）

Human Rights　人間の権利
かけがえのない　ひとりよ輝け
Human Rights　人間の権利
たったひとつの　生命よ燃えろ

憲法があるから
人権があるのではありません
人権があるから
憲法があるのです

Human Rights　人間の権利
かけがえのない　ひとりよ輝け
Human Rights　人間の権利
たったひとつの　生命よ燃えろ

憲法があるから
人権があるのではありません
人権があるから
憲法があるのです

Human Rights　人間の権利
かけがえのない　ひとりよ輝け
Human Rights　人間の権利
たったひとつの　生命よ燃えろ

憲法があるから
人権があるのではありません
人権があるから
憲法があるのです

Human Rights　人間の権利
かけがえのない　ひとりよ輝け
Human Rights　人間の権利
たったひとつの　生命よ燃えろ

憲法があるから
人権があるのではありません
人権があるから
憲法があるのです

Human Rights　人間の権利
かけがえのない　ひとりよ輝け
Human Rights　人間の権利
たったひとつの　生命よ燃えろ

歌い終わると合唱団員たちは退場
光子がやってくる。

憲法A　やあ、いつかの、お嬢ちゃん。

光子　おじさんたち、まだいたの。

憲法B　ああ、まだ、調査が終わらないんでね。

光子　あのう、聞きたいことがあるんだけど。

憲法C　なあに。

光子　おばさんはまえに、みんなちがっていいって歌を歌ってくれたけど、人には教育を受ける権利もあるとも言ったわ。私は、学校に行けないの。どうすればいいの？

憲法C　それはね、あなたが教育を受ける権利を保障するように、大人たちが、一番あなたに合った方法を考えなきゃいけないっていうことなの。別にあわてなくってもいいのよ。一年たっても二年たっても、一番あなたにあった方法を見つけだそうね。

憲法A　一番いい方法、見つかるよ。

憲法C　一年たっても、二年たっても。

憲法B　一番時間をかけて見つけた方法が、きっと一番いい方法だ。……

光子、少し微笑む。

ダークスーツの男たちがやってくる。頭にヘルメットをかぶり、後ろにこん棒を隠し持っている。

ダークスーツの男A　君たち、大変な騒ぎを起こしてくれたね。

憲法A　ちょっと風を吹かしすぎまして。

憲法B　反省しております。

ダークスーツの男B　（書類を見せて）君たちの報告書、読ませてもらったよ。ところで、君たちの今回の目的は何かね。

憲法B　はい。憲法がどれだけ国民に根付いているか、調査を。

ダークスーツの男A　だれが国民の私生活に干渉せよといったかね。いいか。いくら立派な法律ができたところでそれだけで国民の生活が変わる訳じゃないんだ。よそからいくら応援してもだめだ。憲法は、国民自身が自分たちのものにしていくべきものなんだよ。こんなことを言うのも、実は、憲法なんてこじつければどのようにでも解釈できるものだからなんだ。

憲法B　おっしゃるとおりで。ただ、現実を見ていますといかにも……

ダークスーツの男A　いいわけはもうよろしい！

憲法B　……

ダークスーツの男A　君は、「戦争の放棄」だったね。

憲法B　はあ……

ダークスーツの男A　君はもう首だ。明日からは来なくてよろしい。

憲法B　それはどういう意味でございましょう。

ダークスーツの男A　鈍いね。リストラだよ。憲法の柱は三つも必要ない。君は主権在民だったね。ま、これは首にするわけにはいかない。君は基本的人権の尊重、君はまだ当分働いてもらうことにしよう。だから、戦争の放棄、君だけ首だ。

憲法C　さっきははしゃぎすぎたかも知れません。でも、突然首だなんて、これは重大なる人権問題です！

ダークスーツの男B　君たちは人間じゃないんだろ。人権はないんだよ！

憲法B　私たちの行動については今、反省していると言ったじゃないですか。私の存在そのものに、他に悪いとこがあるんですか。おっしゃって下さい。

ダークスーツの男A　ますます鈍いね、その鈍さこそが君の最大の欠点だ。君はまだ気がついていないのかね。たしかに君はこの五十年間よくやった。だが、もう今は時代遅れなんだよ。

憲法B　時代遅れなんて、そ、そんな……

憲法A　そうですよ、そんなの、理由になっていないじゃないですか。

憲法B　私だって、いろいろと世間で言われていることは知っていますよ。でも、私がいたからこそ日本はこの五十年間戦争をせずにすんだんじゃないんですか。少なくともこの五十年、日本の兵士によって殺されたって外国人は一人もいない。それは私の存在があったからじゃないんですか。

ダークスーツの男B　だから君の功績は認めているじゃないか。それは立派だ。が、君の役目は終わった。これからは日本も国際社会の仲間入りだ。われわれはこれから、日本だけでなく、世界の平和に貢献しなければならないんだよ。

光子　あのう、私、時代遅れの人もあってもいいと思います。

ダークスーツの男B　お嬢ちゃん、これは

洋服の話じゃないの。難しい話なんだからね。口を出さないでちょうだい。（憲法Bに）さ、君は今すぐ「歴史」のなかに帰るんだ。

ダークスーツの男BC、憲法Bの両脇を抱えて連れ去ろうとする。

憲法C　待ちなさい！　勝手な真似は許しません！

憲法A　わ、私だって、ゆ、許さない！

ダークスーツの男A　ほおう、やるのかね。

ダークスーツの男A、後ろに隠したこん棒をちらりと見せる。憲法AB、ひるむ。

ダークスーツの男A　……私は何も戦争や暴力を肯定しているわけじゃない。何事も平和のためさ。世界の平和のためには、戦争の放棄など古くさいことをいつまでも言わずに、いろいろとまあ、あれを、ナニしていかねばならんのだ。

男たち、憲法Bを連れ去っていく。憲法AC愕然として座り込む。

憲法A　私は、つくづく力のないのが悔しい。

憲法C　憲法って、こんなに簡単に変えられていいのかしら。

憲法A　実のところは我々は力も何もないんだ。国民の多数の意見次第さ。

みのりとるり子がやってくる。

みのり　光子ちゃん。さっきは何よ、私を見て逃げ出すなんて。

るり子　あした、みのりの誕生パーティするの。来ない？

光子　……

みのり　光子ちゃん、どうしたの。

光子　あ、あ、あ、あの……大変。

るり子　何が大変なの？

光子　時代遅れの人が、連れていかれたの！

みのり・るり子　ええっ！

暗転

（6）

憲法Bが光の中に閉じこめられている。憲法Bは膝を抱えてうずくまっている。

少女たちがやってきて、光の外から呼びかける。

光子　おじさん、憲法のおじさん。

みのり　戦争放棄のおじさん。

憲法B　（気がついて）さっきの女の子かね。

るり子　おじさん、元気出して。早く私たちの国にもどってきて。

憲法B　うれしいね。私もここから出てまだまだ仕事をしたいんだが、これは国民の総意で決まることだから。

光子　私も、るり子も、みのりも、みんな、あなたに日本にいて欲しいと思ってるわ。私、もっともっとたくさんの友達に呼びかけてみる。だから、もどってきて。

憲法B　ああ、ありがとう。

ダークスーツの男の声が聞こえる。

ダークスーツの男（以下すべて声のみ）そこで何をしているのだね。

みのり　この人を連れていった人ね。

光子　この人を、ここからすぐ出してあげて。

ダークスーツの男　さっきの小学生だね。この人はもう十分日本のために働いたんだ。だから歴史の中にもどってもらった。この人は別に牢屋の中に入れられているわけじゃないんだ。ちゃんと歴史に残っているんだから、かわいそうに思う必要はないんだよ。

光子　私、戦争は嫌いなの。だから、この人に、歴史の中じゃなくて、現実の中にもどってきて欲しいの。

ダークスーツの男　君たちの名前は？

光子　光子

みのり　私はみのり。

るり子　私はるり子。

ダークスーツの男A　君たちはいい子だ。それに立派な考え方を持っている。でもね、これは国の政治に関わることなんだ。

みのり　国の政治のことを小学生が考えちゃだめなんですか。

ダークスーツの男A　そんなことはないよ。……たとえば、君たちの学校には、いじめっ子がいないかい？いじめをなくそうって、テレビでも新聞でも言ってる。先生も人をいじめて楽しむような人間にならずに、思いやりのある人間になるようにしようって、多分、何回も学級で話しているはずだ。でも、いじめはなかなかなくならないだろ？　先生が何度もいじめた子を叱る。でも、その子は言うことを聞かない。じゃあ、どうすればいいだろ。

光子　……

ダークスーツの男A　国の政治の場合はもっと複雑なんだ。世界中には独裁者がいる国だってある。そんな国が、日本に、自分の国の家来になれって暴力を振るうかも知れない。それに、同じ国の中で強い民族が弱い民族をいじめている国だってたくさんあるんだ。おじさんだって戦争は嫌いだ。ましてや、自分の国の利益のために戦争するようなことは断固として反対だ。でも、弱いものいじめをする国や民族に、そんなことはやめなさいっていうためにも、やはり軍隊は必要なんだよ。

るり子　どうして？　話し合いで分かってくれないんですか。

ダークスーツの男A　分かってくれるような相手だったらいいんだがね。何度も話し合ったよ。経済的に困らせても見た。だが、分かってくれなかった。

るり子　でも、日本は戦争はやらないって決めたんでしょ。

ダークスーツの男　そこがつらいとこなんだ。話してもだめないじめっ子は、そのままほおっておくのかい。

間

みのり　私、歌が好きだから、歌で世界の人々と仲良くなるわ。

ダークスーツの男A　歌声よりも、銃声の方が好きな連中もいる。

るり子　私、手紙を書いて、世界の人たちに訴えるわ。弱い民族をいじめるのは、もうやめましょう、私の国と、あなたの国と、仲良くしましょうって。

ダークスーツの男A　何百べん言っても、人の言うことに耳を傾けない頑固者がいるだろ。そういう人にはどうする。

間

光子　……私、想像するわ。相手の立場を一生懸命に分かってあげて、世界の人々

が仲良くできる方法を、想像するわ。

ダークスーツの男A　私たちだって考えたさ、戦争をやめさせるいい方法をね。十や二十ではきかないさ。世界中の人が考えた。でもだめだった。話しても分からない相手には、軍隊が必要なんだ。

間

光子　私、百くらい想像してみる。

ダークスーツの男A　口で言うのはたやすいがね。

みのり　わたしも、考えるのは苦手だけど、十くらい考えてみる。

るり子　私も想像するわ。人間同士がお互いに血を流さずにすむ方法を。

光子　地球から戦争をやめさせる方法を一生懸命想像するわ。だから、戦争放棄を、憲法の中に戻して下さい！

少女たち　お願いします！

周りの舞台が明るくなり、憲法Bが光から解放される。

いつの間にか憲法AC、そして合唱団の人々が登場している。

憲法C　光が解けたわ！

憲法A　よくもどってきた。

憲法B　（少女たちに）みなさんありがとう。私を必要としてくれて。だが、君たちには大変な宿題を背負わしちゃったな。

憲法C　この子たちはこんなに若いんですもの。きっと戦争をしなくてもすむ、いろんな方法をどんどん想像してくれますよ。

憲法B　そうだ、想像は無限だ。さあ、また働くぞ。

憲法C　ますます働くためにも、エネルギーを補給しましょ。

憲法B　元気をつけるには、あれが一番だ。

光子　待って！

憲法A　どうしたの？

光子　……聞こえる。あの、ヘルメットをかぶった黒い紳士がまたやってくるわ。今度は仲間をたくさん連れて

憲法C　もう大丈夫よ。今は、こんなにたくさん仲間がいるんですもの。二度と歴史の中に閉じこめさせたりしないわ。

光子　でも、武器を持っているわ。

みのり　私は聞こえるの。世界中の子供たちが、勇気を持って戦争を放棄した日本国憲法に、笑顔で拍手しているわ！

光子　でも、相手は武器を持っているのよ！

ザックザックという不気味な足音が近づいてくる。

やがて不気味な足音は以下の朗読の声に圧倒され、消えてしまう。

スライド「日本国憲法前文」

憲法たち　日本国民は恒久の平和を念願し、人間相互の関係を支配する崇高な理想を深く自覚するのであって、平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した。

後ろに並んだ合唱団や他の出演者によって、憲法の前文がリレーされていく。

市民A（男性）　われらは、

市民B（男性）　平和を維持し、

市民C（男性）　専制と隷従、

市民D（男性）　圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しようと努めている国際社会に

於いて、

市民ＡＢＣＤ　名誉ある地位を占めたいと思う。

市民Ｅ（女性）　われらは、

市民Ｆ（女性）　全世界の国民が、

市民Ｈ（女性）　等しく恐怖と欠乏から免れ、

市民ＥＦＨ　平和のうちに生存する権利を有することを確認する。

男性全員　われらは、いずれの国家も、自国のことのみに専念して他国を無視してはならないのであって、

女性全員　政治道徳の法則は、普遍的なものであり、

市民全員　この法則に従うことは、自国の主権を維持し、他国と対等関係に立とうとする各国の責務であると信じる。

手話通訳者たちが前に出て、次の文を手話で続ける。同時にスライドでも示される。

手話・スライド「日本国民は、国家の名誉にかけて、全力を挙げてこの崇高な理想と目的を達成することを誓う」

ピアノの伴奏が入り、全員で歌う。

君よ五月の風になれ

詩　笠木　透　曲　増田康記

それは五月　この国に生まれた
その心は　人びとの平和
その名前は　日本国憲法
その心を　伝えるために
子供たちよ　君たちは風になれ

君よ五月の　風になれ
風となって　世界をめぐり
人びとの海を　わたってゆけ

それは五月　この国に生まれた
その心は　人々の主権
その名前は　日本国憲法
その心を　伝えるために
子どもたちよ　君たちは風になれ

君よ五月の　風になれ
風となって　世界をめぐり
人びとの海を　わたってゆけ

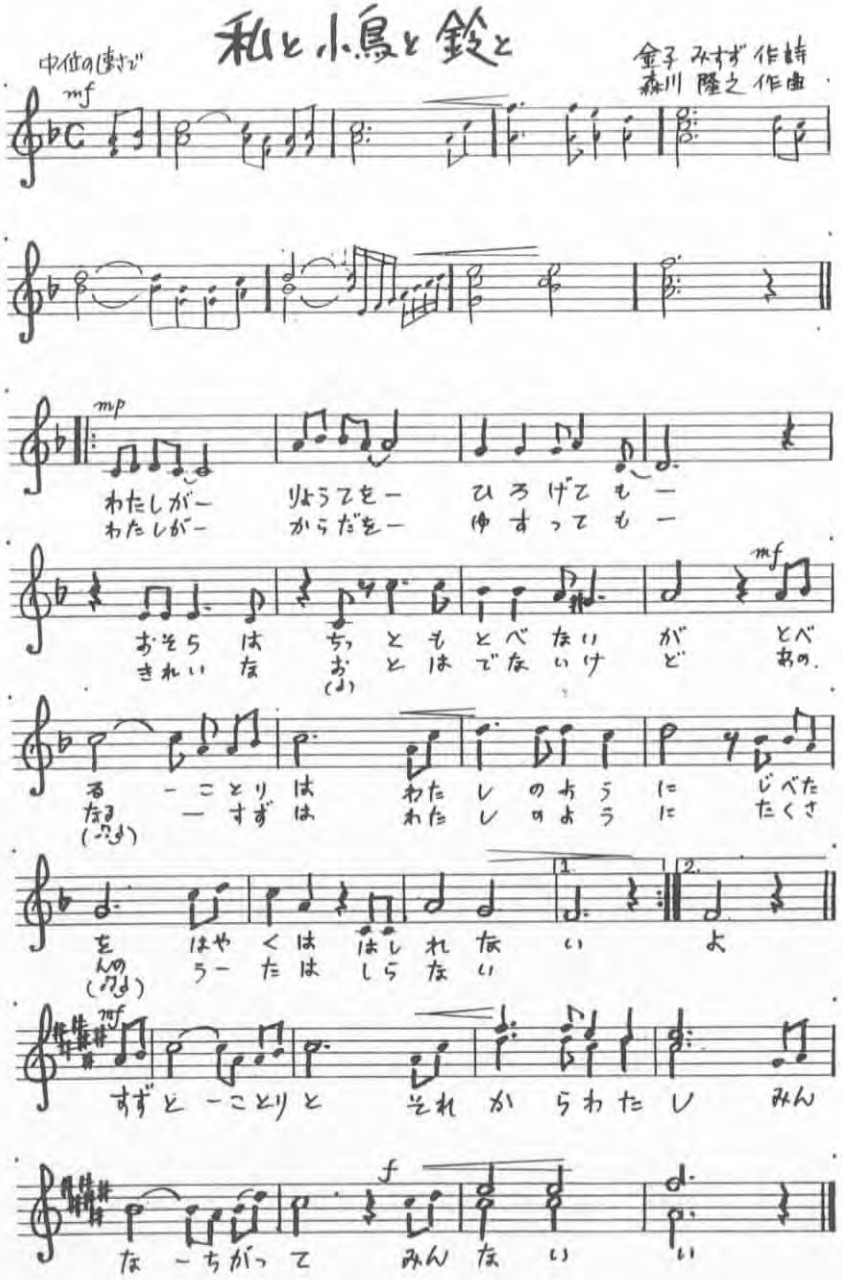
それは五月　この国に生まれた
その心は　人々の主権
その名前は　日本国憲法
その心を　伝えるために
子どもたちよ　君たちは風になれ

（アンコール）

幕

日本音楽著作権協会
（出）許諾　第０００３７８８００１

上演についてのお問い合わせは左記へ。
〒６４０-８３９１
和歌山市加納２７１-１４
楠本幸男



〔東会議総会〕

出口を示唆——深まった討議

郡司　勇（東京芸術座）

去る1月29日（土）、30日（日）の2日間、寒中の温暖の地、東海道線小田原駅と熱海駅に挟まれた湯の町〝湯河原〟で、22集団33名と西会議から特別参加していただきました、劇団あしぶえの園山土筆氏とメアリー・キャサリン・マルシニアック氏（カナダ出身）、特別講演の岩淵達治先生の総勢36名で東会議総会が開催されました。

1日目は、総会に先立ち午後2時半より運営委員会を開き、引き続いて4時から6時40分まで総会を開催。

総会は、境野修次（石るつ）、石垣政裕（仙台小劇場）の両氏の議長団で進行、冒頭、園山土筆氏より連帯の挨拶と1999年11月に初めて開催された八雲国際演劇際が八雲村と村民と劇団あしぶえの対等、平等の関係による三位一体化（人口7000人中、村民260人のボランティア）と国際社会に出ても通用する仕方（カナダ、アメリカ、日本の5劇団75名がホームステイ）の追求などで成功をかちとった報告がありました。また、我々全リ演の果たすべき日本の演劇の中での役割は何か、全リ演は時代の先どりをしてきたはずだが、今はそうなっていないのではないか、などの問題提起がありました。

続いて、普段は日本人に英語を教えていらっしゃるメアリーさんがエールを贈って下さいました。「全リ演」の「英語名」が無いので通訳が難しい。ますます国際化していく中で英語名が必要なのではないか、との指摘に頷くことしきり。なお、メアリーさんは国際化と演劇のつながりについて研究していきたいと話を結びました。

次に、議長団挨拶を兼ねた基調報告（内容次頁）をこばやしひろし（劇団はぐるま）氏が行い、熱のこもった問題提起がなされました。続いて各ブロック1集団、計5集団より活動報告があり、創作劇の創造で成功した例や稽古への集中問題や世代間の意識のギャップが共通課題だったり、世代交替を踏まえた新人の育成も急を要する課題として共通認識されました。

次に、特別講演「今の時代にどんな演劇を望むか」をテーマに、ブレヒト研究家で演出家の岩淵達治さんにお話をしていただきました。

全リ演のみなさんは、リアリズムにのっとって演劇を創っているか、との問いかけから話をおこし、論理の崩壊（プロットの解体）と肉体の復権を主張する現代演劇の傾向に言及し、最近の演劇はリアリズムに反しているのではないか。台詞を大事にした、テキスト中心で芝居を創ってほしい、と要望。近代演劇の系譜をなぞりながら、ヨーロッパ現代演劇の傾向、ドラマの崩壊・ストーリィの解体・テキストの解体を旨とする「ポストドラマ時代の演劇」を批判し、リアリズム演劇への回帰を主張されました。メッセージを持ち、お客にもわかる芝居を創ってほしいとの耳の痛いお話でした。

夕食と食後の交流会では、時間の経つのも忘れ各部屋で演劇論が熱くたたかわされました。

2日目。城谷事務局長からの活動方針案があり、特にこの夏は第8回全日本演劇フェスティバルが岩手県湯田町で開催されるので、質の高い演劇と動員の成功でフェスティバルを大きく成功させようと提起されました。

創作劇の創出と魅力あるプログラムの企画はどうしたらできるかの提起には、活発な討論がなされ、創作劇作家とちゃんと向き合っている演出家や制作者はいるのか、レパ選びで活発な論議がなされているか、とか、行政とのタイアップも追及すべきだ、多文化社会の発展の中で海外公演も視野に入れてなど、「出口ナシ」状況からの出口を示唆するような深まった討論になりました。

活動方針と会計報告を満場一致で承認し、夏の演劇フェスティバルでの再会を約して散会しました。

基調報告

「いま全リ演は」

議長団　こばやしひろし

1

京都で小学生が何者かに殺され、その残虐性は第二の酒鬼薔薇事件といわれている。ミレニアム2000年と新聞マスコミは書き立てているが、新しい世紀の感動も興奮もないままコンピューターの2000年問題だけに振り回されて2000年に入った。未来を展望する新しい思想は何も見えてない。

「教えるとは教師とともに未来を語ることであり、学ぶとは誠実を胸に刻むことである」という有名なアラゴンの言葉があるが、語り合う未来がないとすれば教師は何を語ればいいのか、未来に生きる子供はどうすればいいのか。この状況で教育が成立しないのは当然である。学校崩壊が起こり、不登校問題は続出し、教師に出口はない。まさに閉塞状況の中に今日の教育があるのだ。第二第三の酒鬼薔薇が出てくる状況があるのである。

富国強兵を目指したかつての日本は「軍事大国文化貧国」だった。敗戦後新生日本もスローガンとして「経済文化立国」を目指した。ところが経済大国になったかもしれないが、文化の貧困はそのまま野ざらしにされてきたのである。

2000万のアジアの民衆を殺し、300万の日本の若者を犠牲にした歴史から学ぶこともなく、新生日本の存在を問う立国の根本思想すら確立せず、歴史に目を覆い、隠し、口をふさぎ、アジアへの新しい戦争、朝鮮戦争、ヴェトナム戦争に支えられてがむしゃらに経済大国にのしあがったのである。その延長上に沖縄の基地問題があり、新ガイドライン、日の丸、君が代の法整備があるのである。

こうして「軍事大国文化貧国」はそのまま「経済大国文化貧国」になり変わっただけなのである。悲しいかな国民の大国意識は全く戦前と変わっていないのだ。ただ従属意識が脱亜入欧から脱亜入米に変わっただけである。

その経済大国の行く手が怪しくなってきたのだ。環境問題はもちろんであるが、大量消費に埋没し、精神的な飢餓状況はあらゆる社会生活に教育に家庭に地域に障害をもたらしているのである。これが君が代や日の丸で解決すると思っているのだろうか。その精神構造を問い質したい。今後大陸経済の発展にともないますます右傾化することは目

に見えている。自由主義史観はその現れである。

こうして2000年に向かう。20世紀は「戦争の世紀」とすれば21世紀は「国際交流の世紀」「文化の世紀」さらに「アジアの世紀」といわれている。これでなんの展望があるのか。ここが戦後営々と努力してフランスとともにEUの中心となったドイツとの違いである。

中日新聞がギャラップ社に委託して昨年末（99年11月）にアメリカ、タイ、中国、フランスで調査した世論調査がある。「日本と聞いて思い浮かぶものは?」どこの国もトップに「先進技術」を上げている。ところが中国は圧倒的に「侵略戦争」である。

フランスは除くが、アメリカ、フランスは全国から、中国は北京、上海。タイはバンコクでの調査と注があった。私は中国を知っているが、大都市は日本との経済関係も強くわりに親日的と考えていいが、農村の侵略戦争に対する憎悪は今も続いていることを忘れてはいけない。

もう一つ例を挙げておこう。韓国の東亜日報と朝日新聞が毎年同じ項目で世論調査をしている。日本をどう思うかの韓国の動向である。

韓国での日本文化が解禁され、サッカーのワールドカップの大会が両国で行われるというのに、年とともに減るならいざ知らず、嫌いがどんどん増え、好きが減ってゆくのである。10人に7人は嫌いなのだ。驚くべきことといわねばならない。大国意識の傲慢にほかならない。軍事大国が経済大国になっただけである。大国意識はみじんも変わっていないのである。これで「アジアの世紀」に入って行けると日本の政治家は思っているのだろうか、いや、日本人の一人一人、あなたにその不安がないのだろうか。ないとしたら無知というほかない。

こうなると2000年への展望はわれわれ日本人一人一人の変革以外にない。変わる以外にないのである。それは文化である。文化による批判力豊かな市民意識の涵養である。文化はつねに国際化する。われわれはその文化の担い手なのである。そのための全リ演は組織なのだ。

アメリカ	①先進技術・製品（自動車、カメラ）	156
	②勤勉・規律・集団主義（多忙、秩序）	57
	③歴史・文化（寺院、庭園、芸者）	44
	④島国・人口過密	43
	⑤戦争（真珠湾）	35
中国	①戦争（侵略戦争、抗日戦争、南京大虐殺）	224
	②経済発展（先進国、繁栄）	76
	③憎悪・反感（野蛮人、軽蔑、残虐）	40
	④先進技術・製品（電気製品、自動車）	35
	⑤勤勉・規律・集団主義（多忙、団結）	22
タイ	①先進技術（自動車、電子機械）	170
	②経済発展（先進国、繁栄）	58
	③戦争（クワイ川鉄橋、アジア侵略）	40
	④歴史・文化（サムライ、着物）	35
	⑤自然の美（桜、富士山）	22

	好き	嫌い
1984年	22.6％	38.9％
1988年	13.6％	50.6％
1990年	5.4％	66.0％
1995年	5.5％	68.9％

2

私たちの変革は何から起こしたらいいだろうか。経済主義からの脱却である。経済主義、合理主義、効率主義はすべてがソンかトクかで決まるのである。戦後の価値判断でこれほど悪い影響を与えたものはない。これがすべての価値基準になれば均質化、没個性化は当然であり、人間の衰弱、精神的飢餓状況は必然である。ここにオウムを始めとするオカルト的宗教が続出するとともに、閉じこもり、引きこもり、不登校が生まれるのである。

イギリスのJ・ラスキンは言う。「舞台芸術を創りだす劇団や劇場、美術品を創りだすアトリエや工房などは人間社会におけるもっとも高度な産業である」と。高度な産業といえば、普通ハイテク産業を連想するが、ラスキンの考えではハイテク産業より劇団の方がより高度な産業なのだ。彼は経済的な価値観といえば、金銭の「もうけ」が多いか少ないかが基準になるのを批判し、財やサービスの真の経済的価値は、それらが消費されるとき、「人間の生命力の進歩に対してどれだけ貢献したか否かによって測定される」というのである。

こうして高度に発達した社会のインフラストラクチャーとして欠かせないものとして芸術文化活動が大きく注目されるようになってきたのだ。すなわち、経済以外に社会を構成するインフラストラクチャーはないと考えてきた日本は人間の健全な発達のために極めていびつな不健全な社会といわなければならないのである。本当の意味での先進国ではない、後進国なのである。そのいびつが今日大きな障害としていろんな面に噴出していると考えなければならない。当然ここには宗教も入ってくる。要は人生に感動を与え、生きる勇気と生きがいをもたらすかどうかである。

過去の経済動向を振り返りながら、われわれが何を求めているかをみよう。60年代の高度成長期に入るや、生活関連文化の道路、水道、下水、住宅が満たされ、洗濯機、冷蔵庫、自動車も完備されるようになる。すると、生活要求は当然、テレビ、カメラ、ビデオ、と文化機器に広がってゆく。これらの機器は企業生産として利潤をもたらす商品である。しかし、これで人間は満足できないのである。人間疎外からの回復を求めて生の文化要求へと広がってゆくのである。これが80年代に入るや急速に広がり始めた。

これを数字で示そう。日本演奏家連盟によれば、日本人の演奏公演は1975年約800回だったのが1980年1900回、1986年にはなんと4000回に激増、美術館への入場者は1974年991万人であったのが1983年には1947万人に達しているのである。

これは経済企画庁の調査だが、1975年を境に心の豊かさを求める人が、ものの豊かさを求める人を上回り、1987年には前者は49・6％後者は34・0％になったのだ。今や明らかに物の豊かさより、心の豊かさ、個性化への要求が急激に増え、国民の文化要求が生の文化を求めて広がっているのを示しているのである。

しかし、心の豊かさをもたらす生の文化はテレビやビデオのような文化機器とことなり、企業の商品化にはなじま

ないのである。生の文化は機械でなく、人間でしか創りえないからだ。となれば当然一朝一夕でラスキンのいうもっとも高度な産業である地域文化を創ることは出来ないのである。

各地に文化会館だけは立派に創られている。政治家の名を残すメモリアルホールとして豪華に創られているが中身がない。ここでパブリックシアターとして、そこにソフトを提供する私たち集団に一体問題はないのかである。

3

前年の東会議の議案書の「今日と全リ演の置かれている立場」を改めて討議してもらいたいが、文化貧国であるから、文化は政治以上に中央集中である。当然、全国文化不毛の地である。これではいけないと80年に入り、「地方の時代」「文化の時代」といいだしたのである。ところが不毛の地はないないずくめである。

金がない、観客がない、人材がない。観客がなければ金がないのは当然である。先進国のように観客があっても資金不足を公共助成で補っているのだから、言わずと知れたことである。しかし、今日ではアーツプランはわれわれとは縁がないが、文化文化と蚊が泣くように声騒がしくなったので各自治体も文化に金を出すようになったのである。しかし、それに応えるだけの観客と創造がなければ自治体も応じてくれない。また自治体も求めているのだが、それに応えるだけの集団がないのである。

創造と観客。これは車の両輪のような関係で、舞台創造が豊かでない限り観客は増えないし、また観客が細れば舞台創造も痩せて行く関係にあるのだ。じゃ、どうすれば舞台創造が豊かになるかといえば、集団創造だから集団の力量があるかどうかということになる。これまた観客と相関関係にあるのである。観客が少なければ集団は痩せて行く。

集団創造のエネルギーは面白いもので一人では考えられないエネルギーの集積が生まれるのである。集団に火が付き、燃えれば燃えるほど舞台創造は膨らみ、観客へのエネルギーも広がって行くのだ。だれが火をつけるか、それはまず本と演出である。

ところが「本がない本がない」とどこの劇団も苦しんでいる。とくにリアリズムを創造の基本に考えている劇団ほどそれが激しい。既成脚本に集団に見あう本がないのである。

なにしろ多様化の波の中で、自分の人生と舞台をつないで見る観客はいるかもしれないが、演劇を運動の一環と考え、社会運動と結び付ける60年代前半の時代の観客はもう姿を消したのである。

何をもって感動を生み出すか、多様化した観客の中から見つけ出されなければならないのだ。そうなると創作劇が劇団の基本的な創造システムでなければならないのである。といって創作劇はそう簡単に生まれるものではない。しかし、困難を乗り越えて、それを生み出すのがこれからの劇団の基本的な課題であろう。といって今日の若者劇団が生み出す創造劇を肯定しようとは思わない。

60年代後半から現れたアングラ劇団によって主張され始めた非リアリズム演劇の影響によって、論理の崩壊、肉体の復権、言語の解体が表面化し始め、劇作家が劇団とともに全国にあふれ始めたのである。東京には1000をこす

劇団があるという。ということは1000をこす作品が生産されているということである。デッサンのできないものが抽象画を書くようなもので人間のかけない者がドラマと称するものを書きまくるのである。これでパブリックシアターの要請に応えられるはずがない。

4

次に考えられるのはスタッフの強化である。舞台に立ちたい者はいくらでも現れるが、舞台を裏で支え生かすスタッフの希望者はまずいないと考えていいだろう。しかし、この裏が強くならない限り、総合芸術である芝居に魅力が生まれるはずがない。

これが地方劇団の最大の弱点である。その多くが配役の余りで埋められるか、役者との暗黙の交替制ができているかである。これで専門職としてのスタッフが創造的に成熟するとは考えられない。とくにこれからはスタッフの時代といわれている。舞台の多様な拡大はこれからも進む。演出もスタッフの創造の広がり抜きに今日の観客の要求に応えられなくなってきているのである。どうしたら創造的スタッフ集団を構成できるか、これからの大きな課題である。

スタッフの中でさらに地位を占めていないのは制作経営である。

京浜の城谷氏が、「弾んで弾んで……制作の心」でチケット売りからの脱皮で「券が何枚売れた」とか「赤字を出さないためにどうすればいいか」といった後手の対策ではなく、どういう企画を立てるか、どうしたら話題になるか、どうすれば劇団員が燃えるか…と書き出しているが、芝居の意義と運動の意義を訴えればその運動に共鳴する観客がまとめてきてくれる時代でないことは前に述べたとおりである。今日の資本主義の混迷の中で、その何で共鳴を得るか、目に見えない観客を何で手操り寄せるか、今やその手操り寄せるもの、企画が大切な時代なのである。それによって集団が燃え、観客が燃えたとき、舞台は燃えるのだ。舞台はだれが燃やすか、観客である。100人や200人の観客では舞台も地域も燃えない。

だれかがチケットのまとめと会計をしなければいけないのでやらされている、ということでは今日の観客をつかむことができないのである。心はこれによって次、いい役につけてもらえる、それだけである。それでは縮小再生産で稽古場公演に閉じこもる以外ないことになる。少なくともパブリックシアターの要請に応える集団になるためには1000人を越える企画を常に地域に提供する力がなければ公共圏を持つ、公共性のある集団とはいえないのである。

演出もスタッフの一人である。演出は集団創造のまとめ役である。まとめ役とは集団の個々の創造力と個性を十分生かし、引き出し、観客創造と火花を散らすようにまとめていく役である。だれにでもできる仕事ではない。創造力豊かな人間でなければいけない。しかし、現状では俳優と同じでこれがだれにでもできるから不思議である。演劇以外の舞台芸術はそうはいかない。音楽、洋舞、バレエ、日舞、歌舞伎、どの分野も基礎的な知識と能力なしにできないのだ。

それに演出者は組織者でもある。組織者は配役権を持つ権力者でもある。一旦その地位に付くと簡単に変われないのが集団の現実である。創造

性豊かな人に当ればいいが、そう簡単にそういう人材は見あたらない。東京でも滅多にいないのである。

とすれば創造性豊かな存在をどう見つけるか至難の技である。その中でそれを見出す、それはその集団の能力、力である。外部から輸血するもよし、内部で率直に話し合って代わり代わり才能を見出すのもいいだろう。いずれにしても能力のある演出をどう生み出すかである。

劇団支木の中野健は支木だけでなく全リ演を代表する演出家である。中野健が全リ演に10人いたらと思う。

いずれにしても人材はみんな東京に集まるようになっている。地方にはカスばかり残っているという現実から出発しなければならない。そのカスの力で地方文化を創らなければならないのだ。困難が伴うのは当然である。しかし、意地でもカスの力を示さなければならないのである。

地方文化の時代を迎えて地方文化費は増えている。増えれば増えるほど、東京の市場が豊かになるという矛盾を持っているのである。どこの公共ホールも貸しホールだけでなく自主企画を持つようになった。結構なことである。ところが多くが東京文化の呼屋になっているからである。

それはわれわれがその自主企画を受け持つ力がないためである。受け持てないとすればますます東京に人材が集まるということになる。全リ演はその課題に応えなければならない。

「西日本劇作家の会」
道後で第16回総会を開く

7作品を研究台本として討議

10月30、31の両日にわたって松山の道後温泉で西日本劇作家の会の第16回総会が開かれた。出席者は栗原省、東川宗彦、熊本一、清水巖、楠本幸男、武田隆良、広島友好、それに劇団こじか座の畑野稔の8氏。

会では地元出身の正岡子規研究の第一人者、長谷川孝士氏による講演があったほか、毎年、作品研究も行っており、芳地隆介作『華・散る』、清水巖作『こうべ曼陀羅』、武田隆良作『カナリアは歌わない』、楠本幸男作『月の砂漠』、広島友好作『おうこくの木』、そして瀬戸洋氏の『泣いてたまるか』と『壊れた器』のあわせて7作品が研究台本として討議された。

なお西日本劇作家の会では『ドラマの森』第3集の発行に向けて今年の1月30日に阿部好一、藤沢薫、熊本一らの選考委員によって最終的な作品選考委員会がもたれ、掲載4作品が決定した（掲載作品については裏表紙の広告をごらんください）。

（楠本幸男）

〔山静ブロックゼミナール〕
すすむべき方向とあり方を探る

4劇団24人が交流を深めました

全リ演（東）山静ブロックゼミナールが12月11日（土）・12日（日）の両日、山梨の早川町・ヴィラ雨畑で開かれ、静岡の劇団静芸3人、劇団からっかぜ5人、劇団火の鳥1人と地元の劇団やまなみ15人、計24人が参加し交流を深めました。

同ゼミは11日午後2時に準備体操で始まり、参加者全員によるドッチボールで汗を流し、負け組は罰ゲームとして宿舎5周の走りこみをして日頃の運動不足を解消?し、温泉にたっぷりとつかった後、夕食交流会となりました。

夕食交流会は、4劇団の参加者紹介が行われた。続いて、劇団やまなみの梅津幸三さんの「屁たれ嫁コ」「山姥」の語り、坂本英子さんの「孫の手紙」の朗読が披露され、アルコールがほどよくまわり深夜まで交流がつづきました。

翌日は、4劇団の近況報告が行われ、それぞれがかかえている問題や課題について討論を行いました。

討論のなかで共通している問題は、劇団員が減少していること、稽古に結集困難な状況が生まれていること。顧客組織をどのようにつくりだし、広げ、固定化していくか。台本の選定と創作劇をつくりだしていくエネルギーの結集。次の世代をどう育てていくか。劇団のすすむべき方向とありかた等々が活発に意見交換されました。

最後に、①これからの若い劇団員に何を伝えていくのか。②常に地域の人たち（観客）を視野にいれた芝居づくり。③自分自身が時代とどう向き合うのか、と討論を3点に梅津幸三さんがまとめて、2日間のゼミを正午に終了しました。

交流会では、梅津幸三さんの語り「屁たれ嫁コ」、坂本英子さんの朗読「孫の手紙」が披露され、大いにわきました。（写真は梅津さん）

大阪自演連新春交流会
来年2月の合同公演にむけて開く

2月19日（土）～2月20日（日）、大阪府四條畷市「えにし庵」において、自演連（加盟劇団＝劇団息吹、劇団大阪、劇団きづがわ、劇団未来、大阪府職員演劇研究会、座・わだち）の新春交流会が開かれた。

新春交流会はこれまで毎年行われていたが、ここしばらくは5年に一度の自演連合同公演の前年に行われている。今回の新春交流会も来年2月の合同公演（「1995・こうべ曼陀羅」作・清水巖）に向けての取り組みであり、自演連加盟6劇団より総勢42名が参加した。

初日（19日）は、夜7時より開始、まず、みんなでナベをつついてのパーティー。その中で自演連代表・劇団大阪の杉本進氏から「自演連の仲間がこうして5年ぶりに集まったことは大変うれしく、また、貴重なこと。来年の合同公演からぜひ21世紀につなげる活動に」とのあいさつ、そして来年の合同公演の演出をする劇団未来の森本景文氏からは「〝こうべ曼陀羅〟は阪神大震災がテーマ。大阪に住む我々だから出来る芝居。そして西暦2001年は震災からちょうど6年目。これを風化させない私たちの感性が問われている。みんなの力を集めて感性豊かな舞台を創りましょう」とのあいさつ。

その後は各劇団から劇団PR、新人紹介などと大変盛り上がった。午後10時でいったん中締めとなり、続いて宿泊する者で夜を徹しての語らい。老若男女を問わず楽しい一夜となった。

2日目は朝食の後、河塚によるワークショップ（即興演劇的なゲーム）。これもまた大いに盛り上った。

今回、この企画を実行するにあたり、お世話になったたくさんの方々に心から深くお礼を申し上げます。また、来年の合同公演を成功させるために頑張っていきたい、と気持ちを引き締める催しとなったことに喜びを感じています。

新春交流会実行委員長
河塚俊哉（きづがわ）

第2回東・西合同作家会議を開きます

東・西の書き手を中心に、演出や制作担当も含めて楽しくにぎやかに作品討論などを行います。これから書きたいと思っている仲間もぜひ参加して下さい。

日時　6月10日（土）午後3時～11日（日）正午
会場　三重県桑名市日立金属桑名研修センター（温泉あり）
参加費　8000円（1泊3食、交流会費込み）
内容（予定）
100号記念戯曲集や、「ドラマの森」（西より5月末発行）の掲載戯曲などの討論。問題提起は岩淵達治氏（演出家、学習院大学名誉教授）に依頼中です。
参加申込　5月20日までに左記へよろしく
〒457-0016
名古屋市南区汐田町11-8
栗木英章
TEL・FAX
052-821-3691

劇団はぐるま45周年祝賀会が盛大に

藤沢　薫

去る2月27日、岐阜グランドホテルにおいて劇団はぐるまの45周年を祝う祝賀会が盛大に行われた。

岐阜市長・大垣市長の祝辞に続いて岐阜市ふるさと文化賞の授賞式もあった。この日は今や東海地方の強力なスタッフ集団である総合舞台はぐるまの30周年とこばやしひろし作品集の出版記念も兼ねており、お祝いづくめのパーティーであったのだが、広い会場を埋め尽くした400名になんなんとする参加者の数は、これまで劇団はぐるまが地域にしっかり根をおろし行政とも結びついて公共劇団としての役割をはたしていることを示してあまりあるものがあった。

はじめ盛装した会場にいきなり銃声が響いておどろいたが、『カンナの咲き乱れるはて』の終幕の上演だった。舞台では終始うたや踊りの演奏があったが、これも劇団の自信のほどをうかがわせた。

そして映画『郡上の立百姓』のクランクインのキャンペーンもあり、まさにはぐるまは隆盛である。

演集和歌山30周年記念のつどい開く

森本　景文

2000年3月5日（日）「演劇集団和歌山30周年記念のつどい」がサンピア和歌山で開かれました。

12人の晴れ晴れとした劇団員を囲んで、OB・周辺の劇団・演劇観賞会・子ども劇場・後援者・阪中正夫生誕百年記念事業実行委員会など50数名の参加でした。全リ演西会議からは、事務局長の熊本さん・京芸の藤沢さん・大阪の清原さん・いこらの栗原さん・作家の東川さんと私が出席しました。

「ほうーなるほど」と思ったことがいくつかあります。

まず初めに、別院清さんが会社の倒産による事後処理で不参加だったほかは、創立者の中川真一さん・別院丁子さんをはじめ、主なOBのみなさんが〝明るい笑顔〟で来ておられたことについてです。劇団の長い歴史のなかでは、人間関係や経済問題のもつれから怨念を抱いて退団し、その後没交渉ということを垣間見てきているだけに驚きでした。願わくばこの20人ほどのOBが、「劇団活動をする時間はないけどお金は出すわ」「裏の仕事だけは手助けするわ」「せめてチケットは売ったげるわ」というようなことをしていただけると、演集和歌山のジャンプが望めるのにと思ったのです。

次に、ZERO・ノスタルジア・SONOGO・玉兎想君などの若い周辺劇団の人たちが来ていて、「いつでも笑いを忘れない理想の稽古場をつくっている」「アットホームななかにも、演劇に対する個人個人の情熱が伝わってきて、私たちもいつかは演集さんのようになりたい」と演集和歌山の稽古場を訪問したときの感想を語っていることに驚きました。

長い間新劇をやってきた集団と、最近演劇を始めた若い集団とには交流がなくお互いの殻に閉じこもっている傾向の多い現状のなかで、このように若い劇団とつき合っている演集だからこそ、ここ10年ほどの間に若い劇団員を増やし7割近くを占めている秘密を知りえたような気がしました。

そして、30年間の上演レパートリーを見てみますと、『三角帽子』『アンネの日記』『バラのいれずみ』『泰山木の木の下で』『きらめく星座』などの名作、『分裂気質』『かすみあみ』『落ちこぼれの神様』などの問題意識のはっきりした作品と、栗原省さん・森井淳さんによる和歌山を素材にした創作劇や和歌山の観客を視野に入れた脚色ものが目につきます。

さらに80年代後半から、岡部耕大・横内謙介・つかこうへい・鐘下辰男・飯島早苗など現代の新しい作家といわれる人の作品への挑戦が見てとれます。これはきっと若い劇団員の加入と無関係ではないでしょうし、21世紀を拓く和歌山発のお芝居を創りだしていく試金石なのだろうと思えます。

ところが不思議なことが一つあります。演集和歌山の事務局長楠本幸男さんは、ここ10年で8本の戯曲を創作されています。このうち、演集で上演されたものは『操縦不能』『かもめが帰る日』の2本、大阪自演連と広島で上演されたものが各1本で、あとの4本は舞台化されていません。

板にのってものらなくても自分の書きたいものを書いていくのだという楠本さんの創作意欲の深さとエネルギーに驚嘆します。しかも劇団の事務局長という実務的な役割をこなしつつです。

劇団内の座付作者の場合、稽古に入る前の創作過程と稽古という舞台化の両方において劇団員の意見を聞き、よりよい戯曲にしていく可能性があるように思います。

また役者や演出など舞台化する側にとっては、わからないところは気軽に聞けるということも含めて、戯曲の世界を自分自身のこととして徹底して形象していける利点をもっています。

しかしこれには一定のルールが必要で、「あなたの本は○○さんの本の水準に達していない」「君の演出は、演技は、○○劇団の○○さんより劣っている」と言いだしたらそれこそ泥試合になります。取りあげている素材や描き方における作者の特長や良さを演出者や演技者はまず評価しなければなりませんし、作者は舞台化する側の特長や良さを認めなければならないと思うのです。そしてその評価の基準は、その公演を観てもらおうとするお客さんの生活や気分や願いをどう知っており、どう演劇として具体化しているのかということでしょう。

言わずもがなのことを書いてしまいました。

演集和歌山は、30周年記念公演No1として今秋9月、和歌山出身の故坂中正夫さんの紀州弁で書かれた名作・フアース『馬』を上演されるということです。67年前に書かれた作品ですが、狂言をヒントにされていることもあり現代の和歌山発喜劇を創りあげていくことに大いに役立てていってほしいと思います。

No2は来春に「創作劇」上演を予定されています。

和歌山という生活圏で呼吸している演集のみなさんであるからこそ創れる「巧くはないけど、心に迫ってくるなあ」と和歌山の人たちが胸を熱くする舞台に仕上がることを、心から期待しています。

劇団の住所が変わりました

☆演劇集団「土くれ」
〒120-0003
東京都足立区東和5丁目12-7-103　石塚方
☎03-3629-3286
FAX　同右

☆劇団はにわ
〒462-0831
名古屋市北区城東町4の85　402号
☎052-981-5482

郵便物はアトリエ（左記）に送って下さい

☆劇団からっかぜ
〒431-0201
浜松市篠原町21505

全リ演ニュース

議長団会議開く

全リ演東西合同の議長団会議が2月12、13日、大阪市内の新町ノースサイドホテルで開かれました。今回は、「演劇会議」の編集が西から東に移行する年であることから編集委員も参加しました。

出席者（敬称略）

議長団　こばやしひろし（はぐるま）、後藤陽吉（青年劇場）、中野健（支木）、仲武司（関西芸術座）、藤沢薫（京芸）、猿渡公一（福岡現代劇場）

事務局　城谷護（京浜）、熊本一（大阪）、清原正次（大阪）

編集委員　早川昭二（銅鑼）、赤松比洋子（きづがわ）、栗原省（いこら）、楠本幸男（和歌山）、境野修次（石るつ）、石垣政裕（仙台小）

新編集長を早急に当面、早川編集長が続投

会議ではまず、「演劇会議」の編集長交替の件と、編集体制を西から東に移行する件について話し合われました。

編集長の件について、早川昭二編集長から次のような申し出がありました（早川氏は入院中で病院から外泊の許可をもらっての会議出席でした）。

「6年前、暫定的にという条件で編集長を引き受けたが、世代交替を積極的に考えてほしい。先のことを見越した演劇雑誌にしていくべきだ。例えば、しいのみシアターなど突出した動きなどを普遍化していくのは「演劇会議」の仕事だ。この雑誌がそういったことをリードしていけるようにしたい。そのためにも若い人を編集長にしていくべきだ」。

この提起を受けて討論。「西の方ではすでに赤松さん、楠本さんなど若い人を入れてやっている。編集委員は若い人でいいが、やはり編集長というのは巨視的に見れる人でなければ」など意見が多く出され、かなり長時間にわたって議論しましたが、結局次のようになりました。

・編集長候補として新しい人を探す。地の利を考えて関東から選出する（今年5月までに関東ブロックで選出してもらう）。

・早川さんにはもうしばらく編集長として続けていただき、新編集長との引きつぎがスムーズにいくよう協力をお願いする。できるだけ早い時期に交替できるようにする。

印刷は引き続き「シイーム」で

次に、編集体制について検討しました。

東から西に移行してから3年が経ち、今年秋に発行する104号からまた東に移る約束になっています。この間、西は編集会議も編集・発送業務もすべて集団的に行ってきました。それは運動と結び付いたものとなって、いい体制ができています。また、印刷を担当してくれているシイームの石田さんは、「演劇会議」に愛情をもってくれており、この雑誌のために投資もして体勢を整えてくれ、料金も安くしてくれています。

これに比べ、東は初めの頃はよかったですが、編集も発送もだんだん個人まかせになってきて集団体制がくずれてきていました。その結果、劇評など東の原稿が極端に少なくなったり、校正ミスが多いなど、多くの問題点が生じました。

こうした状況を踏まえた上で、編集体制については次のようにしていくことになりました。

・東の集団編集体制を早急に確立する。

・印刷は引き続きシイームにお願いする。

・集金・会計は引き続き東の京浜にお願いする。

・編集会議には当分西から赤松比洋子氏に出席してもらい、ここ3年間のノウハウを全体のものにしてもらう。

・編集の東西交替制はおかしい。あくまで全リ演の機関誌として1カ所で編集してゆく方向に持っていく。

今から参加の準備を演劇フェスティバル

今年8月25日（金）から岩手県湯田町で3日間の日程で行われる第8回全日本演劇フェスティバルについて、(1)東から170人、西から80人、合計250人の参加者を集めて成功させる。(2)中野健氏を臨時の専従者になってもらい諸準備を進めていく。(3)ニュースをできるだけ早く出していく。

なお、次回（2003年）のフェスティバル開催候補地として、愛知県長手町があがりました。

また、各自治体の文化行政、特に助成金の実態などについて西が調査をしようとしている件についてこれは東も一緒にやろうということになりました。

新世紀にむけての戯曲公募

関西芸術座

募集内容　創作戯曲で題材などは自由。21世紀記念事業として、新たな活動をめざして広く創作劇を発掘するため実施。

応募規定　400字詰原稿用紙150枚以内（ワープロでも可）。未発表のものに限る。住所・氏名・年齢・職業・電話番号を明記。審査は劇団文芸部。

賞　入賞作1編　50万円。佳作　若干。

締切　9月30日必着。原稿は返却なし。

著作権　受賞作品の上演権は一定期間は主催者（関西芸術座）に帰属。著作権などの契約については作者と協議決定。

発表　12月中旬、応募者に通知。

送り先　〒557-0042　大阪市西成区岸里東2の10の2

「100号記念戯曲集」を読んで

心暖まる作品に触れて

片野　耕治（劇団名芸）

猫のくり広げる自由と冒険の物語が面白おかしく、はらはらどきどきさせながらの展開にクスクスしながらページをめくると、歌や踊りが目前で演じられているような雰囲気が伝わって来ます。発想の奇抜さもあり最初の作品から圧倒させられてしまった『ピアニアン』。

以後、次々と読み進むほどに、どの作品も人間を暖かく見守り励ましてくれる内容ばかりでなんだか嬉しくなってしまいました。

死と対面せざるを得ない病気で病院生活を送った私には、『風・夏冬』は人の心の優しさがどれほど生きる支えになったかを改めて感じさせてくれるものでした。老人ホームとホームレスという孤独な場面設定を逆手にふんだんに笑いを配置し、しかも苦しく悲しい現実をさりげなく取り入れて、最後は剣舞でみごとに二つの作品が統一されていました。涙なくしては読み進むことができない心暖まる作品だと思いました。

全リ演に集う作家に拍手を送り、今回の企画に心から感謝しお礼を申し上げたく一筆させていただきました。

いま大切なことは

森本　景文（劇団未来）

本日演劇会議誌「100号記念戯曲集」落手。ザッと目を通しました。選考委員並びに編集委員のみなさまのご努力とご苦労、心から「お疲れさま」とねぎらいます。

作品の質、戯曲集としての並べ方も含めて見事です。東西リ演のひとつのエポックです。

でも一つだけどうしても了解できないことがあります。今、生き方の多様化により、どういう舞台を創るかも多様化し、戯曲としてもいろんなものが出てきています。個性的なものが、輩出しているといっても良いでしょう。

だからこそ今回の14作品の中から7作品を選んだ理由を、きちんと出してもらう必要があるのではないでしょうか。特に、落とした7作品についてその理由（評価と問題点）を明らかにすべきなのではありませんか。

梶さんの選考経過の中の「それぞれの意見はほぼ一致して会議は円滑にすすんだが、一部難航し時間がかかった」とありますが、「その難航したこと」こそ、明らかにすべきです。選考委員一人一人の意見を明記して…。

各劇団で上演できる作品を提供するだけなら、上演戯曲をお互いに送ることでできる訳ですから…。4人の選考委員の14本に対する考え方を雑誌の少なくとも1／10くらいは取って掲載することが今、大切だと僕は思います。

編集後記

☆「リアリズム・シリーズ」も⑬を迎える。広めの切り口から始めたが、そろそろ間口を何本かの柱にしぼって、リアリズムの無限の豊かさを追求したい—。

☆ここで、思いもかけない訃報に接した。兼八善兼氏（早稲田露文。『新演』『青俳』『俳優修業第3部』の訳。69歳）、宮沢俊一氏（演出家。ロシア演劇・文学研究家、群像社社長。67歳）である。

☆若き日、「戦後日本演劇は俺たちの手で」の意気込み同士だったし、特に乏しい文献だけが頼りの熱気あふれるスタ・レスシステム受容の模索（勉強会）ぶりは、振り返ってぜひ「演劇会議」誌にも紹介したかった。おそまきながら急がねば。

（早川昭二）

☆議長団、編集委員会合同会議に、早川さんが病院から抜け出して参加された。鶴のようにやせたからだがますますやせておられた。

☆議論が「演劇会議」誌のあり方に及ぶや早川さんは病身を忘れ熱っぽく本誌の存在意義を語り、もっと若い人もどんどん読むようにしたいと話された。

☆そして「そのためにも一日も早く新しい若い編集長をつくってほしい。命が保つかどうかわからんが、それまで私もがんばるから」と決意をのべられた。

☆早川編集長の健康のためにも、よい本をつくらねば。

（栗原　省）

☆舞台、映画、テレビ、ラジオと幅広い活躍をしておられる鈴木瑞穂さんに旅公演のなか、大阪で途中下車してもらってロングインタビューをし「私の俳優人生」を大いに語っていただいた。次号から連載。

（赤松比洋子）

〔原稿の送付について〕

・次号（7月号）の締切は5月20日です。

戯曲などは作品ができたときにすぐ送ってください。また、劇評なども各劇団で依頼して上演が終わり次第送ってください。

①劇団通信および舞台写真は、
〒547—0027
大阪市平野区喜連5—1—45
㈱シイーム内「演劇会議」編集部
担当者　石田 章
TEL　06（6707）3833
FAX　06（6799）3833

②戯曲については、早川昭二編集長または、栗原省へ送ってください。

③それ以外の原稿については、
東会議は東京連絡所　境野　修次
西会議は大阪連絡所　赤松比洋子

早川　昭二　〒168-0063　東京都杉並区和泉1-9-12-201　TEL　03-3323-8943
栗原　省　〒643-0111　和歌山県有田郡吉備町庄684-32　TEL　0737-52-5963　FAX　0737-52-6099
境野　修次　〒272-0136　千葉県市川市新浜1-23-5-103　TEL&FAX　047-356-7217
赤松比洋子　〒663-8141　兵庫県西宮市高須町1-1-11-859　TEL&FAX　0798-45-3307

演劇会議　102号　2000年4月8日発行　定　価　700円（送料240円）

編集長　早川昭二
編集委員　境野修次　石垣政裕　山崎三郎　栗原　省　赤松比洋子　楠本幸男
発行所　〒673-0844　兵庫県明石市東野町1-5-1009　梶 武史　方　TEL/FAX　078-911-1513

誌代振込先（郵便振替）口座番号00200-4-78639
全日本リアリズム演劇会議事務局（〒211-0952　神奈川県川崎市幸区古市場2-109　京浜協同劇団・城谷護）